

平成2年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

—第1分冊—

1991・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

序 文

農業基盤整備事業は、ほ場整備事業のみならず各種の農道整備事業等も含めて多岐にわたっております。また、ここ数年は事業対象地が平野部から山間部へとかなり移行してきた結果、特にほ場整備事業に関してはすでにその最盛期を越えたことと言われてきている状況です。

しかしながら、このような開発事業に伴って新たに発見される埋蔵文化財は、必ずしもその開発事業の量の寡多には関係がなく、あくまでも各々の土地の属性によるものですから、事業量に比例して減少していく性格のものではありません。

埋蔵文化財は現状のままでも保存するのが大前提で、調査さえすれば破壊してもよいというわけでは本来はないのですが、種々の公共事業を進めていくこともわれわれの社会生活にとっては必要なことであります。そのために毎年関係機関のあいだで協議を重ねながら工法上どうしても破壊が避けられないところに限っては発掘調査を実施して記録保存を図るという方法が定着してきています。

十年前と今年度とを比較してみると、総事業面積は約2%増でそれほど極端な増加ではありませんが、事業計画地内において確認された埋蔵文化財は、遺跡面積にしても、実際に調査を実施した面積にしても、2倍に増加しました。様々な問題を抱えながらも、相互の事業が円滑に進められるように最大限の努力を重ねてきている現状です。

以下にご報告する発掘調査結果はいずれも再三にわたる協議の結果、どうしても現状保存が不可能であった遺跡の記録であり、願わくばこの成果が広く歴史学習の場において活用されますことを切望致します。

最後に、文化財保護法の精神を尊重され、協議から発掘調査に至るまで、多大のご理解とご協力をいただいた農林水産部の各関係機関の方々、また現地での調査に当たっては各々の土地改良区を始め地元のかたがたの温かいご助力を頂きましたことにたいして、末筆ながら深甚の謝意を表します。

平成3年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中 林 昭 一

目 次

I	前言	1
II	橋門・長法寺4号墳	9
III	別所遺跡	29
IV	河崎遺跡	31
V	三行城跡	33
VI	天白遺跡	35
VII	西の垣内遺跡	39
VIII	八幡（北家城）遺跡	43
IX	上ノ垣外遺跡	55
X	御所裏遺跡	71
XI	小倉遺跡	77
XII	間田遺跡	89
XIII	畔垣内遺跡（A地点）	95
XIV	印代東方遺跡群・出晴遺跡	111
XV	宮山遺跡・堂ノ前遺跡	115

例 言

1. 本書は平成2年度農業基盤整備事業地域内における埋蔵文化財の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。
3. 調査体制は下記によった。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
調査協力	三重県農林水産部農村整備課、耕地課、畜産課 各農林事務所 各土地改良区 各市町村教育委員会 財団法人三重県農業開発公社
4. 各遺跡の整理・報文執筆作成は基本的に調査担当者が当たった。文末にその執筆者名を記した。
5. 本書で用いた遺構表示略記号は下記により、図面における方位は特に断らない限りは磁北である。

SB	： 堅穴住居・掘立柱建物、
SD	： 溝・堀、
SE	： 井戸、
SK	： 土坑、
SF	： 焼成坑、
SA	： 柱列・欄・塀、
SX	： 墓・その他
6. 本書に使用した航空写真（一部）、事業計画図面は農林水産部の提供による。
7. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

図 版 目 次

PL. 1	II 橋門遺跡・長法寺4号墳	遺構	27
PL. 2	〃	出土遺物	28
PL. 3	VI 天白遺跡	航空写真	37
	〃	B地区発掘調査風景	37
PL. 4	〃	遺構・遺物写真	38
PL. 5	VII 西の垣内遺跡	遺構・遺物写真	42
PL. 6	VIII 八幡(北家城)遺跡	遺構写真	53
PL. 7	〃	出土遺物写真	54
PL. 8	IX 上ノ垣外遺跡	遺跡全景	63
	〃	調査後全景	63
PL. 9	〃	SD4 遺物出土状況	64
	〃	SD4	64
PL.10	〃	調査風景	65
	〃	SK1, SE2・3	65
PL.11	〃	SE6	66
	〃	SE3	66
PL.12	〃	出土遺物	67
PL.13	〃	出土遺物	68
PL.14	〃	出土遺物	69
PL.15	〃	墨書土器	70
	〃	須恵器のヘラ記号	70
PL.16	X 御所裏遺跡	写真	76
	〃	写真	76
PL.17	XI 小倉遺跡	遺構写真	87
PL.18	〃	遺物写真	88
PL.19	XII 間田遺跡	調査前全景	93
	〃	遺跡全景	93
PL.20	〃	西区調査後全景	94
	〃	東区調査後全景	94
	〃	立会調査後全景	94
	〃	本調査西区出土遺物	94
PL.21	XIII 畦垣内遺跡(A地点)	遺跡西半分	107
	〃	SB2~6	107
PL.22	〃	SB16~20	108
	〃	SB17	108
PL.23	〃	SB17 調査後	109
	〃	SB11-P1・SB17-P1遺物出土状況	109
PL.24	〃	遺物写真	110
PL.25	XIV 印代東方遺跡群・出晴遺跡	調査後写真	114

挿 図 目 次

I 前行	
※ [試掘調査 調査区位置図]	
第1図 西野々遺跡	4
第2図 井瀬陸・向外遺跡	4
第3図 藤倉遺跡	5
第4図 藤倉北遺跡	5
第5図 杉谷・セリ谷遺跡	5
第6図 弥五郎垣内・天白遺跡	5
第7図 東浦遺跡(美里村)	6
第8図 本郷遺跡	6
第9図 東浦遺跡(明和町)	6
第10図 大足・ハサマ・角出遺跡	6
第11図 下村B遺跡	6
第12図 下出川原遺跡	7
第13図 森前遺跡	7
第14図 中村遺跡	7
第15図 北山遺跡	7
※ [本調査]	
第16図 本調査遺跡分布地図	8
II 橋門遺跡・長法寺4号墳	
第17図 遺跡位置図	9
第18図 遺跡地形図	11
第19図 調査区位置図	11
第20図 遺構平面図	12
第21図 長法寺4号墳調査前	13
第22図 長法寺4号墳調査後	14
第23図 長法寺4号墳第2主体部	15
第24図 土層断面図・遺構実測図	16
第25図 遺物実測図	18
第26図 遺物実測図	19
第27図 遺物実測図	20
第28図 遺物実測図	21
III 別所遺跡	
第29図 遺跡地形図	29
第30図 発掘区平面図	30
IV 河崎遺跡	
第31図 遺跡位置図	31
第32図 調査区位置図	31
第33図 包含層出土遺物実測図	32
V 三行城跡	
第34図 遺跡位置図	33
第35図 調査区位置図	33
第36図 遺構平面図	34
VI 天白遺跡	
第37図 調査区位置図	35
第38図 遺構実測図	36
第39図 遺物平面図	36
VII 西の垣内遺跡	
第40図 遺跡位置図	39
第41図 遺跡地形図	40
第42図 調査区位置図	40
第43図 遺物実測図	41
第44図 遺構平面図	41
VIII 八幡(北家城)遺跡	
第45図 遺跡位置図	43
第46図 遺跡地形図	44
第47図 調査区位置図	45
第48図 遺構平面図(折込)	47, 48
第49図 集石遺構	49
第50図 A・B地区遺物実測図	50
第51図 A地区遺物実測図	51
IX 上ノ垣外遺跡	
第52図 遺跡位置図	55
第53図 遺跡地形図	56
第54図 発掘区位置図	57
第55図 遺構平面図	58
第56図 S E 3 実測図	59
第57図 出土遺物実測図	60
第58図 出土遺物実測図	61
X 御所裏遺跡	
第59図 遺跡位置図	71
第60図 遺跡地形図	72
第61図 調査区位置図	73
第62図 遺構平面図	74
第63図 出土遺物実測図	75
XI 小倉遺跡	
第64図 遺跡位置図	77
第65図 遺跡地形図	78
第66図 調査区位置図	79
第67図 遺構平面図	80

第68図	遺物実測図82
第69図	遺物実測図83
Ⅶ	開田遺跡	
第70図	遺跡位置図89
第71図	遺跡地形図90
第72図	発掘区位置図91
第73図	西区出土遺物実測図92
Ⅷ	畦垣内遺跡 (A地点)	
第74図	遺跡位置図95
第75図	遺跡地形図96
第76図	発掘区平面図96
第77図	遺構平面図 (折込) 97,98
第78図	S B 2 ~ 8 実測図101
第79図	S B 2 1・2 2 実測図102
第80図	S B 1 6 ~ 2 0 実測図102
第81図	SB11-P1,SB17-P1遺物出土状況実測図	102

第82図	S B 1 7 検出状況実測図・土層図103
第83図	遺物実測図 (1)105
第84図	遺物実測図 (2)106
Ⅸ	印代東方遺跡群・出晴遺跡	
第85図	遺跡地形図111
第86図	出晴遺跡調査区位置112
第87図	印代東方遺跡群調査区位置図112
第88図	遺構平面図113
第89図	遺物実測図113
Ⅹ	宮山遺跡・堂ノ前遺跡	
第90図	遺跡地形図115
第91図	遺跡位置図115
第92図	堂ノ前遺跡 S B 1 実測図116
第93図	発掘区平面図116
第94図	遺構平面図117

表 目 次

第1表	現地説明会一覧1
第2表	農業基盤整備事業地内遺跡一覧 2, 3
Ⅱ	橋門遺跡・長法寺4号墳	
第3表	遺物観察表 №124
第4表	遺物観察表 №225
第5表	遺物観察表 №326
Ⅲ	上ノ垣外遺跡	
第6表	上ノ垣外遺跡試掘調査結果一覧62

Ⅹ	御所裏遺跡	
第7表	試掘調査結果一覧表72
Ⅺ	小倉遺跡	
第8表	瓦器皿・土師器皿観察表83
Ⅻ	畦垣内遺跡 (A地点)	
第9表	竪穴住居一覧表100
第10表	出土遺物遺構対照表106
第11表	S B 1 7 出土遺物集計表106

前 言

1. 調査に至る経緯

平成2年度県営ほ場整備等の事業計画地内における埋蔵文化財の事前調査を、平成元年9月に寄せられた回答に基づいて実施した。

事業計画予定地は全部で47地区、総面積にして700haにおよぶものであった。11月から翌年1月までの約3ヶ月間、分布調査（第1次調査）を実施した。その結果、平成2年1月から2月の間に合計52ヶ所約9,600㎡の試掘調査（第2次調査）を実施し、それぞれの遺跡範囲の暫定的な確定を行った。現状保存が必要な遺跡の範囲を農林水産部へ通知して盛り土対応等による設計変更を要請した。都合3回にわたる協議の結果、最終的に17遺跡、33,000㎡の本調査と19遺跡、7,400㎡の立会調査に絞られた。

2. 本年度の調査

4月中旬に農村整備課と発掘調査の年間計画を協議し、上半期の調査を5月連休明けから開始することにした。本調査では橋門遺跡（長法寺4号墳を含む）、打田遺跡、北野遺跡、浮田B遺跡、高賀遺跡（浮田C遺跡）、才良遺跡、沢田遺跡、間田遺跡、畔垣内A遺跡、小倉遺跡が対象となった。別所遺跡、三行城跡、河崎遺跡の立会調査も併行して行なうことになった。

特に話題を呼んだのは北野遺跡で、7世紀後半から8世紀前半代を中心とする土師器の焼成坑が46基検出され、伊勢神宮や斎宮との関連で注目すべき遺跡が一つ増えたことと、畔垣内A遺跡では5世紀末の焼失堅穴住居が検出され、削平を免れた床面に蓋で密閉された須恵器杯が置かれており、中に当時の食物と推定される固形物が蒸焼き状態で残存していたことである。その分析を現在依頼中で、結果については、可能ならば機を改めて紹介したい。

また、高賀遺跡では4世紀から5世紀にかけての古式土師器を伴う幅15～16mの溝が検出されたが、ここからは扉等の建築部材をはじめ多量の木製品も出土した。これらの木製品は該時期の貴重な資料になるであろう。

8月下旬から下半期の調査に入り、本調査としては上ノ垣外遺跡、伊勢寺遺跡、八幡遺跡（北家城遺跡）、森脇遺跡（第3次）、伊賀国府推定地遺跡、また嬉野町教育委員会の調査協力を得て弥五郎垣内遺跡がそれぞれ開始された。更に、養村大塚遺跡、中里遺跡、御所裏遺跡、天白遺跡、西の垣内遺跡、小倉遺跡、間田遺跡、印代東方遺跡、出晴遺跡、宮山遺跡、堂の前遺跡の立会調査を相前後して実施した。

森脇遺跡は昭和63年度から継続する第三次調査である。ここは一部を上野市教育委員会が昭和63年、平成元年に調査しているほか、未探採の農免道路部分が未調査のままである。過去の調査では、古墳時代から奈良時代の遺構が顕著で、中でも遺跡内に残る伝承地「あはれその森」に接して検出された奈良時代の掘立柱建物の一部は現地保存の方策を取ったほどである。

今年度は古墳時代から奈良時代のほかに、平安時代後期から鎌倉時代にかけての建物を確認され、遺構の時代幅が広がった。奈良時代の建物は柱掘形の一辺が70cm前後という、地方官衙にふさわしく立派なもので、まとまりのある建物群が特定できる可能性がある。土馬、円面硯、墨書土器などの出土遺物を加味すると、伊賀郡衙候補地の一つに掲げ得る遺跡であろう。

伊賀国府推定地遺跡の調査は国町川の東、外山地区の全域にトレンチ及びグリット調査区を設定した

遺 跡 名	調 査 期 間	現 地 説 明 会	参 加 者 数
橋 門 遺 跡	2年5月7日～7月3日	7月10日	18人
北 野 遺 跡	5月7日～7月31日	7月7日	150人
打 田 遺 跡	5月28日～7月31日	7月22日	40人
浮 田 遺 跡	5月7日～6月20日	7月1日	100人
畦 垣 内 遺 跡	5月7日～7月27日	6月30日	30人
森 脇 遺 跡	8月23日～3年1月29日	1月26日	120人
伊 賀 国 府 遺 跡	9月5日～3年3月1日	1月19日	300人

第1表 現地説明会一覧

事業名	管 轄	地 区	面 積 ha	遺 跡 名	所 在 地	遺跡面積	措 置		
県 園	桑名農政	藤原中部	30.0	溝上遺跡	員弁郡藤原町本郷字溝上	6400.0	事業中止発掘せず		
		藤原東部	10.0		員弁郡藤原町上之山田他				
		員 弁	23.7		員弁郡員弁町上笠田				
		十社北部	23.9		員弁郡北勢町川原				
公害防除	同	西員弁	39.5	向外遺跡	員弁郡藤原町西野尻	19200.0	麦刈り後試掘・盛土対応		
				井瀬陸遺跡	同 大員戸字向外			16000.0	
農道 免路	同	藤原西部Ⅱ期	L=960m	精好遺跡	同 字井瀬陸	40000.0	事業地内盛土対応		
					員弁郡藤原町野尻				
県 園	四日市農林	八 風	20.0	勝部遺跡	三重郡菟野町田光字勝部	15000.0	事業中止試掘せず		
				姫塚遺跡	三重郡菟野町田光字勝部	100.0	事業中止試掘せず		
				火穴遺跡	同 小島字東畑	100.0	事業中止試掘せず		
		合川下之庄	6.0	別所遺跡	鈴鹿市三宅町別所	4000.0	立会調査 550㎡		
				長法寺4号墳	鈴鹿市三宅町橋門		本調査 1200㎡		
		遺伯住吉	30.0		鈴鹿市道伯町/住吉町				
		四日市南部	21.0		四日市市山田町				
		龜山南部	23.0		龜山市管内町/阿野田町				
		県 園	津 農 林	大 里	22.5	西野々遺跡	津市大里山室町西野々		工事可 立会調査 75㎡
						河崎遺跡	津市大里結合町河崎		
穴倉川沿岸	12.4				安芸郡安濃町大字神田				
家 城	15.4			杉谷遺跡	一志郡白山町藤字杉谷	5000.0	工事可 工事可 立会調査 240㎡		
				セリ谷遺跡	一志郡白山町藤字セリ谷				
				西の垣内遺跡	同 南家城字西の垣内				
八幡遺跡				同 北家城字八幡	18800.0	本調査1600㎡、立会調査880㎡			
中 郷	14.0			弥五郎垣内	一志郡緒野町弥五郎垣内	30300.0	本調査2100㎡(緒野町教委)		
天白遺跡				一志郡緒野町天白	32700.0	立会調査 900㎡			
久居Ⅱ期	5.0				久居市大島町向広				
久 居	28.0	藤倉遺跡	久居市福業町藤倉	2400.0	工事可 盛土対応				
藤倉北遺跡	久居市福業町藤倉								
美里中南部	10.4	東浦遺跡	安芸郡美里村南長野		工事可				
河芸北部	23.0	三行城址	安芸郡河芸町三行	1640.0	工事可 工事可 立会調査 200㎡				
			安芸郡河芸町三行						
芸濃北部	20.0		安芸郡芸濃町椋本						
農免道路	同	大 里	L=500m		津市大里町室町				
灌溉排水	同	中 勢	L=3000m L=4000m L=1000m		芸濃町椋本～中編 安濃町安濃～津市高茶屋 河芸町三行～上野				
広城農道	同	中 勢		赤坂遺跡	安芸郡芸濃町岡本字赤坂	3000.0	本調査1100㎡ (協力 津市教委、芸濃町教委)		
県 園	松阪農林	明 星	19.8	本郷遺跡	多気郡明和町本郷	107500.0	平成3年度送り		
				養村大塚遺跡	同 養村	21600.0	立会調査 70㎡		
北野遺跡	同 北野			496800.0	本調査 3500㎡				
池田A/B遺跡	同 養村				工事可				
東浦遺跡	同 本郷				工事可				
坂内川左岸	31.7	大足遺跡	松阪市大足町	15000.0	工事対応				
		角出遺跡	松阪市大足町	3800.0	工事対応				
		ハサマ遺跡	松阪市大足町	900.0	工事対応				
		打田遺跡	松阪市岡本町	5300.0	本調査 2130㎡				

第2表 農業基盤整備事業地内遺跡一覧

事業名	管 轄	地 区	面積 ha	遺跡名	所 在 地	遺跡面積	措 置
県 園	松 阪 農 林	堀坂川	5.7	伊勢寺遺跡	松阪市伊勢寺町	40000.0	
		西黒部	50.4		松阪市高須町		
		横 殿	14.2		松阪市保津町		
		八幡沖	14.9		松阪市笹川町/西野町		
		荒 蒔	7.5	九十九戸遺跡 柚木元遺跡 上ノ垣外遺跡	多気郡多気町荒蒔 多気郡多気町荒蒔 多気郡多気町荒蒔	6400.0	工事可 工事可 本調査 2130㎡
		丹 生	16.9	下村B遺跡	多気郡勢和村丹生		工事可
県 園	伊 勢 農 林	村 松	27.3		伊勢市村松町		
		中 川	10.0	森前遺跡	度会郡度会町麻加江		工事可
		一之瀬	24.0	御所裏遺跡	度会郡度会町臨江	17650.0	立会調査 120㎡
		磯部西部	4.3		志摩郡磯部町		
畜環	同	度 会	1.1	中里遺跡	度会郡大宮町永会	10000.0	立会調査 200㎡
農免	同	磯部浜島 Ⅱ期	L=150m		志摩郡磯部町穴川		
県 園	上 野 農 林	河 合	8.0	小倉遺跡	阿山郡阿山町馬場字小倉	8500.0	
		上野北部	47.0	印代東方遺跡	上野市印代・西条・土橋	12800.0	立会調査 2220㎡
				出晴遺跡	上野市一之宮	10000.0	立会調査 300㎡
				間田遺跡	上野市服部町字間田	15000.0	本調査 440㎡
		上野東部	15.0	宮山遺跡	上野市上友生字宮山	15000.0	立会調査 2000㎡
				堂之前遺跡	同 字堂之前	2800.0	立会調査 650㎡
		上野南部 第二	40.0	轟脇遺跡	上野市市部字轟脇	11000.0	本調査4000㎡
				澤田遺跡	同 字澤田	80000.0	本調査2355㎡、立会調査175㎡
		上野南部 第三	38.0	才良遺跡	上野市才良	80000.0	本調査 2010㎡、立会調査2290㎡
				浮田B遺跡	上野市上神戸	70000.0	本調査1600㎡、立会調査910㎡
				高賀遺跡	上野市上神戸	12000.0	本調査2200㎡、立会調査1050㎡
柘植川沿岸	15.0	野垣内遺跡	阿山郡伊賀町南出		本調査2000㎡		
上 津	12.0	北山遺跡	名賀郡青山町北出		工事可		
赤 目	5.0	中村遺跡	名張市中村		工事可		
滝之原	14.0		名張市滝之原				
揮 染 油 税 農 園	上 野 農 林	大 山 田 南部Ⅳ期	L=890m		阿山郡大山田村下阿波 富水		
		上野南部 Ⅱ期	L=600m		上野市上林・古郡		
		上野南部	L=459m		上野市下神戸・上林		
広 域 農 園	上 野 農 林	伊 賀	L=2500m L=1900m		上野市西高倉 上野市長田		
		伊賀Ⅱ期	L=1550m		名張市上小波田・滝之原		
原 圃	尾鷲農林	紀伊長島	19.0		紀伊長島町前山		
揮 染 油 税 農 園	尾鷲農林	赤 羽			紀伊長島町島地		
		赤羽Ⅱ期	L=190m		紀伊長島町島地		
一 般 農 園	尾鷲農林	古里Ⅱ期			北牟婁郡紀伊長島町古里		
県 園	熊 野 農 林	市 木	16.0		南牟婁郡御浜町コウロ 市木地内及び		
		相野谷	3.4		南牟婁郡紀宝町平生井地内		
一 般 農 園	熊野農林	志 原	L=200m		南牟婁郡御浜町志原地内		
高 登 総 合	熊野農林	青 生	3.9		熊野市育生町地内		

(本表作成には、本年度研修生小川尊哉氏の協力を得た。)

ほか、川西の坂の下地区では昨年度の成果に基づき15m×15mの面的調査区を3ヶ所設定し、同時に東条地区までの間に東西トレンチを入れた。

外山地区では山ぎわの一番高い所にも遺構のあることが判明し、緑釉陶器も出土した。また荷札と考えられる木簡が出土したことは大きな成果であった。坂の下地区では昨年度に検出された一辺1mを超える大型の柱穴につながる位置に更に4間同様の柱穴が検出されるなど、今後の調査の指針となる成果を得たことは確かな前進であった。しかしこの種の遺跡では中枢部を把握するまでに10年前後の歳月を要するのが通例で、は場整備と発掘調査のあり方について十二分の配慮と方策が求められている。

3. 今後の課題

県営は場整備等の事業が進行する中で、我々が直面している大きな課題の一つを以下に述べたい。

事業の進展はかつての農村の景観を一変させた。畦路も字界も目印になってきた立木も、時には山さえも既に姿を消した。変わって直線道路と排水溝、規格整然とした田畑が広がっている。一方我々の手元にある遺跡地帯は旧態依然として古い景観をとどめている。現状保存をしてきた周知の遺跡は今の辺りに眠っているのか、10年後に再び開発事業が興った場合如何に対処し得るか、ふとそんな不安が頭をよぎる。

盛り土対応等で現状保存したはずの遺跡の箇所がきちんと新しい地形図面上にマークされ、試掘調査の記録と同時に保管される必要がある。そのためには毎年の最終的な施工図面上に遺跡の範囲を逐一落し直す作業を進めなければならない、必要な図面を年度毎に確実に入手するシステムの確立も急がねばならない。(田阪 仁)

第1図 西野々遺跡 (1:5,000)



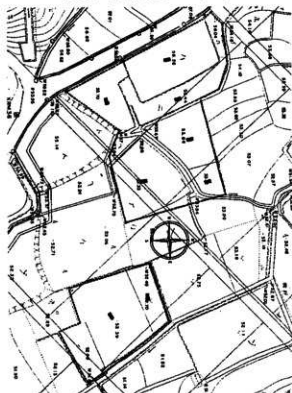
17ヶ所の試掘範囲には遺構遺物を認めず。

第2図 井瀬陸・向外遺跡 (1:2,000)



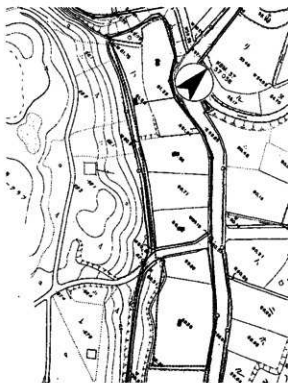
38ヶ所試掘。全面盛り土対応。

第3図 藤倉遺跡 (1:2,000)



8ヶ所の試掘範囲内に遺構・遺物を認めず。

第4図 藤倉北遺跡 (1:2,000)



16世紀代の集落跡の可能性。
全面工事対応により調査せず。

第5図 杉谷・セリ谷遺跡 (1:5,000)



試掘坑ないには顕著な遺構・遺物なし。
第6図 弥五郎堀内・天白遺跡



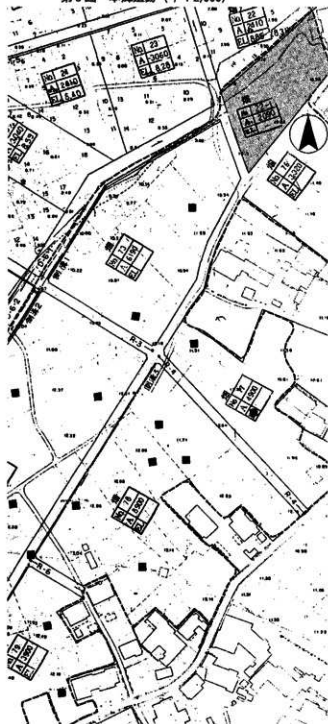
弥五郎堀内遺跡：2100㎡本調査（埴野町教委）
天白遺跡：900㎡立会調査。他は工事対応。

第7図 東浦遺跡(美里村) (1:2,000)



3ヶ所試掘坑内に遺構認めず。

第8図 本郷遺跡(1:2,000)



事業を平成3年度送り。

第9図 東浦遺跡(明和町) (1:2,000)



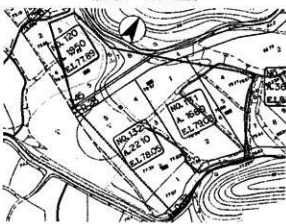
6ヶ所の試掘坑内に遺構・遺物を認めず。

第10図 大足・ハサマ・角出遺跡(1:5,000)



3遺跡とも全面工事対応。

第11図 下村B遺跡



顕著な遺構・遺物を認めず。

第12図 下出川原遺跡 (1 : 2,000)



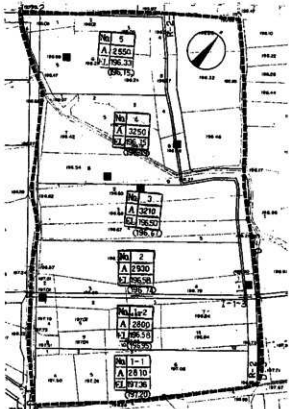
試掘坑内では顕著な遺構・遺物を認めず。

第13図 森前遺跡 (1 : 5,000)



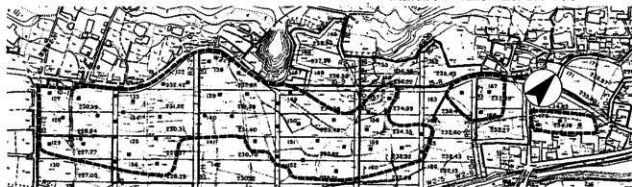
顕著な遺構・遺物を認めず。

第14図 中村遺跡 (1 : 2,000)



試掘坑内では遺構・遺物を認めず。

第15図 北山遺跡 (1 : 5,000)

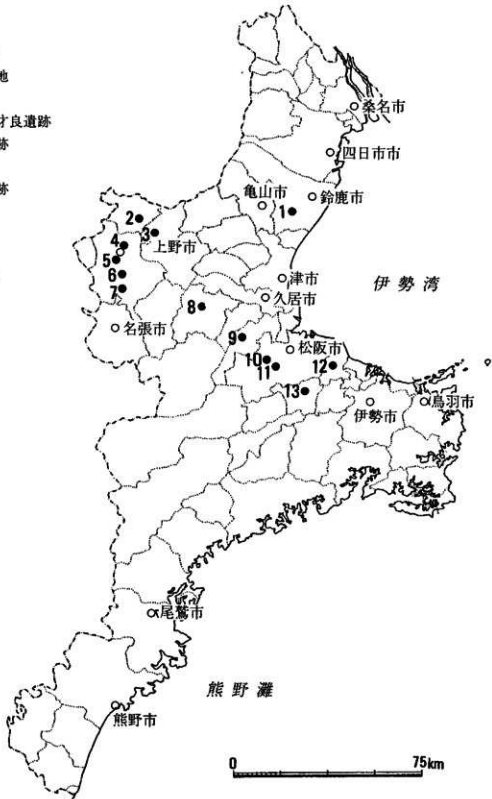


試掘坑内では顕著な遺構・遺物を認めず。

本調査遺跡分布地図



1. 橋門遺跡
2. 小倉遺跡
3. 畦垣内A遺跡
4. 伊賀国府推定地
5. 間田遺跡
6. 森脇・沢田・才良遺跡
7. 浮田・高賀遺跡
8. 八幡遺跡
9. 弥五郎垣内遺跡
10. 伊勢寺遺跡
11. 打田遺跡
12. 北野遺跡
13. 上ノ垣外遺跡



第16図

II 鈴鹿市三宅町 はしかど ちょうぼう じ 橋門・長法寺4号墳

1. 位置と環境

橋門遺跡・長法寺4号墳(1,2)は、鈴鹿市の南西部、三宅町橋門に所在する。関町の鐘ヶ岳に端を発する中ノ川下流域左岸の標高約19mの河岸段丘上に位置する。

当遺跡の周辺には、数多くの遺跡が確認されている。弥生時代の小山遺跡(13)、弥生～古墳時代の西川原遺跡(9)、古墳時代の新地A・B遺跡(8)一色A・B遺跡(7)、狐谷遺跡(12)、金提遺跡(14)、畑虎遺跡(19)がある。古墳時代以降のものとしては、当遺跡の北では古墳～鎌倉時代の奥北代遺跡(31)、長広A・B遺跡(33)、長畑遺跡(34)などがあり、南では古墳～中世にかけての遺

跡として、東代A・B遺跡(30)、口玉野A・B遺跡(28)、奥玉野A・B遺跡(29)などがある。特に中世城跡として、長法寺城跡(20)、三宅城跡(23)、三宅西城跡(11)が当遺跡の南北にある。

昭和60年に始まった限営ほ場整備事業に伴い、寺門遺跡(15)、西垣内遺跡(16)、桑名垣内遺跡(18)、加和良神社遺跡(21)、敷田遺跡(24)、別所遺跡(25)などが調査されている。なかでも寺門遺跡では古墳時代の堅穴焼失家屋、西条遺跡(10)では縄文時代中期の堅穴住居が確認されている。

流域一帯に目を移すと、縄文時代の追谷遺跡(45)、弥生時代の畑遺跡(42)、方形周溝墓が確認された



第17図 遺構位置図 1 : 50,000 (国土地理院 龜山、椋本、鈴鹿、白子 1 : 25,000から)

塚腰遺跡(43)などがある。古墳～奈良平安時代以降になると各所に遺跡が出現するが、なかでも三宅町より東方へ4kmの郡山町の丘陵上に所在する末野A・B・C遺跡(44)、西高山A・B・C遺跡(45)などの郡山遺跡群からは、奈良時代を中心として平安～鎌倉時代の掘立柱建物群が多数確認されており、菟裘都衙跡という推定もなされている。また、中ノ川左岸の丘陵をへだて、北へ4kmの所には伊勢国府の所在地と推定される同市国府町がある。

このように各時代を通じて、多数の遺跡が確認されているが、特にこの地域における特徴的な遺跡は古墳時代の窯跡であろう。東西に連なる丘陵を利用して、徳居町～安芸郡河芸町には、伊勢国須恵器生産の一大拠点であった徳居古窯跡群(28)が点在し、稲生町には稲生古窯跡群(41)がある。徳居古窯跡群は、すでに破壊されたものや記録のものも多く、本格的な調査研究が待たれる。

これら須恵器の供給源とあわせて、古墳群の存在

も注目されるであろう。当遺跡の北には、長法寺1号墳(17)、今回の調査区には、長法寺4号墳、東には加和良1号墳・2号墳(22)があり、これらは県営は場整備事業に伴い調査されている。特に加和良1号墳は、複数の主体部と豊富な副葬品が確認されている。

また当遺跡をとり巻く古墳群として、八野古墳群(5)、西野古墳群(4)、保子里古墳群(3)愛宕山古墳群(6)、北東に奥北代古墳群(33)池ノ杭古墳群(36)、鎌谷古墳群(37)、一本松古墳群(38)、蛇谷古墳群(39)、野田口古墳群(40)が中ノ川左岸に存在している。右岸では別所古墳群(26)、徳居古墳群(27)が存在している。

中ノ川は、北方を流れる鈴鹿川に比べて流域も狭く、当遺跡のある三宅町付近が古墳分布の最上段とされている。さらに近年までは中ノ川中、下流域には条理制に伴う地制りが残存しており、この地域が古代政治文化の先進地であったことがうかがえる。

2. 遺 構

調査区は昭和61年度の調査区の西となりにある。周囲はすべては場整備が完了して、水田面との比高差は約2.5mである。以前は畑地であったが、現状は荒地である。なお、今回の調査区と、前回のそれとは、図面上で最大約6mの隔りがある。

当遺跡の基本層序は第1層：暗灰褐色砂質土(表土)、第2層：黄褐色砂質土(床土)、第3層：暗褐色砂質土(遺物包含層)、第4層：黄褐色砂質土(地山)である。第4層はととところろにレキの混入がみられ、調査区の東方ほど砂質が強くなる傾向がみられた。地山までの深さは40cm～60cmである。

A. 古墳時代の遺構

(1) 長法寺4号墳

〔墳丘〕 現状は東西約10m、南北約7.8mの楕円形で裾部がかなり削平されていた。特に東部と南部の削平はかなりひどく、南部から南西部にかけて検出できた墳丘基部や周溝は確認できなかった。

しかし、一部検出できた周溝および墳丘基部から推定すると、径約16mの円墳であったと思われる。

墳丘の比高は約2.7mであるが、墳頂部では20cmの表土下に50cm程の厚さでレキ混り砂土があり、それは墳丘西側に掘られた盗掘坑の埋土でもあった。盗掘坑からは、須恵器片に混じって黒色土器、山茶碗が出土した。

また、現存する墳丘の裾部には後世の土取りのため幅約1.3m、深さ約50cmの溝状の掘り込みがあり中から現代のビン、アルミ製品が見つかった。

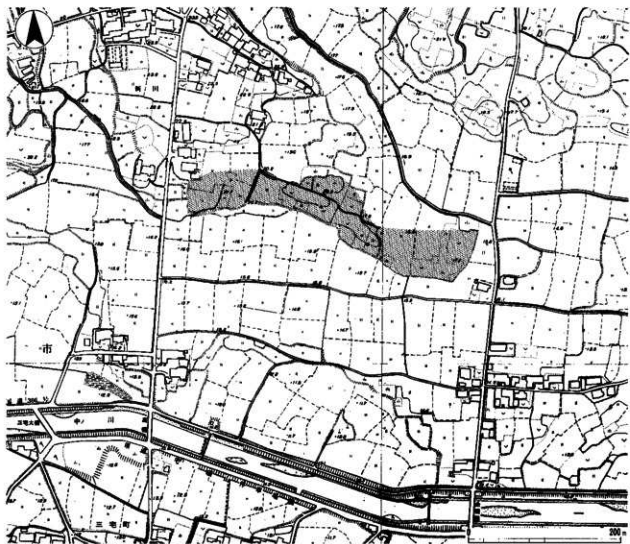
検出された周溝はかなり削平を受けていた箇所もあるが、最大幅4m、最深部40cmを測る。隣接して検出した長法寺10号墳の周溝とは重複しない。

葦石・埴輪の存在は墳丘削平のため不明である。

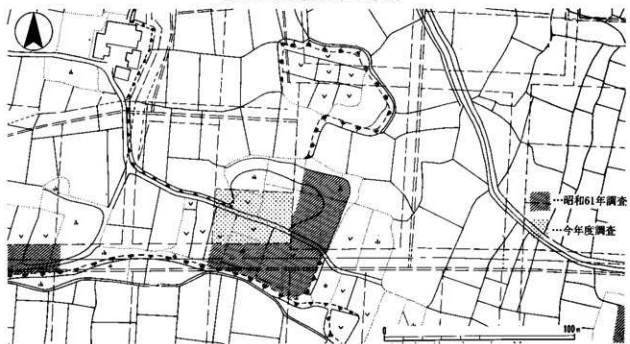
〔内部構造〕

主体部は2基あったと考えられる。いずれも東西方向に長軸を持ち、南北に並んで置かれてたようである。以下では、北側主体部を第1主体部、南側主体部を第2主体部として記述する。

第1主体部は墳丘の北側斜面で確認された。削平されて原形をとどめていないので、あえて図示しなかった。直刀一振が刃部を上にした状態で出土した



第18図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第19図 調査区位置図 (1 : 2,000)

が、その周辺のみがほぼ現位置を保っていると思われる。周辺には粘土の塊がほぼ同じレベルで散乱しており木棺を被覆した粘土の一部であると思われる。

第2主体部は墳丘のほぼ中央部に位置する。墳頂下約1.9mで検出した。西側と中央部に盗掘坑、東側は土取り削平のため全体の形状規模は不明であるが、長さ4m以上、幅は1.8m程、検出面からの深さは20cm程である。棺床はほぼ平らでU字形に凹み、

北側は不明であるが南側の棺側にはり付けたと思われる厚さ5cm程の粘土がゆるく内弯していることから、割竹形木棺が掘えられていた可能性がある。

現存の棺の長さは2m強、幅は60cm弱であり、棺上部を被覆した粘土の存在の有無は不明である。副葬品は総じて少量で、須恵器壺、川原石製の王、鉄刀、刀子であった。なお、当主体部直下に径70~80cm、深さ5cm程の焼土坑が見られた。これが古墳築造に関係するものか否かは不明である。



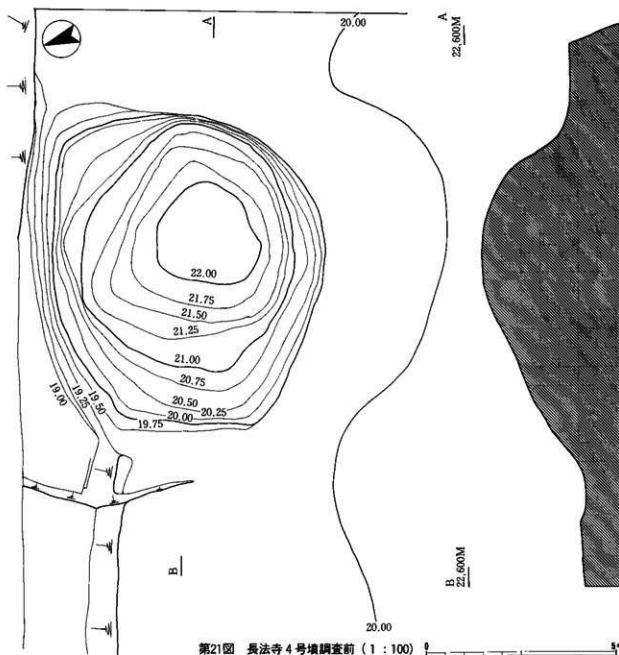
第20図 遺構平面図(1:200)

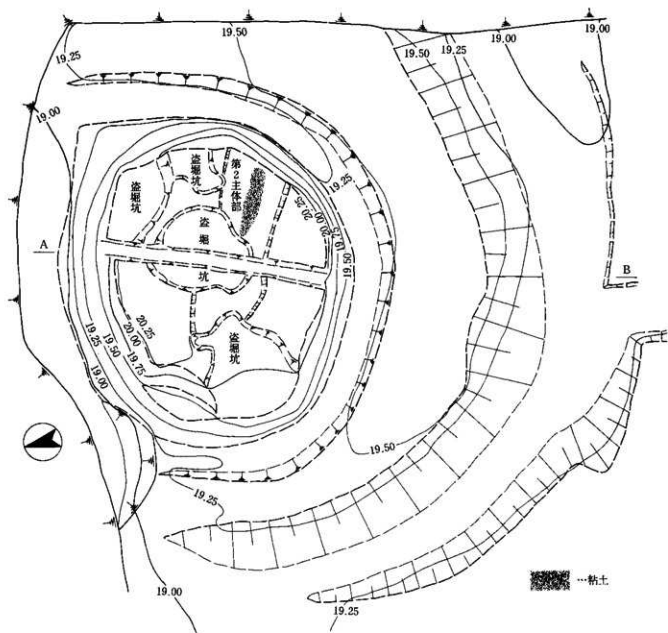
(2) 長法寺10号墳

調査区の西半分、長法寺4号墳の南西に接する形で検出された。墳丘北西部分は、地山面がかなりのレキ層であったため、検出が不可能であったが、推定径約16mの円墳である。墳丘部はかなりの削平をうけており、墳丘基部より30~40cm程の盛り上がり認められる程度である。墳丘上では何度も精査を行ったが、東端部をのぞいて、後世の遺構はさほど多く見られなかった。周溝についても前述したレキ層のため、東西に分割された形で検出された。西側周溝SD1は幅約1.2~2m、深さは約80cm~1mで、北端は地山面レキ層のため検出不能、南端はまっ

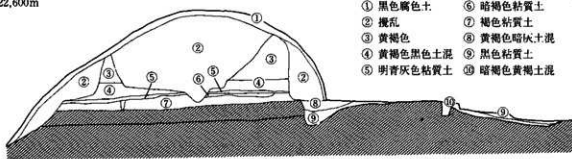
すぐに調査区外に延びる。調査区南端より約6mの部分は、古墳の墳丘には沿わず、また溝全域より須恵器片、鉄刀片も出土しているが、同時に山茶碗、陶器片なども出土している。これらのことから当遺構は、周溝を後世に掘り直して作られたものと考えられる。

東側周溝SD2は、墳丘東側に沿う形で検出された。幅3~4m、最深部50~60cm程で底部は船底状を呈す。北部は前述したようにレキ層のため検出不能、南部は調査区南端より約1mで終わっている。埋土は暗褐色砂質土で多量の須恵器破片が出土している。





A
22,600m



- | | |
|-----------|------------|
| ① 黑色腐色土 | ⑥ 暗褐色粘質土 |
| ② 攪乱 | ⑦ 褐色粘質土 |
| ③ 黄褐色 | ⑧ 黄褐色腐灰土混 |
| ④ 黄褐色黑色土混 | ⑨ 黑色粘質土 |
| ⑤ 明青灰色粘質土 | ⑩ 暗褐色黄褐色土混 |

第22図 長法寺4号墳調査後 (1:100)

(3) 土坑

SK 1 調査区西端のほぼ中央部で検出された。

南北約3m、東西1.2m以上の長円形を呈し、深さ20cm程である。埋土は暗褐色砂質土で、埋土中より古墳時代の須恵器の杯身、杯蓋が出土した。

SK 2 調査区南西端で検出された。南半が調査区外であるため全体の規模は不明であるが、最大幅6m程、深さ1.3m程の不定形であり、埋土は黒褐色砂質土であった。出土遺物は還元不足の須恵器杯身、杯蓋片、須恵器壺片である。

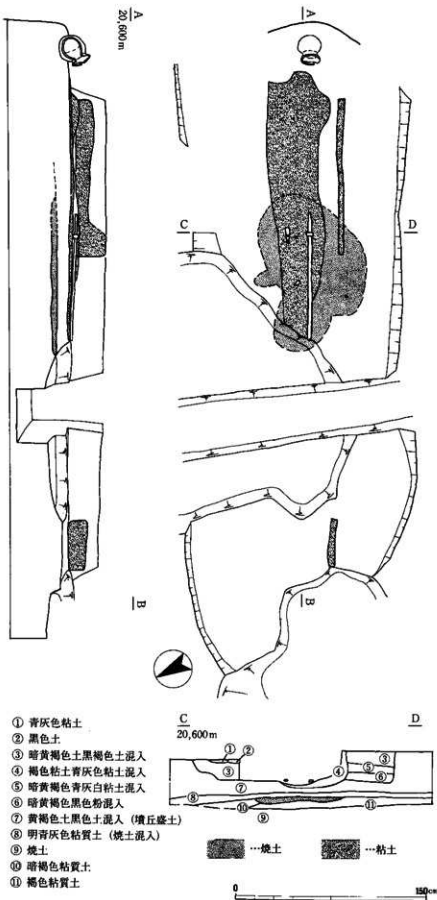
SK 3 長法寺10号墳の墳丘上で検出された。径50cm程の不正円形を呈し、深さ50cm。埋土は、赤褐色の焼土でわずかに黒色の炭化物が混入している。埋土中より還元焼成不足の須恵器壺片、土師器壺片が出土している。当遺構の成立が古墳築造前のものであるか否か、また古墳築造前ならば直接古墳築造に関係するものか否かは不明である。

SK 5 調査区北端のほぼ中央部、長法寺4号墳の西隣で検出された。北半分は、攪乱により壊されていると考えられるが、南半分は、一辺約4mの隅丸方形を呈し、深さは20~30cm程である。埋土は暗褐色砂質土であり、埋土中より甕の体部が出土している。

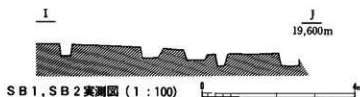
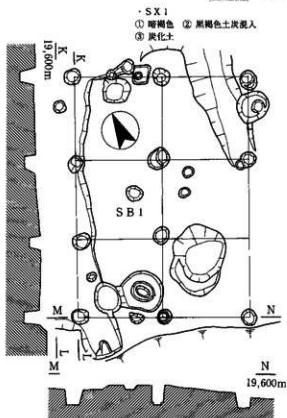
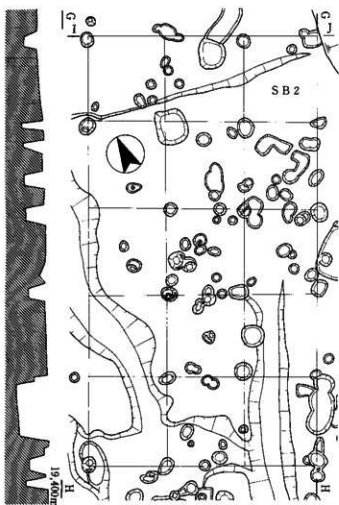
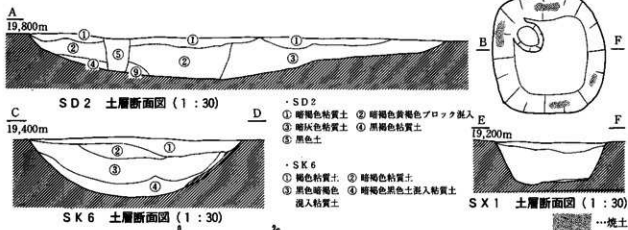
B. 鎌倉時代初頭の遺構

(1) 掘立柱建物

SB1 ビットを確認し得なかった部分もあるが、桁行3間(6.6m)、梁行2間(5m)の総柱建物である。



第23図 長法寺4号墳第2主体部 (1:30)



梁行の柱間がやや不ぞろいである。柱掘形は50~60cmの円形または長円形である。当遺構は調査区の東南隅で検出されたため、実際の規模はもっと拡大する可能性がある。

SB2 北西隅に1間分の張り出し部を持つ桁行き4間(9m)梁行2間(3.9m)の総柱建物である。柱掘形は50~60cmの円形または長円形である。当遺構もまた調査区東端で検出されたため、規模が拡大する可能性がある。なお、当遺構とSB1の建物方向はほとんど同じである。

(2) 土坑

第24図 土層断面図、遺構実測図

SK4 前述したSK2の東に接しており、長法寺10号墳の墳丘を切る形で検出された。最大幅7m深さ1.3mで、埋土は暗褐色砂質土であった。出土遺物としてはほとんどが土師器皿、山皿、山茶碗であり、中でも体部と底部外面の2ヶ所に墨書された山茶碗(82)が目される。

SK6 長法寺10号墳および東周溝SD2を切る形で検出された。長辺10m、幅2.5~3.5m、深さ0.8m~1.2mである。埋土は黒褐色砂質土中に5~10cm程の河原石を多く含む。埋土中より多量の山茶碗片、山皿片、土師器皿片等出土している。底部外面に墨書のある山皿(71)も出土している。

(3) 溝

調査区東半分で計5条検出された。南北方向3条に、東南方向2条がほぼ直行する形で交わっている。いずれも幅70cm~1.5m程で、深さは20~30cmである。SD4から若干の山茶碗片、山皿片、土師器皿片が出土したが、他からはごく微量の細片が出土したに

すぎなかった。

C. 時期不明の遺構

(1) 火葬墓

SX1 長法寺4号墳の周溝のすぐ南側に検出された。1m×0.7m程の隅丸長方形を呈し、深さは約40cmである。埋土は褐色に黒色の炭が混入し、壁面の一部が焼土化しており、床面にも厚さ2cm程炭がたまっていて、床面に焼土は見られなかった。精査したが遺物は何も確認できなかった。

SX2 SX1の西方約7.5mの所で検出された。一辺70cm程の隅丸五角形を呈していることから数個が重複しているものと思われる。切り合いは不明である。SX1でみられたような壁面の焼土はなく、暗褐色の埋土に焼土、炭が混入し、床面にも焼土、炭がうすく積もっていた。深さは約25cmである。やはり遺物は何も確認できなかった。

3. 遺物

出土した遺物は、整理箱にして34箱である。時期としては古墳時代と鎌倉時代のものが主流を占めており、前者のものとして須恵器杯身・杯蓋・甕が、後者として山茶碗・山皿・土師器皿があげられる。

またそれ以外に弥生土器も出土している。以下にそれらを概述していく。

A. 古墳時代の遺物

(1) 長法寺4号墳出土の遺物 後世の盗掘、土取りによりかなりの削平をうけた古墳では、その盗掘坑や現在の墳丘裾部や墳丘盛土中からもたくさん遺物片が出土している。それらは多くが須恵器杯身・杯蓋片・甕片・土師器片などの土器類や碧玉製の管玉・鉄線小片などの金属器といった古墳時代の遺物である。その他に小片ではあるがクロロ土師器碗の底部片や、灰釉碗の底部片が盗掘坑から出土している。

以下では明らかに主体部から出土した遺物と、それ以外から出土したものとに区別し報告したい。

a. 主体部出土遺物

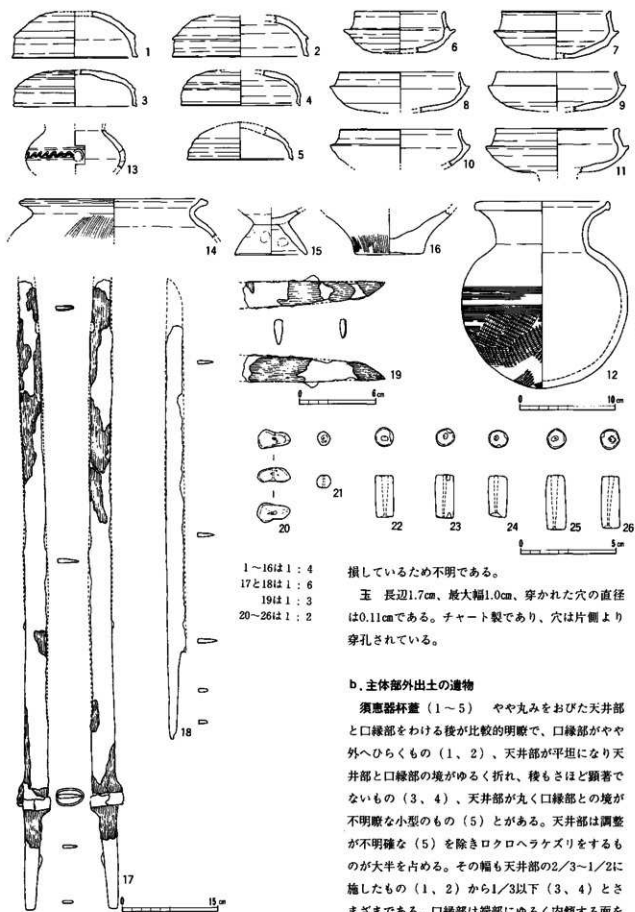
第1主体部 鉄刀(18)は、切先を欠くが全長66cm、刃部は長さ52.5cm、最大幅2.7cm、刃背部幅0.9cmである。茎の前でおれている。茎は長さ13.5cm、最大幅1.5cmである。刃部と茎の接点の間は刃側のみ片方である。全体的に木質の付着は少ない。

第2主体部 須恵器壺(12)、鉄刀(17)、刀子(19)、チャート製の自然石でつくられた小玉(20)が出土している。

須恵器壺 口径13.8cm、器高19.8cmを測る。口縁部を打ち欠いた状態で出土した。調査した範囲内からは打ち欠かれた破片は確認されなかった。

鉄刀 切先を欠くが、現在長100.5cmを測り、幅3.6cm、刃背部幅0.9cmで、刃部の断面は二等辺三角形をなす。刃部には鞘の木質が残っている所もある。間は刃側のみ片方で、間の延長上に柄にふくれあがった錆がある。これは鐔の痕跡であると思われる。茎は長さ15.3cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmであり、0.54cmの目釘穴が確かめられた。

刀子 現在長10.7cm、刃部最大幅2.2cmで、切先に向って段々と細くなっている。間や茎の部分は欠



第25図 遺物実測図

損しているため不明である。

玉 長辺1.7cm、最大幅1.0cm、穿かれた穴の直径は0.11cmである。チャート製であり、穴は片側より穿孔されている。

b. 主体部外出土の遺物

須恵器杯蓋 (1~5) やや丸みをおびた天井部と口縁部をわける稜が比較的明瞭で、口縁部がやや外へひらくもの(1、2)、天井部が平坦になり天井部と口縁部の境がゆるく折れ、稜もさほど顕著でないもの(3、4)、天井部が丸く口縁部との境が不明瞭な小型のもの(5)とがある。天井部は調整が不明確な(5)を除きロクロヘラケズリをするものが大半を占める。その幅も天井部の2/3~1/2に施したもの(1、2)から1/3以下(3、4)とさまざまである。口縁部は端部にゆるく内傾する面を持ちゆるい稜を持つ。(5)は径の小ささより短頭

蓋の蓋であるかもしれない。

須恵器杯身 (6~10) 口径が小さく口縁部端面が内傾し接を持ち、受け部が上方に引き上げられ底部が丸みをおびるもの (6, 7) と口径が12.4cm~12.6cmで、口縁部端面は丸くおさめ、受け部も厚く水平に引かれ底部は平坦になるもの (8~10) がある。小片のため判明できない (10) を除き底部にはすべてロクロヘラケズリが施される。その幅は (6, 7) では底部の $2/3$ ~ $1/2$ に施されるのに対し (8, 9) では $1/2$ 以下となる。

須恵器高杯 (11) 底部の一部に脚部の接合痕らしき粘土のもりあがりを確認したため、高杯であると判断した。口縁部端面はゆるく内傾し、あいまな接を持つ。底部のロクロヘラケズリの幅も $1/3$ 以下である。胎土も荒く、全体的に作りの荒さが目立つ。蓋となるものは確認していない。

須恵器罐 (13) 体部片のみ出土。体最大部の上下に沈線を、その間に波状文を施す。器壁もうすく全体的に丁寧な作りである。

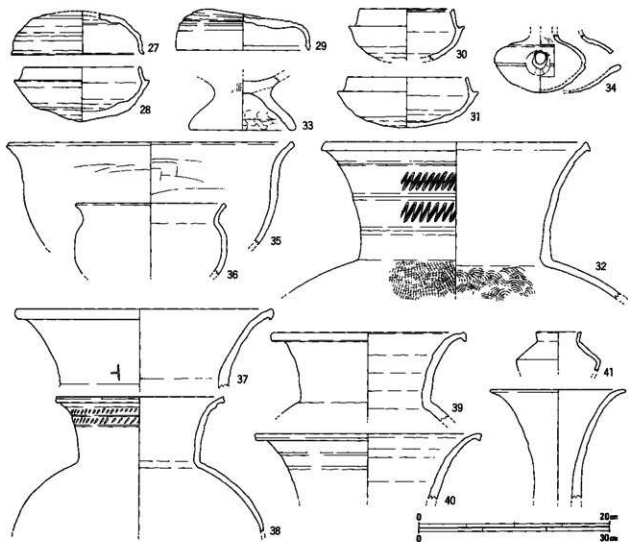
土師器台付甕 (14, 15) いわゆるS字状口縁部甕の末期型である。体外面にはハケメを施し、内面はヨコナアが施される口縁部片 (15) と外面はヨコナア、内面には指オサエのあとナアが施された台部 (15) がある。これらが同一個体のものかどうかは不明である。

その他、石炭、弥生土器壺底部 (16) や、鉄鍔片、甕玉製の管玉5個 (22~26)、土玉 (21) が出土している。

(2) 長法寺10号墳出土の遺物

墳丘は削平されていたため遺物は認められなかったが、東側周溝より固まって出土した。

須恵器短頸壺 (41) 口縁部端面は内傾する面を



第26図 遺物実測図 (1:4, 32, 38は1:6)

持ち中央部が浅く凹む。内面に自然釉が付着する。

須恵器長頸壺 (42) 口径14.7cm、口縁部内面に自然釉が付着している。頸部のみ出土である。

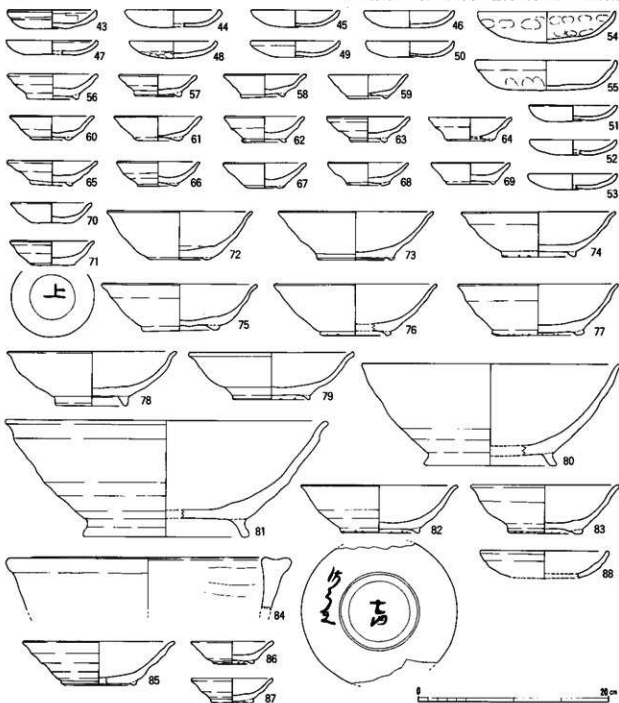
須恵器甕 (37~40) 口径26.4cmを測るもの (37) から20.0cmのもの (39) までさまざまである。頸部に「+」のヘラ記号をもつもの (37) や口縁部外面にヘラ状工具による連続刺突文、体部内面は同心円タタキを施した後ナデ消しているもの (38) などがある。

なお、混入であると考えられるが、弥生土器壺・甕の底部片も出土している。

また、後世に改作された西側周溝SD1より鉄片が出土している。長さ20.3cm、幅3.3cmで断面は二等辺三角形を呈する。鉄片の一部と考えられるが古墳時代のものであるかどうかは不明である。

(3) 土坑出土の遺物

SK1 須恵器杯蓋 (27) は天井部が丸く天井部と口縁部との境が不明瞭で器高が高いもので天井部



第27図 遺物実測図 (1:4)

はロクロヘラケズリが施される。口縁部端面は丸くおさまる。

須恵器杯身(28)は底部がやや平坦で外面をロクロヘラケズリしているが、ケズリも粗くその部分も底部の1/3弱である。口縁部はゆるく内傾し丸くおさめている。受部はおおむね外上方へのびるが端部の稜はあまい。

SK2 須恵器杯蓋(29)は焼け歪が激しく器型の詳細は不明である。天井部のロクロヘラケズリはほとんど施されない。口縁部は端部に内傾する面を有し、ゆるい稜をつくる。

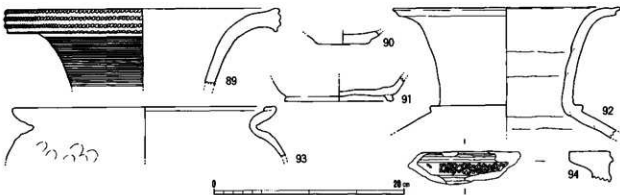
須恵器杯身は小型で底部が丸みをおび口縁部がゆるく内傾し端部に内傾する面を持ち浅く凹む(30)と、底部がやや平坦で口縁部を丸くおさめる(31)がある。器面の調整は底部外面をロクロヘラケズリしているが、ケズリも粗く、その部分も底部の半分~1/3弱である。受部はおおむね外上方または水平へのびるが端部の稜はあまい。

須恵器臺(29)は口径40.4cmを測る大型のもので口縁部外面に2条の丁寧な波状文を持つものである。

土師器台付臺(33)は台部のみ出土である。底部と台部の接合部にわずかにハケメが残り、台部内面には指頭痕が残る。

SK3 土師器臺(35.36)は、いずれも外面が焼けている。頸部の屈折が強いもの(36)と弱いもの(35)とに分けられる。

SK5 須恵器盥(11)が出土した。体部最大部の上方と下方に沈線を持つが波状文はみられない。底部にはロクロヘラケズリが施されている。破片であるため詳細は不明である。



第28図 遺物実測図(1:4)

B. 鎌倉時代の遺物

(1) SK6 出土の遺物

土師器小皿(43~53) 口径10cm以下、高さ2cm以下のものとする。磨耗が激しく調整が明らかにくいものもあるが、口縁部にはヨコナテ、他はナデアが施されるものが大半である。口縁部および底部の形態により4種に分類できる。

A1; 底部が平坦で、口縁部がやや内弯し、端部付近でいったん肥厚し、上方へ尖るもの。(43.44)

A2; 底部が平坦で、口縁部がやや内弯し、そのまま丸くなるもの。(45~48)

B1; 底部が中央部に向い凹み、口縁部がやや内弯し端部が尖りぎみになるもの。(49.50)

B2; 底部が中央部に向い凹み、口縁部がやや内弯し端部が丸くなるもの。(51~53)

土師器皿(54, 55) 口径10cm以上、器高3cm以上のものとする。口縁部の形態で2種に分類できる。

A; 底部から口縁部にかけてやや内弯しながら延びるもの。(54)

B; 口縁部の下に段を持つもの。(55)

山皿(56~71) 器形によって4種に分けられる。

A1; ハリツケ高台を持ち、口縁部が外反または外反ぎみに外へひらくもの。(56~62)

A2; ハリツケ高台を持ち、口縁部がまっすぐまたはやや内弯ぎみにのびるもの。(63~69)

B1; ハリツケ高台を持たず、口縁部がやや外反ぎみに外へひらくもの。(71)

B2; ハリツケ高台を持たず、口縁部がまっすぐにのびるもの。(70)

(71)の底部には「上」の墨書が見られる。法量は

(56)、(65)の個体を除きほぼ同じである。

山茶碗(72~79)、どれも口縁部がゆるく外反し、高台にモミガラ痕をもつものが大部分を占める。

法量によって4種に分類できる。

A；口径15.0cmの小型のもの(72)

B1；口径16.0cm、器高5.0~5.1cmの中型で器高が高いもの。(73)

B2；口径15.6~16.0cm、器高4.6~4.7cmの中型で器高が低いもの。(74,75)

C；口径16.8~17.0cmの大型のもの(76~79)

鉢(80,81) 山茶碗質の鉢である。口縁部がやや内湾しながらのびるもの(80)と外反するもの(81)がある。どちらも内面に自然釉がかかり、しっかりとハリツケ高台を持っている。

(2) その他の遺構から出土した遺物

SK4より山茶碗(82,83)と、器種不明(84)が出土した。(82)はB1に、(83)はAに分類できる。(82)の底部、体部には墨書がある。底部は「七内」であると思われるが体部は判読できなかった。SD4より山茶碗(85)と山皿(86)が、SD1より山皿(87)が、pitより土師器皿(88)が出土している。(85)はB2に、(86,87)はB1に、(88)はB2に分類できる。

C, 包含層出土の遺物

弥生中期壺の口縁部片(89)、ロクロ製土師器碗の底部片(90)、須恵器杯身の底部片(91)、常滑甕(92)、土師器伊勢型鍋(93)、花菱文が施された瓦質の火舎の一部と思われる破片(94)も見られた。

4. 結 語

橋岡遺跡は、古墳を破壊、削平したうえに形成された中世の集落跡である。今回の調査においても半壊の長法寺4号墳、全壊の長法寺10号墳が認められた。いずれも周溝を持ち規模は径約16mの円墳である。

長法寺4号墳は現状では主体部を2基持ちいずれも半壊または全壊に近かった。また主体部より出土した遺物も少なく、わずかに出土した杯身・杯蓋が6C前半に比定できるためこの時期に築造されたものと考えられる。長法寺10号墳は僅かに墳丘の高まりがみられた程度であり、周溝内より須恵器壺が出土したにとどまり明確な時期決定は困難であるが、6C代であると考えられる。昭和61年に行われた前回の調査では円墳、方墳2基の古墳の痕跡が確認されている。明確な時期決定はなされていないものの、規模が類似していることから本遺跡を含む周辺一帯には古墳群が形成されていたものと考えられる。

中世の掘立柱建物、今回の調査で2棟確認された。これらは、建物方向がほぼ同じであり同時期に存在した可能性がある。また前回の調査区で確認さ

① 位置と環境をまとめるに際して、参考とした文献は次のとおりである。

・鈴鹿市教育委員会「鈴鹿市史」第一巻 1980

れた掘立柱建物は、建物方向によって3群に区別されているが、今回確認された建物は、II群のものと建物方向がよく似ており同一の建物群になる可能性がある。これら2棟の建物の時期は、柱穴より出土した遺物は細片のため明確な時期決定は困難であるが、鎌倉時代初頭のものと考えられる。またSB1西方の土坑SK6より一括出土した山茶碗は藤沢編年の第II段階第4型式に比定されるものが大部分を占め山皿もやはり同編年の同型式のものが多い。

しかし、山皿(49.50)では高台が欠落するといった新しい要素の見られるものもある。これらのことから当遺構は12世紀中頃から13世紀初めまで存続したと考える。他の中世の遺構より出土した遺物についても同様の時期と考えられる。またこの地区は、地元の人たちに「彌勒堂(ミロクドウ)」「サクロウジ」と呼ばれているところから寺院関係の施設が存在したとも考えられる。

以上のことから橋岡遺跡は弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡であり、特に鎌倉時代が中心の集落跡であるといえよう。(編田隆長)

・本堂弘之他「三宅西城跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1983
・中森成行「郡山遺跡群発掘調査報告」鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会 1983

- ・三重県教育委員会 「三重県埋蔵文化財年報16～19」1986～1989
- ・三重県埋蔵文化財センター 「三重県埋蔵文化財センター年報1」1990
- ② 『鈴鹿市遺跡地図』（鈴鹿市教育委員会・昭和62年）では長法寺7号墳まで登録されており、昭和61年度の発掘調査で2基確認されているため、今回新発見されたものを10号墳とした。
- ③ 山本純（82）の体部の墨書文字について、奈良国立文化財研究所の船野和巳氏より「さかつき」と判読できる可能性もあるとの御

教示を得た。また、三重県埋蔵文化財センターの小坂宮広、小林秀岡氏からも御指導頂いた。

- ④ 出土遺物の時期決定に際しては、以下の文献を参考にした。
 - ・田辺昭三 「陶器古窯止群1」 平安学考古学クラブ 1966
 - ・藤沢良祐 「瀬戸古窯止群1」 瀬戸市歴史民俗資料館 「研究紀要1」 1982

番 号	地 区 整理番号	遺 構	造 型				特 徴	胎 土	色 調	焼 成	残存・ ゆがみ他
			胎高	口径	底径	その他					
1	須恵杯蓋 1区 2-4	?	13.0	-		クロロ…時計まわり	やや粗(1~20mmの小石)	灰白色	良	残片	
2	須恵杯蓋 2区 2-5	?	14.0	-		クロロ…時計まわり	やや粗(0.5~20mmの小石)	灰白色	良	残片	
3	須恵杯蓋 3区 1-2	3.9	12.8	-		クロロ…ケズリ反時計	やや粗(3~4mmの小石)	灰白色	良	天井部縁とんど	
4	須恵杯蓋 1,4区 ヤマトノキ 3-1	?	12.2	-		クロロ…ケズリ反時計	密	灰白色	良	残片	
5	須恵杯蓋 4区 監製坑2-2	?	10.9	-		クロロ…反時計	密(0.5~長石)	灰白色 外…褐色、褐色色 内…灰白色 断…セピア色	良	残片	
6	須恵杯身 2区 2-6	?	9.2	-		クロロ…ケズリ時計まわり	密(0.1~0.5の小石)	灰白色	良	残片	
7	須恵杯身 1区 墳頂1-5	5.1	11.4	-		クロロ…反時計まわり	かなり粗(2~5mmの小石)	暗灰色	良	残片	
8	須恵杯身 4区 監製坑2-1	?	12.6	-		クロロ…時計まわり	密(0.5mmの長石含む)	灰白色	良	残片	
9	須恵杯身 3区 1-3	4.1	12.4	-		クロロ…反時計まわり	良(骨)(1~3mmの石)	灰白色	良	残片	
10	須恵杯身 2区 墳すそ3-1	?	12.4	-			粗	灰白色 (一部暗灰色)	良	残片	
11	須恵高杯 3区 1-4	?	12.8	-		クロロ…時計まわり	やや粗 (最大4mmの砂粒まじり)	灰白色	良好	残片	
12	須恵壺 第1主体 1-1	19.8	13.8	-		体中へ カキマ 半へ下 こうしたタキ	白色砂粒を含む	暗青灰~ 明灰白色	良好	完	
13	須恵壺 2区 墳すそ3-3	-	-	-	体中央 10.3	波状文	密	灰白色 (断面セピア色)	良	残片	
14	土師 S字ガメ 2区 墳すそ4-4	?	(18.4)	?		外ハケメ、5本/1.1cm	やや粗(1~2mmの長石粒)	黄褐色	良	ゆがみ? 残片	
15	土師台付 カメ台 3区 4-2	-	-	7.4		内一指押之の跡のこる	やや粗(1~3mmの長石粒)	黄褐色	良	残片	
16	弥生底部 4区 ヤマト4-1	-	-	7.2		六一書様はげしい 外一書様片蓋ナゲの横ハ ラガ付	やや粗(1~2mmの長石粒)	黄褐色	良	底部のみ欠	
17	鉄刀 第1主体 6-2	長さ 66	幅 2.7			木質多く残る				先端部欠ソソ	
18	鉄刀 第2主体 6-1	100.5	3.6							先端部欠ソソ	
19	刀子 第2主体 7-3	10.7	2.2							先端部のみ	
20	チャート 小玉 第2主体 5-1	高さ 0.71	径 1.7			片穴 孔		灰白色 黒色混入			
21	土王 1区 墳頂5-7	0.7	0.7					黒色			
22	管玉 1区 ヤマトノキ 3-1	高さ 2.2	径 0.97			片穴 孔	管玉製	深緑色			
23	管玉 1区 須恵神社 3-4	2.3	0.99					深緑色			
24	管玉 2区 須恵神社 5-5	2.2	1.00					淡深緑色			
25	管玉 2区 墳頂 5-6	2.85	0.95					深緑色			
26	管玉 1区 須恵神社 3-1	2.7	0.98					深緑色			
27	古・須恵部 杯蓋 B-6 21-5	SK 1	?	13.6		へラ記号	やや粗(2~0.5mmのチャ ウ石粒等を含む)	灰白色	良好	残30%	
28	古・須恵部 杯身 B-5 3-2	SK 1	5.7	12.0		クロロ…時計まわり	やや粗(1~3mmの小石 含む)	暗灰色	良好	完、ゆがみ小	
29	古・須恵部 杯蓋 C-8 9-3	SK 2	4.3	13.8		クロロ 記載不明 ハケ目のような工具痕	粗(最大3.5mm、2~0.5mm のチャウ石粒等を含む)	暗灰色	良好	完、ゆがみ大	
30	古・須恵部 杯身 C-8 9-2	SK 2	?	9.8		クロロ…反時計まわり	粗(2~0.5mmのチャウ 石粒等を多く含む)	灰色	良好	残片	
31	古・須恵部 杯身 C-8 2-2	SK 2	5.3	12.2		クロロ…反時計まわり	やや粗(1~2mmのチャウ 石含む6mm次の小石混る)	灰黄色	良好	口縁部ゆがみ 残90% (口縁部60%)	
32	古・須恵部 カメ C-8 8-1	SK 2	?	40.4		縦文(0.9-1.0mm、1.1-1.2mm) タキ(骨子径4.7mm)有難 34.9mm	やや粗(最大3mm、2.5-0. 5mmのチャウ石等を含む)	淡黄褐色	不良	口縁4割 肩部4割	

第3表 遺物観察表 No.1

種 類	地 区 管理番号	遺 構	法 量				種 類	始 土	色 調	焼 成	残存・ ゆがみ他	
			器高	口径	底径	その他						
33	古・土師器 付カメの台	C-8 9-1	SK 2	-	-	11.2	体部ナメハク灰(4% ⁺ 量) 内面磨練し、胎土黄白灰あり	やや粗(2~1mmのチャウ石を含む)	淡黄褐色	良好	台部1/2残	
34	古・須恵器 罎	F-1 3-1	SK 5	-	-	胴径大 9.6	ヘラケズリ…左まわり	良好(密)	暗灰色	良好		
35	古・土師器 カメ	B-5 10-1	SK 3	?	?			粗(4.5~0.5mmのチャウ石、セキエを含む)	黄褐色	良好		
36	古・土師器	D-5 9-4	SK 3	?	?			粗(最大4mm、1.5~0.5mmのチャウ石を含む)	①-暗褐色 ②-黄褐色 ③-暗灰色	良好	1/2残 (口縁部1/2残)	
37	古・須恵器 カメ	F-4 1-2	SD 2	?	25.6		ヘラ記号、内面に自然釉 ロコ口縁不明	密(径2mm以下のチャウ石を含む)	①-黄灰色 ②-暗灰色	良好	胴部の2/3残 (口縁部1/2残)	
38	古・須恵器 カメ	F-3 14-1	SD 2	?	26.1		外底磨・底、胎土黄白灰 ローフの胎土黄白灰 外底に2本の穴	密(径1mm以下のチャウ石を含む)	暗灰色	良好	30%残	
39	古・須恵器 カメ	F-3 5-1	SD 2	?	20.0			密(径1mm以下のチャウ石を含む)	灰色	良好	30%残 (胴部一層部)	
40	古・須恵器 カメ	E-4 6-1	SD 2	?	22.6		沈澱2本施されている (胴部外周)	密(径2mm以下のチャウ石を含む)	黄灰色	良好	15%残 (口縁15%残)	
41	古・須恵器 短壺	E-4 1-3	SD 2	?	4.3	-		密(径1mm以下のチャウ石を含む)	灰色	良好	残15% (口縁1/2残)	
42	古・須恵器 長頸壺	F-3 1-1	SD 2	?	14.7	-	ロコ口縁不明 内面自然釉が付着	密(径0.5mm以下のチャウ石を含む)	暗灰色	良好	30%残 (胴部のみ)	
43	土師器 小皿	16-3	SK 6	1.9	9.0		口縁部ナデ(内・外共) 胎土調整	おおむお密	赤褐色	良好	完形 ゆがみ小	
44	土師器 小皿	H-4 19-5	SK 6	1.85	9.6		外 指おさえ 内 ナデ 口縁部 ヨコナデ	並(1.5mm前後のチャウ石を含む)	淡褐色	良好	80%残	
45	土師器 小皿	G-6 4-7	SK 6	1.75	(9.0)		外 指おさえ 内 ナデ 口縁部 ヨコナデ	やや粗(0.5~2.5mmのチャウ石、セキエを含む)	淡黄褐色	良好	20%残	
46	土師器 小皿	G-6 4-8	SK 6	1.8	9.4		外 指おさえ 内 ナデ、口縁ヨコナデ	並(1.0mm前後のチャウ石を含む)	黄褐色~褐色	良好	70%残	
47	土師器 小皿	12-4	SK 6	1.5	9.2			割離はげしく底部不明	密	淡褐色	並	30%残
48	土師器 小皿	1-5 16-4	SK 6	1.85	9.2		外 指おさえ 内 ナデ 口縁部 ヨコナデ	密(0.5mm前後のチャウ石、セキエも含む)	黄褐色	良好	30%残	
49	土師器 小皿	16-6	SK 6	1.75	9.4			割離はげしく底部不明	密(径0.5mmの小石、3~0.5mmのチャウ石、セキエも含む)	外 淡黄褐色 内 淡褐色	良好	ほぼ完形 口縁部厚残
50	土師器 小皿	4-5	SK 6	1.7	9.0		外 未調整 内 ナデ 口縁部 ヨコナデ	密(0.5mm程度のチャウ石を含む)	淡黄色	良好	80%残	
51	土師器 小皿	G-6 16-5	SK 6	1.7	9.25		外 指おさえ 内 ナデ 口縁部 ヨコナデ	密(チャウ石の微粒子を含む)	淡黄褐色	並	ほぼ完形 割離はげしく 底部不明	
52	土師器 小皿	4-6	SK 6	1.6	9.0		外 指おさえ 内 ナデ 口縁部 ヨコナデ	密	淡黄褐色	良好	口縁ゆがみ大 70%残	
53	土師器 小皿	H-4 19-4	SK 6	1.65	9.2		外 指おさえ 内 ナデ 口縁部 ヨコナデ	やや密	淡黄褐色	良好	40%残	
54	土師器 皿	16-2	SK 6	3.3	14.2		指おさえ後ロコナデ (内・外共)	おおもむお密(4~2mmの小石含む)	赤褐色	良好	75%残 ゆがみ中	
55	土師器 皿	G-6 16-1	SK 6	3.2	14.9		外 指おさえ後ロコナデ 内 指おさえ	粗(6~3mmの自然石、2mm以下のチャウ石、セキエも含む)	淡黄褐色	良好	60%残	
56	山 皿	G-6 12-2	SK 6	2.7	9.4	5.4	ロコ口縁跡まわり、糸切底 はりつけ灰	密(1mm以下のチャウ石を含む)	灰白色	良好	口縁50%残 底部完形	
57	山 皿	G-6 4-3	SK 6	2.3	8.0	4.4	モミガラ痕、はりつけ灰 糸切底、自然釉	並(0.5~1mm以下の砂粒を含む)	灰白色	良好	60%残	
58	山 皿	H-6 17-6	SK 6	2.3	8.4	4.0		貼付高台	やや粗(0.5mm前後のチャウ石、セキエを含む)	灰白色	良好	ゆがみ大 口縁60%残
59	山 皿	H-4 18-6	SK 6	2.5	8.2	3.6		貼付高台	並(0.5mm前後のチャウ石を含む)	灰白色	良好	30%残
60	山 皿	G-6 17-2	SK 6	2.6	8.6	3.8		貼付高台 自然釉	やや粗(0.5mm~1.5mmのチャウ石、3mm次の小石を含む)	黄灰色	良好	70%残
61	山 皿	G-6 4-2	SK 6	2.6	8.9	4.2		自然釉、糸切底、貼付高台	やや粗(0.5mm~1.5mmのチャウ石、セキエも含む)	灰白色	良好	完形
62	山 皿	G-6 15-2	SK 6	2.8	8.4	4.7		自然釉、磨練痕、貼付高台、遺物せみい	やや密(1.5mm以下のチャウ石、黒色微石多量を含む)	淡灰色	良好	完形
63	山 皿	H-6 15-3	SK 6	2.7	8.7	4.4		自然釉、底、モミ底、磨物せみい、貼付高台	やや粗(最大5.5mm、2~0.5mmのチャウ石、黒色微石多量を含む)	灰白色	良好	完形
64	山 皿	H-4 18-5	SK 6	2.5	8.6	4.6		自然釉割離、貼付高台	並(1.0mm前後のチャウ石、3.5mmの小石まじる)	灰白色	良好	30%残

第4表 遺物観察表 No.2

種	地 区 監視番号	造 構	法 量				特 徴	土 質	色 調	焼成	残存・ ゆがみ他
			器高	口径	底径	その他					
65	山Ⅱ H-4 15-4	SK 6	2.65	9.5	4.5	重焼底、貼付高台、自然釉(内面)	やや密(最大3.5mm、1mm程度のチャウ石含む)	灰白色	良好	完好	
66	山Ⅱ H-6 15-1	SK 6	2.55	8.7	4.25	貼付高台、重焼底、自然釉	やや密(最大3mm以下のチャウ石等含む)	灰白色 淡黄色(釉)	良好	完好	
67	山Ⅱ H-4 18-3	SK 6	2.65	8.6	3.4	キミガラ底、貼付高台	並	灰白色	良好	50%	
68	山Ⅱ H-4 18-2	SK 6	2.3	8.4	3.5	貼付高台	並(0.5~2.5mmのチャウ石を含む)	灰白色	良好	完好 ゆがみ中	
69	山Ⅱ H-4 18-4	SK 6	2.25	8.2	4.8	糸切底、貼付高台	やや密(0.5mm前後の砂粒を含む)	灰白色	良好	ゆがみ中 60%	
70	山Ⅱ G-5 17-3	SK 6	2.15	8.4	4.2	自然釉、底部不調整、糸切底	並(2.0mm以下のチャウ石を含む)	淡黄色	良好	80%	
71	山Ⅱ 12-3	SK 6	2.6	8.8	4.7	ロクロ調整、脚付まわり、自然釉、器脚、糸切底	おおむね密	灰白色 かつ白色(釉)	良好	ゆがみ小 劣形	
72	山茶碗 G-6 17-4	SK 6	5.1	15.0	6.0	モミガラ底、はりつけ高台、重焼底、糸切底	並(0.5~1.5mmのチャウ石を含む)	灰黄色	良好	50%	
73	山茶碗 G-6 4-1	SK 6	5.1	16.0	(7.6)	モミガラ底、ロクロ調整まわり、糸切底	粗(5mmの小石、3mm前後のチャウ石、石エィを多く含む)	灰白色	良好	全体ゆがみ 40%	
74	山茶碗 H-4 19-1	SK 6	4.7	16.0	7.4	ロクロ調整まわり、糸切底、モミガラ底	並(1~0.5mm前後の砂粒を含む)	灰白色	良好	50%	
75	山茶碗 H-6 17-5	SK 6	5.0	16.0	7.5	自然釉、貼付高台、重焼底	並(1.0mm前後の砂粒を含む)	灰白色	良好	70%	
76	山茶碗 H-4 18-1	SK 6	5.4	(16.8)	6.5	モミガラ底	やや密(最大4.5mmまでのチャウ石、石エィを多く含む)	灰白色	良好	30%	
77	山茶碗 H-4 19-2	SK 6	5.4	(16.7)	8.2	ロクロ調整まわり、糸切底、モミガラ底、自然釉	並(2~1mmのチャウ石を含む)	灰白色	良好	40%	
78	藤 山茶碗 G-6 12-1	SK 6	5.7	17.0	7.7	重焼底、ロクロ調整まわり、自然釉、器脚、糸切底	やや密(1.5mmのチャウ石含む)	灰白色 釉は淡黄色	良好	1/4(口縁)	
79	山茶碗 G-6 17-1	SK 6	5.05	17.0	7.6	モミガラ底、自然釉、糸切底、重焼底	粗(3mmの小石、3~1mmのチャウ石、石エィを多く含む)	淡黄色	良好	高台ゆがみ大 60%	
80	須恵野 鉢 F-5 4-4	SK 6	10.5	(27.0)	13.6	自然釉調整、貼付高台、はりつけ高台、ロクロ調整まわり	並(2.0mm以下のチャウ石、砂粒を含む)	濁灰色	良好	30%残 口縁部10%残	
81	鉢 F-5 13-1	SK 6	12.3	(6.4)	17.4	貼付高台、自然釉	やや密(1.5mm程度のチャウ石含む)	淡青灰色 淡黄緑色(釉)	良好	口縁10%残 底部80%残	
82	山茶碗 E-8 2-3	SK 4	5.0	16.0	8.1	器脚、モミガラ底、糸切底、はりつけ高台、ロクロ調整まわり	おおむね密(1~2mmの小石を含む)	灰白色	良好	ゆがみ小 ほぼ完好	
83	山茶碗 E-8 7-2	SK 4	5.2	15.0	6.4	モミガラ底、はりつけ高台、自然釉	粗(1~4mmほどのチャウ石、モミエィを含む)	灰白色	良好	ゆがみ大	
84	土師鉢 E-8 11-1	SK 4	?	30.0		外 書おさえ 内 底で 口縁 黄化せ	粗(0.5~5mmのチャウ石、石エィを含む)	にぶい橙色	歌 (不貞)	口縁5%残 30%残	
85	山茶碗 H-5 21-2	SD 4	4.6	15.6	7.2	はりつけ高台、モミガラ底、糸切底、自然釉、ロクロ調整まわり	やや密(1mm以下の石エィ、チャウ石多く含む)	灰白色	良好	口縁4%残 底部9%残	
86	山Ⅱb G-7 21-1	SD 4	2.45	8.7	4.35	モミガラ底、糸切底、はりつけ高台	やや密(1.5~0.5mmのチャウ石を含む)	灰白色	良好	50%	
87	山Ⅱb B-4 21-3	SD 1	2.55	8.5	4.4	糸切底、貼付高台	やや密(2mm以下のチャウ石、石エィを含む)	灰白色	良好	口縁30%残 底部完好	
88	土師鉢 H-6 H-2	P 1	?	(13.4)		口縁部 ナデかへく裏か?	密	にぶい黄色	良好	10%	
89	弥生 土師部 F-6 22-2	包 (暗褐色土)	?	28.2		外 クシ指文 口縁部 割突	粗(1~2mm前後のチャウ石、石エィを含む)	明赤褐色	良好	口縁少量欠く (底口蓋)	
90	土師部 F-3 20-1	包 -	-	5.2		糸切底	やや密(チャウ石、石エィの散り子を含む)	黄 (部分の欠)	やや歌		
91	弥生 土師部 F-3 6-2	包 ?	?	11.2		はりつけ高台	密(2mm以下の長石含む)	灰色	良好		
92	トコナ カメ 22-1	表土除去	?	23.6		物、新土除去	並(1.0mm程度のチャウ石、7mm以下の小石含む)	◎ 陶褐色、 ◎ 赤褐色、赤黒	良好	口縁のみ30% 口縁ゆがみ有	
93	土師部 F-3 23-2	表土除去	?	27.6		スエ付書(外)、内は黒色部分あり、接おさえ	密(0.5mm程度の砂粒含む)	灰赤褐色の スエ部分内黒褐色 淡褐色(内)	やや歌	口縁部 25%残	
94	真伊 I-5 20-3	包				文様 沈線	密	灰色	良好		

第5表 遺物観察表 No.3



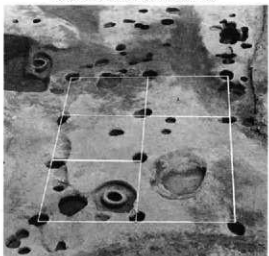
横門遺跡、長法寺4号墳調査後全景（東から）



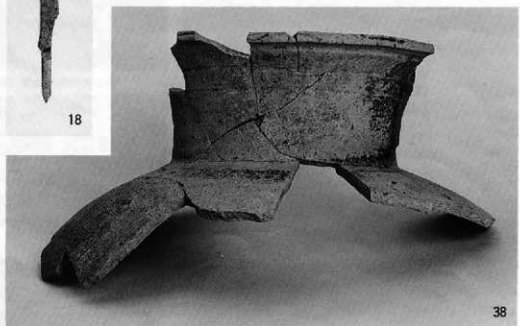
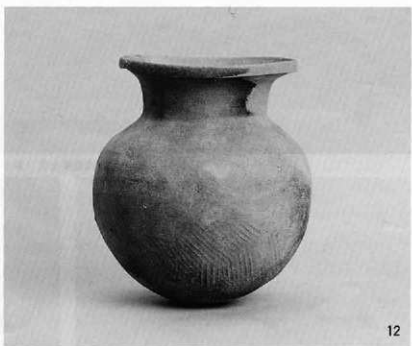
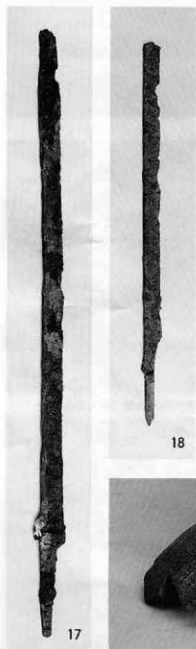
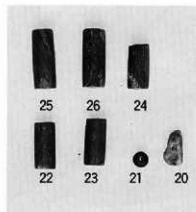
長法寺4号墳遺物出土状況



長法寺10号墳全景（南東から）



SBI（南から）



出土遺物 (20~26は 1 : 2、17と18は 1 : 6、他は 1 : 3)

Ⅲ 鈴鹿市三宅町 別所遺跡

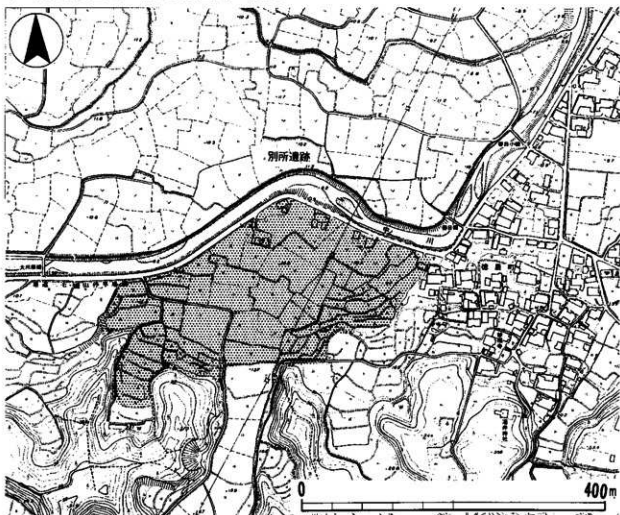
立会い調査のまとめ

別所遺跡は周知の遺跡で、鈴鹿市三宅町別所に所在する。中ノ川中流域の南岸標高12~14mに位置し、橋門遺跡の南東0.5kmにあたる。

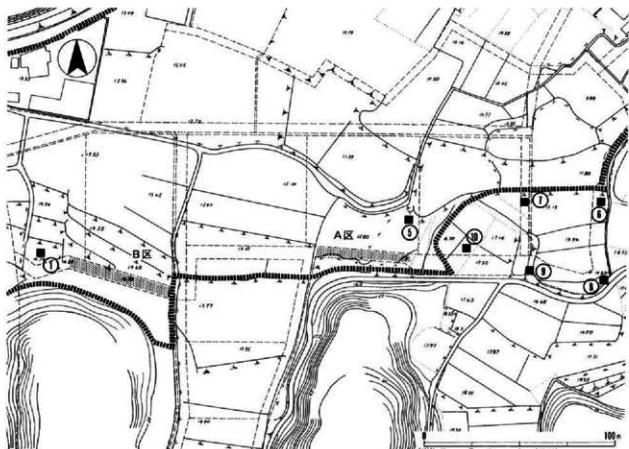
今回県営は場整備事業に先立ち、排水部分に調査区を2ヶ所設定し、立会い調査を行った。調査期間は平成2年7月9日~10日、調査面積は約200㎡である。便宜上東よりA区、B区とする。結果は以下の通りである。

A区の基本層序は、第1層暗灰色土（耕作土）、第2層黄灰褐色土、第3層灰色砂質土、第4層灰色

粘土（地山）である。地山までの深さは1m~1.3mで第2層と第3層に遺物が認められ、若干量の須恵器の山茶碗片、土師器片が出土したが、遺構は認められなかった。B区の基本層序は第1層暗褐色土（表土）、第2層黄褐色粘質土（遺物包含層）、第3層青灰色粘質または青灰色岩盤の（地山）である。地山までの深さは約1mで第2層より遺物が認められ、若干の山茶碗片、土師器片が出土したが、遺構は認められなかった。（堀田隆長）



第29図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第30図 発掘区平面図 (1 : 2,000) (①~⑧は試掘坑)



A区調査後全景 (西より)



B地区調査後風景 (東より)

Ⅳ 津市大里 こうさき 河崎遺跡

立会い調査のまとめ

河崎遺跡は、津市大里睦合町の志登茂川と前田川の合流点付近の左岸低地部に位置するもので、昨年度に引き続いての立会い調査である。

今回の調査地は、東山古墳群の所在する丘陵地直下の水田面で標高約7m、耕土下に厚さ30cm程の灰褐色粘質土の遺物包含層をはさみ、明灰色シルト層の地山面に至った。

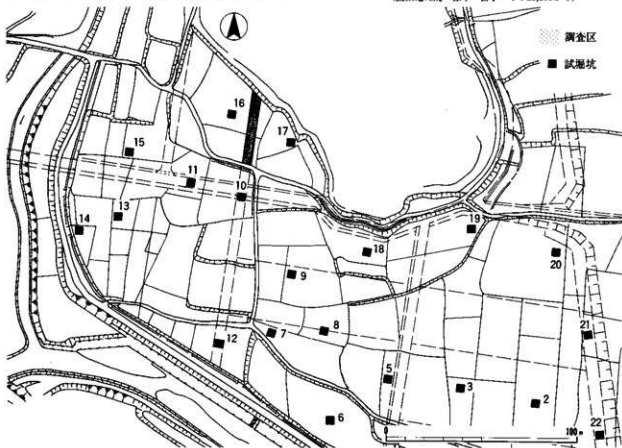
遺物包含層中からは若干の中世遺物が出土したが遺構はまったく認められなかった。

出土遺物のうち、図示できるものに山茶碗(1)および山皿(2)があり、(1)は高台が剝離しており、体部は直線的に大きく開くが口縁端部は丸く仕上げている。また、(2)は体部が短く直線的に開き、口



第31図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

(国土地理院 桜本・白子 1 : 25,000から)

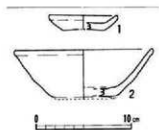


第32図 調査区位置図 (1 : 2,000)

縁端部は外面にやや面をもつ。ともに13世紀前半頃の時期に比定できよう。

今回の調査地からは遺物包含層の形成は認められつつも遺構は検出されなかった。前年度の調査地でも遺構は希薄であり、志登茂川が形成した微高地などに局部的に遺跡が立地する可能性がある。

(竹内英昭)



第33図 包含層出土遺物実測図



調査区全景（南から）

V 安芸郡河芸町 ^{みゆき} 三行城跡

立会い調査のまとめ

三行城跡は、安芸郡河芸町三行に所在する中世城館で、昭和59年度には県道三行・上野線特殊改良工事に伴い、郭と堀切の一部が発掘調査されている。

今回調査を行ったのは、主郭からは東へかなり距離を隔てた細い尾根に位置する堀切と推定される箇所である。

堀切と推定される溝は、幅5～6m程で長さ4mにわたって尾根を横切っている。

調査前の段階では、箱堀状であったものが、調査の結果研堀風の断面形をもつものとなり、深さは北側で約2.5mをはかる。

出土遺物は、近現代のものが若干表土中に含まれていたのみで、城館の存続時期に伴うとみられる遺物は認められなかった。

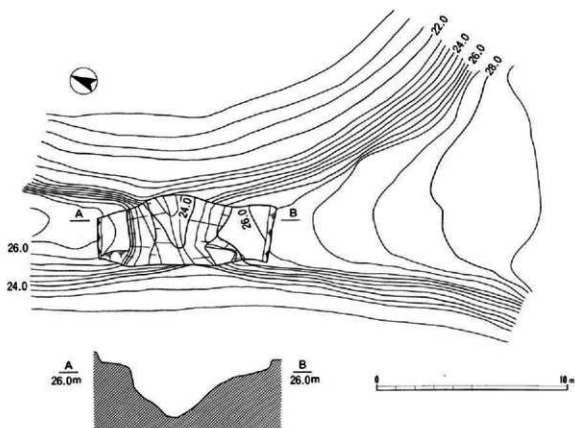
(竹内英昭)



第34図 遺跡位置図 (1:50,000)
(国土地理院 百千 1:25,000から)



第35図 調査区位置図 (1:2,000) (三重県教育委員会「三行城跡発掘調査報告」1985より転載・一部改変)



第36図 遺構平面図 (1 : 200)



堀切跡全景 (南から)

VI 一志郡嬉野町釜生田 天白遺跡

立会い調査のまとめ

はじめに

天白遺跡は、一志郡嬉野町釜生田字天白に所在する。現在の地目は水田である。今回、は場整備事業によって削平される607㎡について、平成2年10月29日より10月31日まで立会い調査を実施した。

遺構

A・B・Cの3地区からなるが、A-3区より竪穴住居が1棟、B-2区より竪穴住居を2棟、柱列1条を検出した。

B区のSB1については遺物から飛鳥時代と判明できるが、その他の遺構については時期不明である。またB区のSB2については土層の切り合いによりSB1より新しいことがわかる。SB1、SB2に

は遺跡と思われる焼土を伴う。なお、SB1は焼土の南側に深さ10cm、径40cmの貯蔵穴をもつ。

遺物

須恵器杯蓋(1) SB1出土の径11cm、器高3.1cmの宝珠つまみと返しをつく杯蓋である。外面つまみの下から体部にかけてクロク水びきとなる。胎土は1mm強の砂粒を含み、色調は暗灰色を呈す。

土師器甕(2) SB1出土の径12.4cmの小型の甕である。口縁部ヨコナデ、外面体部はタテ方向のハケメ、内面頸部から体部にかけてヨコ方向のヘラケズリ、体部板ナデとなっている。口縁端部は、やや外方向につまみ出されている。胎土は1.5mm以下の砂粒を含み、暗黄色を呈す。



第37図 調査区位置図 (1:2,500)



B-1区

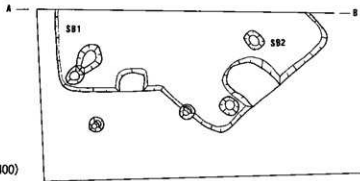
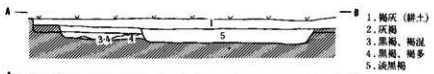
B-2区

A-3区

A-2区

A-1区

遺構平面図 (1:400)



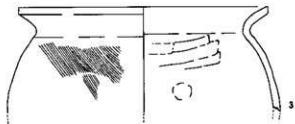
第38図 SB1, SB2実測図 (1:100)

土師器甕 (3) SB2出土の口縁部径26cmの甕のハケメを施す。内面頸部より体部にかけて、ヨコ方向の板ナデを施す。

土師器椀 (4) B-2区包含層出土の椀である。口縁部ヨコナデ、内面底部に螺旋状暗文、底部端から口縁部にかけて放射状暗文を施す。外面体部より底部にかけてヘラケズリを施す。

まとめ

今回の調査地は天白遺跡の北端に位置する。天白遺跡は縄文時代後期の遺跡として知られているが、今回の調査では、それにあてはまる時期の遺構、遺物ともに検出できなかった。(福田哲也)



第39図 天白遺跡・遺物実測図 (1:4)



天白遺跡航空写真 (津農林事務所提供)



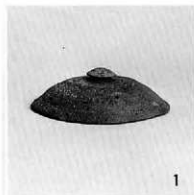
B地区 発掘調査風景



SB1, SB2 (東から)



SB1 杯蓋出土状況



出土遺物 (1 : 3)

Ⅶ 一志郡白山町南家城 西の垣内遺跡

立会い調査のまとめ

1. はじめに

当遺跡の所在地は一志郡白山町南家城字西の垣内である。白山町家城真見に至って大きく北東方にせり出す形で蛇行した雲出川は、そこから約1km北流した後、県道松阪青山線に架かる両国橋の所で今度は右に折れて東流する。橋のたもとから約800m東にある家城神社までの間の右岸一帯には家野遺跡があり、全体の約十分の1に当たる約2,400㎡を平成元年度に調査した。橋の上流約350mの左岸には藤城跡がある。それは周辺地域に点在する山田野城、家城城、真見城等と共に国司北畠氏の出城（砦）であったと思われる。

当該遺跡はちょうどこの城跡の対岸の標高約68mの河岸段丘上であり、家野遺跡の南西300mに位置し、県立一志病院の裏手に当たっている。

県営ほ場整備事業に際して、図42のように幹水排水路部分を幅3m、全長約80m、面積にして約240㎡について立会い調査を実施した。調査期間は平成2年11月22日、27日、12月3日、4日間であった。

2. 調査概要

基本的層序は第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層暗茶褐色床土、第Ⅲ層黒褐色包含層、第Ⅳ層明茶褐色または黒茶褐色地山（砂質土）である。第Ⅰ層上面から第Ⅳ層上面までの深さは、南北トレンチで130～80cm、東西



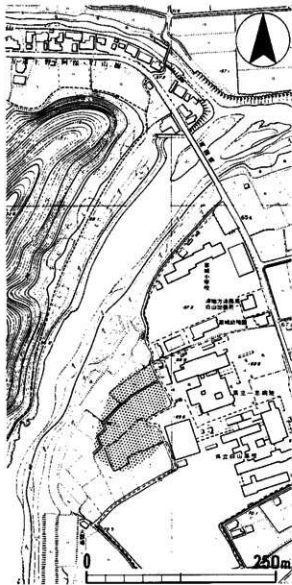
第40図 遺跡位置図 (1:50,000)

トレンチでは80～60cmであった。

遺構としては竪穴住居、溝、土坑のほか、風倒木の跡が2箇所あった。第I層から第IV層上面までを掘削する間に出土した遺物には、弥生時代の第三様式を中心とした土器碎片のほか、室町時代以降の陶器碎片などが少量あるだけである。土坑と考えられるもの9基、溝2条があるが、遺物の出土がないか、あっても僅かな碎片に過ぎないためここではそれらを割愛し、竪穴住居についてのみ述べる。

〈竪穴住居〉

竪穴住居SB1を東西トレンチ中央西寄りで検出した(写真PL5)。南端は調査区外に延びるが、平面プランは4m×4m、深さ15～20cmであった。径25～30cm、深さ4～6cmの支柱穴を3箇所検出

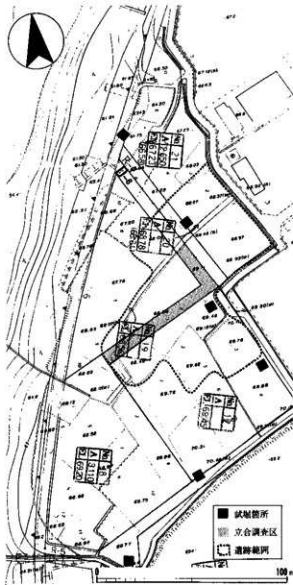


第41図 遺跡地形図 (1:5,000)

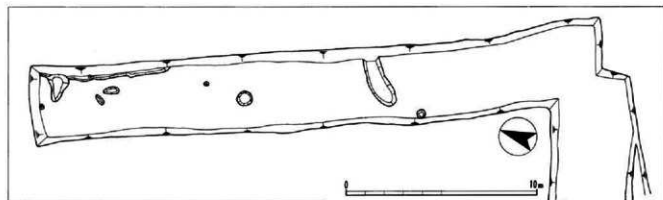
したが、他は調査区外のため不明である。床面中央部に径約80cm、深さ約7cmの土坑状の穴があり、中に20～30cm大の河原石が3個握えられていた。石は明らかに火を受けており、従ってこれは恐らく炉跡であろうと思われる。

埋土中からは弥生時代第五様式の高杯(図43の2)が出土した。後期初頭もしくは前半代に比定しうると考えている。SB1の時期はこの遺物をもって決定されるが、同所から出土した小型の甕(図43の3)はその高杯より古相を帯びるものであり、混入遺物と考えられる。

なお、出土遺物はないが南北トレンチ北端の東壁際で検出した長さ約4.3m、幅約0.2m、深さ約15cmの南北溝状遺構も竪穴住居になる可能性ももって

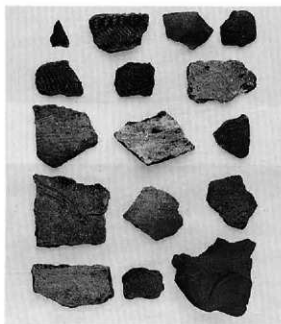


第42図 調査区位置図 (1:2,000)

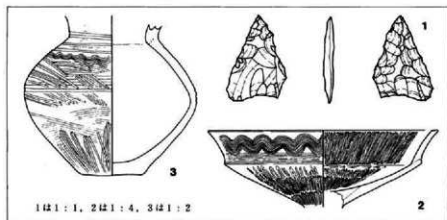


る。

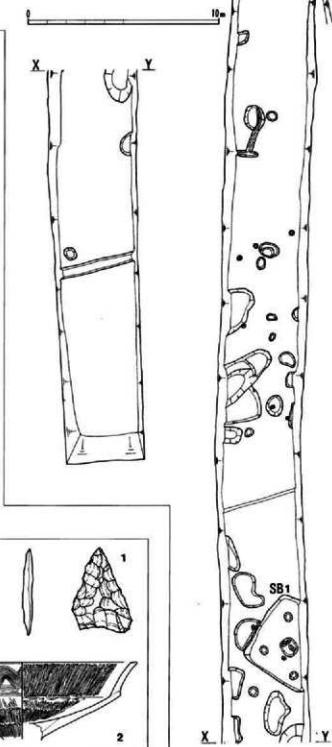
包含層中からサヌカイト原石も採取しており、また前述したように出土した土器片は第三様式のもの
が主体を占めていることから類推すると、この辺り
一帯には弥生時代中期以降後期に至る集落が営まれ
ていたことは確実であろう。(田坂 仁)



包含層出土遺物 (1 : 3)



第43図 遺物実測図



第44図 遺構平面図 (1 : 200)



SB1 (北から)



SB1 出土遺物



東西トレンチ

VIII 一志郡白山町 ^{やはた}八幡遺跡

1. 位置と環境

八幡遺跡(1)は高見山地の三峰山(標高1,235m)付近を源とする雲出川中流域左岸の河岸段丘上(標高58m)に位置している。行政区画的に一志郡白山町北家城字八幡に所在する。

当遺跡周辺には、各時代にわたる遺跡の所在が確認されており、発掘調査を実施した遺跡も徐々に増加してきている。以下それらについて概説しておきたい。

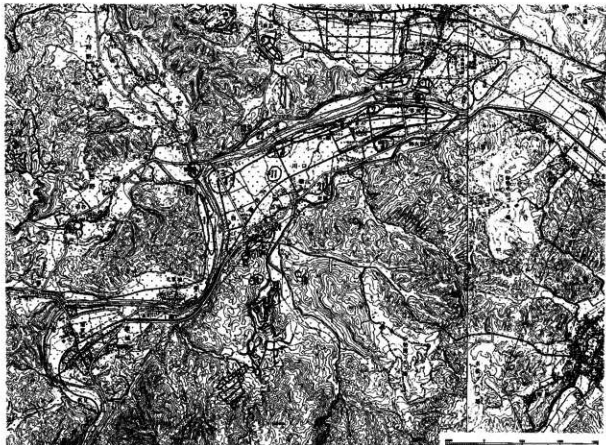
まず、縄文時代の遺跡としては、馬乗岩(2)、吹毛(3)、大角[◎](4)、市河原(5)、岩井戸(6)遺跡などがあるが、詳細は不明であり今後の発掘調査を待たねばならない。

弥生時代の遺跡は、風呂銅鐸発見地(7)、上野

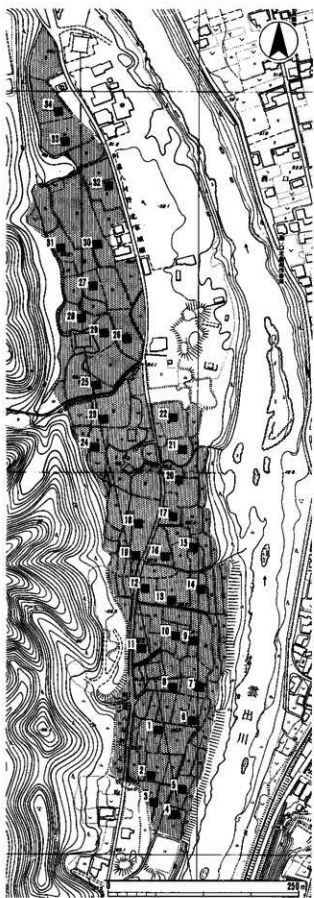
西(8)、川口北方(9)、算所(10)遺跡等があげられる他、野田浦遺跡[◎](11)は昭和46年に発掘調査され、弥生時代の土器数十点が出土した。

また、大角遺跡(4)では昭和57年に一部調査が実施され、弥生時代中期の竪穴住居二棟、並びに壺、甕などが出土した。さらに昭和49年和連野遺跡[◎](12)において弥生時代中期と思われる住居跡数棟を検出している。以上のことから当地域の住居の開始は縄文時代より始まり、その後生活圏を雲出川両岸に展開していったと考えられる。

古墳時代に入ると、同流域左岸の古市古墳(13)を初めとして、馬廻古墳群(14)、扶間古墳群(15)、コメンド山古墳(16)、岩井戸古墳群(17)岩井



第45図 遺跡位置図(1:50,000) (国土地理院 二本木 1:25,000から)



第46図 遺跡地形図 (1:5,000) 黒塗部は試掘坑

戸後方古墳群 (18) 等があげられるが、これらはいずれも1~2基単位の小規模な円墳であり、集的なまとまりをもつ古墳群ではないと推定されている。

奈良時代以降の遺跡では、河口関跡[®] (19) がある。同地は『続日本紀』の中で、聖武天皇が天平12年に行幸を行い、河口の領宮に滞在したという記述があり、同地が領宮跡ではないかとされている。

しかし、発掘調査による確認がされておらず、異論を唱える者もあり同地の比定については不確定要素がある。いずれにせよ河口付近が古代における都と伊賀、そして伊勢地方を結ぶ重要な交通の要衝であったことは確かなことである。奈良時代末期から平安時代にかけては田中名遺跡 (20) があげられる。

中世に入っの遺跡では岩脇C遺跡[®] (21) が昭和57年に発掘調査され、鎌倉から室町時代の遺構、遺物が確認されている。また、昭和59年には古市遺跡[®] (22) が調査され室町時代後半 (15C末~16C初) の遺構を検出し、多数の遺物が出土している。さらに、家野遺跡[®] (23) では平成元年に発掘調査が実施され、鎌倉~室町時代の住居跡・井戸跡を確認している。この他に室町時代の築造とみられる川口城跡遺跡 (24) がある。

2. 遺構

当遺跡全体 (標高約58.0m) の地形は山の尾根が舌状にのびた丘陵上に盛土を行い、平坦にした上で耕作地として利用している。したがって、周りの水田はこの遺跡よりも低いところでできている。また、検出した遺構の時代が明確に分かれたので、便宜上西側をA地区と東側をB地区に分けて記述する。

(1) A地区の遺構

遺構は西から東に向かって低くなっており、(西端と東端の比高差は1.6m) 且つ南面土層において過去、旧耕土上に盛土をおこなっている形跡が認められる。しかしその実施時期は不明である。それらを踏まえてA地区の基本的層序を記すと、

- 第I層 暗灰色土 (耕作土)
- 第II層 暗青灰色土 (床土)
- 第III層 旧耕土 (暗青灰色土)
- 第IV層 黄褐色土

第V層 暗茶褐色土

第VI層 茶褐色土(黄灰ブロック混入)(地山)

遺構検出面は第V層である。この第V層は北西から南東斜面にかけて面的に広がっており、北側では第VI層が検出される。検出した遺構は集石群、自然流路、焼土塊、および土塊等である。

SX1(集石群遺構) 西端に直径6m前後の集石群(500個程度)を検出した。同中及び周辺よりサヌカイト製石鏃、サヌカイトの破片、チャート破片が多量に出土した。また、土器片では押型文土器が2点出土している。

SD2(自然流路) SX1の東端から大きく弯曲しながら南に抜ける溝である。この溝の埋土は淡黄褐色砂質土を主とするものであり、南壁土層の第V層を斬り、大小の砂礫が混入している。SX1の埋没後、後世において急激な流れ込みがあり一気にこの溝が埋まったものと思われる。

小穴 pit3は調査区北端に直径40cmの焼土穴(焼土の深さ15cm)があるが、出土物はない。Pit4は自然流路が南に抜ける西側に直径1m、深さ6cmの

Pitがあり、出土物はない。ただし、その西側に石皿、磨石の組合せが出土している。

(2) B(東側)地区の遺構

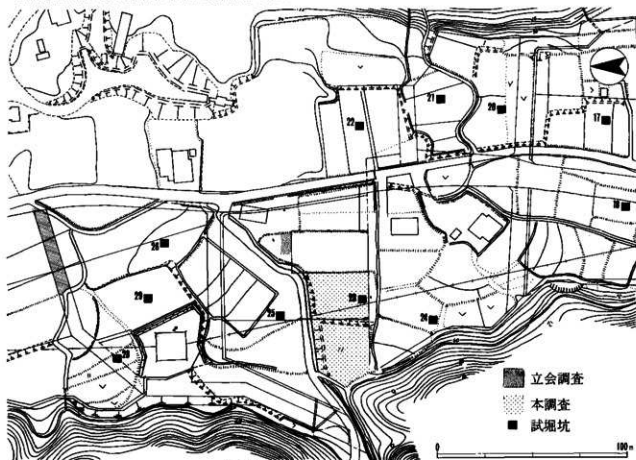
B地区の土層の基本的層序は西側と東側とは相違がある。東端では、後世に於て遺構上に盛土を行い平坦にして利用していることから東端部で複雑になっている。南面にみられる層序を基本とするならば以下ようになる。

第I層 耕作土(10~20cm)

第II層 灰褐色土(床土)

第III層 黄褐色(灰白ブロック混入)土

遺構は第III層であり、この層は東端に深く落込み(東端では第I層から1.0m落込む)でいる。遺構の埋土は殆どが茶褐色土であるが、一部の遺構は黒褐色土、青灰(灰白ブロック混入)粘質土である。検出した遺構は掘立柱建物、槽列、溝、土塊、石組遺構等である。これらの検出遺構は室町時代前期~後期のものである。以下に主なものについて概述していきたい。



第47図 調査区位置図(1:2,000)

SB5 桁行5間(12.5m)×梁行3間(7m)の大型の東西棟で、棟方向はE3°Sで、ほぼ真東を向いている。柱間寸法は桁行2.5m等間で、梁行は2.5m+2.0mである。柱掘形の径は24cm～54cmの円形である。柱掘形より土師器鍋の破片が出土している。

SB6 桁行3間(8.1m)×梁行2間(6.3m)の東西棟で、棟方向はE1°Sで、ほぼ真東を向いている。柱間寸法は桁行2.7m等間で、梁行は南側で3.0m、北側で3.3mの等間になっている。柱掘形の径は24cm～48cmの円形である。柱掘形より土師器の破片が出土している。

SA7 柱間2間(6.2m)で、寸法は西より3.0、3.2mである。柱通りの方向はN95°Eであり、SB5、6に平行する隠し堀と思われる。柱掘形は西から20cm、50cmの楕円、32cmの円形である。

SD8 調査区北西より東に向かって約12m流れ北に抜けると思われる溝(平均の深さ約30cm)である。埋土は青灰(灰白ブロック混入)粘質土で、幅は西で約56cm、中央部で80cm、東は擾乱により検出できなかった。埋土からの遺物はない。また、この溝下の青灰色土層より、時期不詳の土師器片が出土している。さらに地山面が北に大きく下降している状況が認められる。

SD9 B地区で最も明瞭な溝である。この溝は、南で幅約1.2m、深さ約35cmあり、北で約0.9m、深さ約30cm、長さ約29mあるが、調査区を横切るように延びていたと思われる。南北端で比高差が30cmあるため、北から調査区東端に沿うように南に流れていたと考えられる。この溝の埋土から室町時代後期の土師器鍋、常滑産壺の出土があった。しかし、北端については、擾乱の可能性があり不明である。

SK10 長さ約3m、南で幅約2m、北側で1.4mの長円形な土塚で、南側と北側に多くの焼土塊が混入し、下面全体に炭化物が堆積していた。遺物の出土はない。

SX11(石組遺構) 調査区東端にある一辺3m四方の石組の遺構である。この遺構の埋土は、黒褐色土で、下層に下がるにしたがい粘質になる。石組は、20～40cm大の縦長の河原石を西面に約四段積み状態で検出された。その他の面には石はないが、南面には石の窪み痕跡がある。石積みの頂部から底部までの深さは、約0.8mあり検出遺構面からは約1.0mである。SD9の流水路とこの遺構の底との比高差は、0.5mで、石組遺構の方が深い。おそらく、水が一定以上溜ると南側より抜けていく構造であり、水溜としての機能があったと考えられる。

3. 遺物

A地区の遺物は、縄文時代早期と考えられる押型文土器、サヌカイト、チャート製の石鏃及びその剥片と磨石、石皿などである。特にサヌカイトのフレイク、チップは集石遺構周辺から多く出土した。

B地区は、床土から遺構面まで10cm前後と浅いため削平を受けやすい状態であった。従って、西側での遺物量は極めて少ない。東に来るにしたがって遺物が出土するようになる。中でも室町時代後半と思われる壺、壺、鉢等の陶器類、土師器鍋、の各破片、砥石などが出土している。遺構に伴出する遺物としては、石組遺構、溝で見られ、ピット等からの出土はほとんど小片である。その他はすべて遺構上面である。以下時代順に概述していきたい。

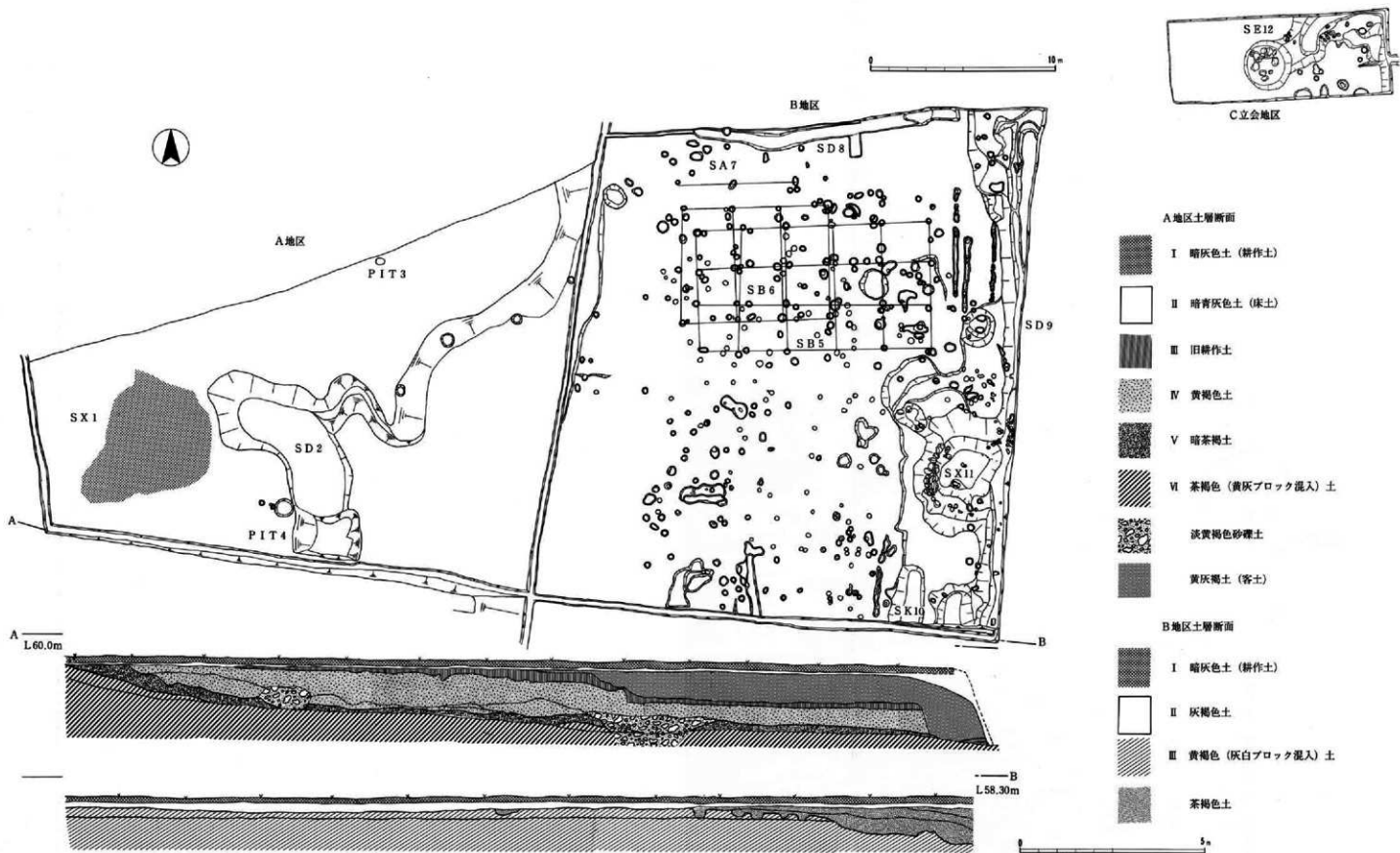
A、縄文時代の遺物

(1) 土器(14～15)

A地区の包含層から出土したものでいずれも体部の一部であり、深鉢形態と考えられる。(14)は体部の小片で、表面にネガティブな楕円の押型文を配すことから縄文時代早期に属するものであろう。(15)も体部の一部で、表面にネガティブな山形の押型文を配している。(14)と同様な時期と思われる。

(2) 石製品 石製品の多くはA地区内、SX1周辺から出土する。中でも石鏃は全部で24点出土し、最も多い。この石鏃の時期については共伴する土器がない為、確定的なことはいえないが、その形態から縄文時代草創期の可能性が高い。

また、この調査区の上流(南西約1kmの水田におい



第48図 遺構平面図 (1:200、A・B地区土層図1:100)

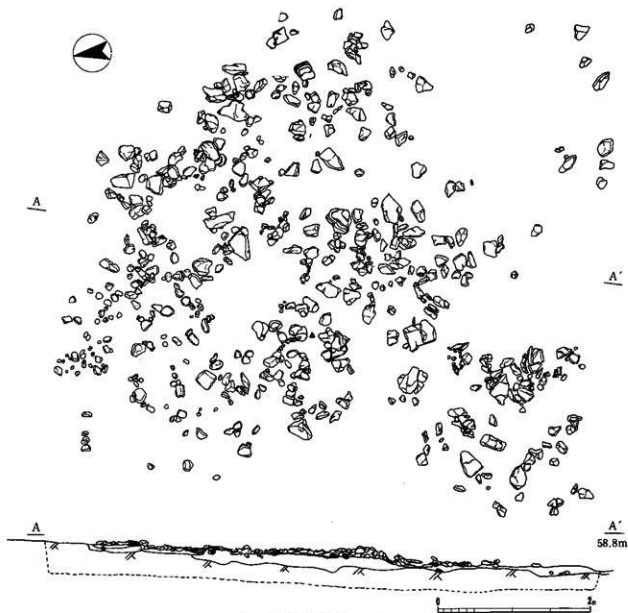
て平成2年度の試掘調査を実施)で縄文時代草創期に比定される爪型文土器が出土していることも考え合わせれば可能性は高まるだろう。

石鏃 (19~29) 基部が凹基または平基で無茎のもので、風化による劣化が進んでいる。A地区集石遺構からの出土が多い。(19~21)は基部が大きく抉れ逆刺部が長くなり先端が尖っている。側縁部はやや外弯している。また、両面とも丁寧な調整が施されている。(19)は比較的古い(縄文時代の草創期に見られる)石鏃に属し、長脚鏃と呼ばれる。(19, 20)はサヌカイト、(21)はチャート製である。(22~23)は凹基で抉りを持ち、鋭い先端部で側縁部が外弯する。逆刺部も鋭い。両面とも調整が入念

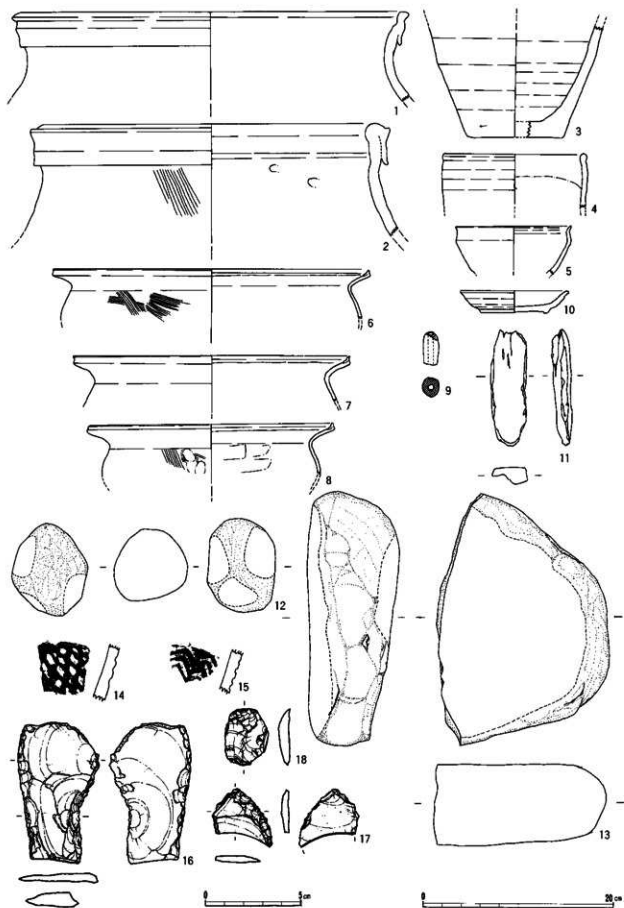
である。(23)は左右不对称である。(22, 23)ともサヌカイト製である。

(24, 25)は凹基で側縁部が直線的になっており、(25)は逆刺部の先端が丸みを帯びている。(24, 25)ともサヌカイト製である。(26~29)はいずれも平基で、三角形を呈し側縁部は直線的である。(27~29)は調整面で、一次剥離面を残す周縁加工が施されている。(27)は基部の抉りが小さく不完全な状態のように思われ、また剥離面を大きく残しており未製品の可能性がある。(27~29)ともサヌカイト製である。

横形石器 (18) ビエスエスキューエとも呼ばれ、チャート製である。剥片を横位に使い対向的な剥離痕を残



第49図 集石遺構 (1:50)



第50图 A、B地区遗物实测图(1:4; 1:2; 14~18)

す。剥離痕は段階状を呈さず、素材の打面をとどめる楔形石器である。

削器＝スクレーパー (16.17) (16) 出土石器の中では最大のものであり、長さ4.2cm、幅7.5cm、厚み0.8cmあり、横長剥片の末端部両面に連続した浅い直線の刃部を作っている。なお、刃部の黒い部分は欠損していることを表す。(17)は背面の側縁に細かな調整を加えて成形されたスクレーパーである。(16.17)ともにサスカイト製である。

石皿 (13) 長軸27.0cm、短軸8.5cmの淡灰白色の花崗岩質の石でほぼ平らな両面に使用痕と思われる摩耗が見られ、中央部分がやや窪んでいる。

磨石 (12) 卵形の花崗岩質の石で、四面に使用痕と思われる摩耗がみられる。石皿と共に出土しており、セットで使用されたと思われる。

B. 室町時代の遺物

(1) S X 11出土の遺物

壺 (1) 残存率10%程度の橙褐色、胎土密、焼成良、の信楽産壺である。口縁部をN字状に折り返し、内面に段状沈線をつける。時期的に14世紀中葉に位置づけられよう。

壺 (2) 須恵質で、灰色を呈し、胎土密、焼成並の壺と思われる。体部から低部にかけて残存して

おり、ロクロナデによる調整があり全面に灰が被る。

土師器鍋 (7) 淡黄褐色で、口径28.8cm、胎土密、焼成良、外面体部に刷毛目(1cmに6本)を施す。

口縁部は、「く」の字形に屈曲して開き、口縁端部は内側に折り返し外面外側が凹線上に窪む。時期的に16世紀に比定できよう。

灰陶皿 (10) 残存率20%の淡黄色、胎土密、焼成良、底部にヘラケズリを施し、削り出し高台とする。

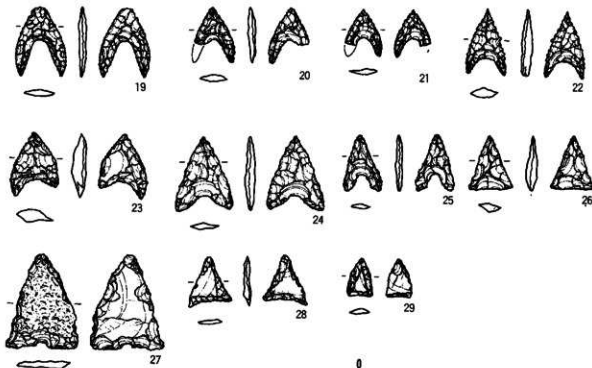
(2) S D 9溝出土の遺物

土師器鍋 (6) 淡黄褐色で、口径32.8cm、胎土密、焼成良、外面体部に刷毛目(1cmに9本)を施す。口縁部をヨコナデし、内面に指オサエの痕跡がよく残る。時期的に(7)と同時期であろう。

壺 (2) 茶褐色を呈し、胎土良、焼成良、口径37.6cmの常滑産壺である。体部に刷毛目状の叩き目がみられ、N字状口縁が下垂して頸部に密着し、折り返し先端部がややつまみ出される。赤羽一郎氏の編年の第V段階前期、15世紀後半と思われる。

(3) 包含層出土遺物

陶器 (4) 残存部分が体部から口縁部にかけて1/6しかないため器種が不明である。



第51図 A地区遺物実測図(2:3) (石器の実例は、久保勝正氏による)

天目茶碗(5) 暗茶褐色の鉄釉がかかり、胎土並、焼成良、口径12.0cmで、口縁部から体部にかけての破片である。体部は丸みを帯び、口縁部はやや内弯し、端部は短く外反する。

土師器鍋(8) 淡黄褐色を呈し内面調整は体部内面に板ナデ、外面に指押えと刷毛目(1cm7本)

を施す。口縁部が「く」の字に屈曲して開口縁端部を内側に折り返す。

土鏝(9) 暗茶褐色を呈し、長さは3.5cmで、端部が欠ける。

砥石(11) 長辺11.2cm幅3.7cmを測る。砂岩質で、片面を使用し、縦方向の使用痕が認められる。

4. 立会調査区

平成2年9月21日、今年度本調査を実施するA・B地区を除くC～E地区について立会調査を実施した。調査面積は計880㎡である。表土上面から30～40cmで地山に達する。D・E地区では遺跡を確認し得なかったが、B地区に隣接するC地区(12m×4.6m)で径約1.2mの円形掘方をもつ井戸SE12と柱穴等を検出した。SE12は約40cm大の川原石を用い

るが、上部崩落のため原型をとどめない。井戸の径は0.7m、深さは僅かに1.5mで、底部の残存状況から円形石積み井戸である。出土遺物は少ないが室町時代のものである。B地区で検出した掘立建物SB5から直線で約20m離れており、両者の関係は不明である。

(4のみ田坂 仁)

5. 結 語

遺構、遺物については概述の通りであるが、若干当遺跡について考えるところを述べたい。第一にA地区の集石遺構であるが、この遺構の下には顕著な落込みがなく、また土壌も持たないことから祭祀や埋葬施設等に使用された可能性は薄い。ただし、集石群遺構の周囲から出土した磨石、石皿、石鏝、および多数のサヌカイトの剥片から、ここで石器を製造していた可能性はあるだろう。第二に、出土した石鏝は殆んど凹蓋無蓋式のサヌカイト製で、一部にチャート製を含んでいる。この石鏝の形態は梳の湖遺跡G-L区黄褐色土層から出土した爪型土器に共伴する第I段階の打製石鏝№137～143、第II段階の№148、149に類似しており、当遺跡近くで爪型土器

器が出土している状況を考えて、この石鏝は縄文時代草創期にさかのぼる可能性が高い。第三に石組遺構については、類似の遺跡として松阪市の山添遺跡発掘調査^⑨(鎌倉～室町時代)がある。こちらは石組の残存状況もよく、同じ様な遺構を数カ所検出している。同報告はその機能を水溜と位置づけている。また同遺構の北東5mの所に2基の石積み井戸を検出していることから、当遺跡の立会調査区Cで検出した井戸と石組遺構との関係に類似するが、それが室町時代に共通する一般的傾向かどうかは不明である。

(1～3、5は吉澤良)

註

- ① 本道弘之「大角遺跡発掘調査報告」白山町教育委員会1973年
- ② 児玉道明・下村良男「野田遺跡発掘調査報告」白山町教育委員会1971年
- ③ 稲生達一「和差野遺跡発掘調査報告」白山町教育委員会1975年
- ④ 色井秀雄編纂「一志郡白山町文化誌」白山町教育委員会1973年
- ⑤ 本道弘之「岩盤C遺跡」[昭和57年度農業基盤整備地域地産地消調査報告]三重県教育委員会1983年
- ⑥ 増田安生、田村隆一「一志郡白山町古市」[昭和59年度農業基盤整備地域地産地消調査報告]年

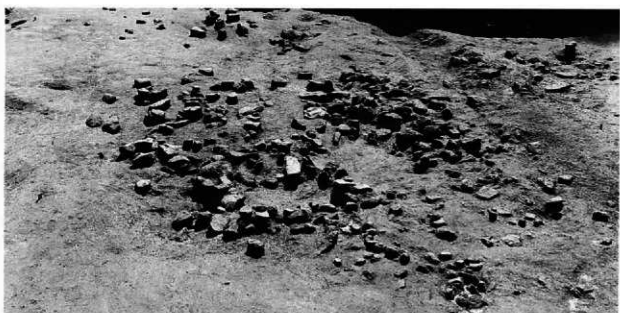
- ③ 三重県教育委員会1985
- ⑦ 報告書未刊
- ⑧ 青宮歴史博物館調査課久保康正氏の御教示による
- ⑨ 山田 猛「下郡遺跡出土の遺物」『Miehistory』vol.1 1990年
- ⑩ 伊藤裕隆「中世伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory』vol.1 1990年
- ⑪ 赤羽一郎「常滑焼」『考古学イブリー23』ニュー・サイエンス社1984年
- ⑫ 原 寛・紅村 弘「梳の湖遺跡調査報告」坂下町教育委員会1974年
- ⑬ 新田洋・森田尚宏「山添遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会1979年



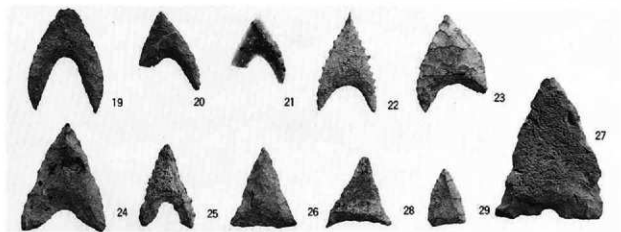
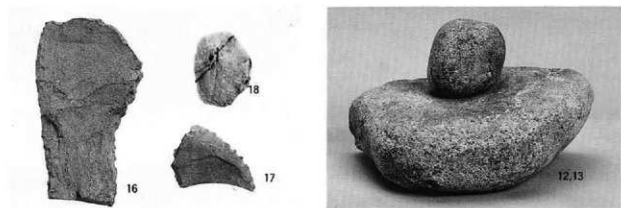
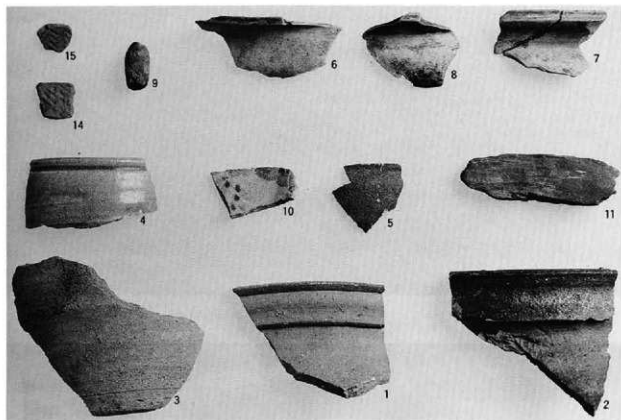
A地区全景（東より）



B地区全景（南より）



集石群遺構（北より）



出土遺物 上段 (1 : 3)、中段左 (2 : 3)、中段右 (1 : 4)、下段 (1 : 1)

Ⅸ 多気郡多気町^{あらまき}荒蒔^{うえのがいと} 上ノ垣外遺跡

1. 位置と環境

紀伊半島のほぼ中央部、奈良県境の高見山付近に源を発する備田川は、三重県の中央部を東流し伊勢湾に注ぐ河川である。上流域では今なおほげしい下刻を続け険しいV字谷を形成し、中流域では蛇行を繰り返しつつ河岸段丘を発達させてきた。JR紀勢本線の鉄橋付近、本流と敷川との分流点から下流域の様相を呈し、肥沃な沖積平野を形成している。さて、ここに報告する上ノ垣外遺跡は、低位段丘面の幅も広くなり、下流域の様相が濃くなる多気郡多気町荒蒔の、備田川右岸標高22mの自然堤防上に立地している。現在の荒蒔の集落の南には、南西から流れてきて備田川に注ぐ小河川に沿って比高約0.5～1mの自然堤防がみられる。遺跡はこの自然堤防上の全面に広がっており、遺物の散布がみられる。

散布している遺物には、縄文時代の土器片および

石器、刺片のほか、歴史時代の土師器片、須恵器片、陶器片などがある。

当遺跡の周辺は埋蔵文化財の宝庫といっても過言ではなく、先史時代からの数多くの遺跡が分布しており、発掘調査が実施された遺跡も多い。くわしくはそれらの報告書を参照されたい。

ところで、当遺跡周辺の水田地帯には古代の条里制の地割がよく残っていたが、今回の調査原因ともなった場整備事業によって姿を消してしまった。若干の研究はあるものの、今後の条里制研究には大きな障害となろう。

また、平安時代以降、当地周辺は東寺領大因荘・川合荘の荘域が展開する地域であり、かつ荒蒔は伊勢神宮の御園となることから、これらとの関連についても検討していかなければならない。



第52図 遺跡位置図 (1:50,000)

2. 遺構

発掘区の基本的な層序は、上から第一層：淡褐色土（表土）、第二層：暗褐色土マンガン粒沈着（床土）、第三層：暗褐色土（包含層）、第四層：黒褐色土（地山）である。遺構は第四層上面で検出した。

検出した遺構には溝3条、井戸4基、土坑、ピットなどがある。ピット内に偏平な川原石を根石として据えた柱穴を2個検出したが、住居跡としてまとまらなかった。発掘区全体にわたって遺構面がかなり削平を受けているものと思われる。

A. 飛鳥〜奈良時代の遺構

溝

SD4 発掘区を斜めに走る南北方向の溝である。

検出面での幅は1.0~1.2m、底面で0.5~0.6m、深さ0.5~0.8mで、断面形は逆台形を呈する。この溝はN19° Eの方向に直線的にのび、南から北にむかって流れる。溝の底面は平坦で、一部に川原石が貼りつけられたと思われる箇所もあった。埋土は淡褐色土の単層であった。

遺物は検出面から約15~20cm下のレベルから彩形にちかい遺物が多く出土した。土師器では椀、杯、高杯、甕が、須恵器では杯蓋、杯身、高杯、広口壺、短頸壺、甕、甌、器台などがある。

B. 平安時代の遺構



第53図 遺跡地形図 (1:5,000) 黒塗部は試掘坑

井戸

SE2 発掘区北半のほぼ中央部で検出した直径1.8mの素掘り井戸である。検出面からの深さは1.4mであった。埋土は上部約40cmに径4～8cm程の円礫の混じる淡黄褐色土、それ以下は黒褐色土混り褐色土であった。遺物量は少ないが、土師器皿、甕、ロクロ製土師器、緑釉陶器片などが出土した。

SE3 SE2の南方3mに位置する。直径1.8mの円形の素掘り井戸である。検出面からの深さは約1.8mで、底には各辺3～4枚の縦板で組んだ方形の井戸枠が残存していた。縦板のうち一部には下部中央付近に一辺約6～8cm程度の方形孔が残っていたが、他の部材がはめこまれていた形跡はない。検出面から1.3mで湧水。土師器皿、甕、ロクロ製土師器、黒色土器、灰釉陶器、瓦などが出土した。

SE8 発掘区の中央部東端付近で検出した。SD4に重複する。直径1.5mの略円形を呈し、検出面

からの深さは2.3mである。底面では方形を意識した掘り形であるが、曲げ物や井戸枠などは検出されなかった。検出面から1.5mで湧水。土師器皿、鍋、山茶碗、木製品、種実などが出土した。

C. 鎌倉時代の遺構

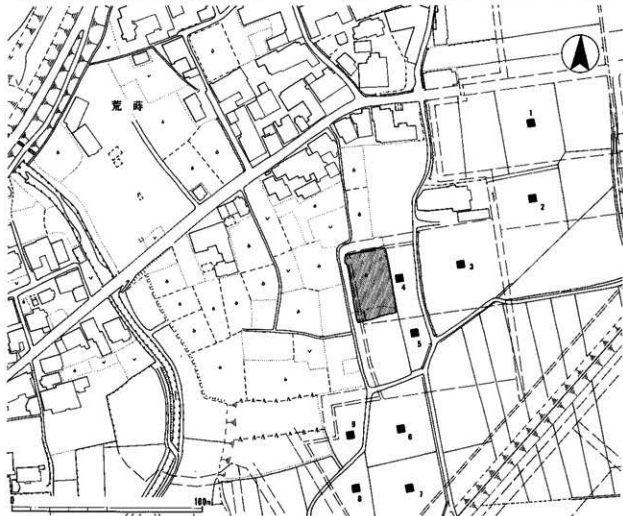
井戸

SE6 発掘区の南東端で全体の約4分の1を検出した。二段の掘り形をもち、検出面で半径約3mと思われる。約50cm下の中段で半径約1.5mの規模を有する。完掘できなかったが、褐色礫混りの埋土中からは土師器、山茶碗、瓦片などが出土した。

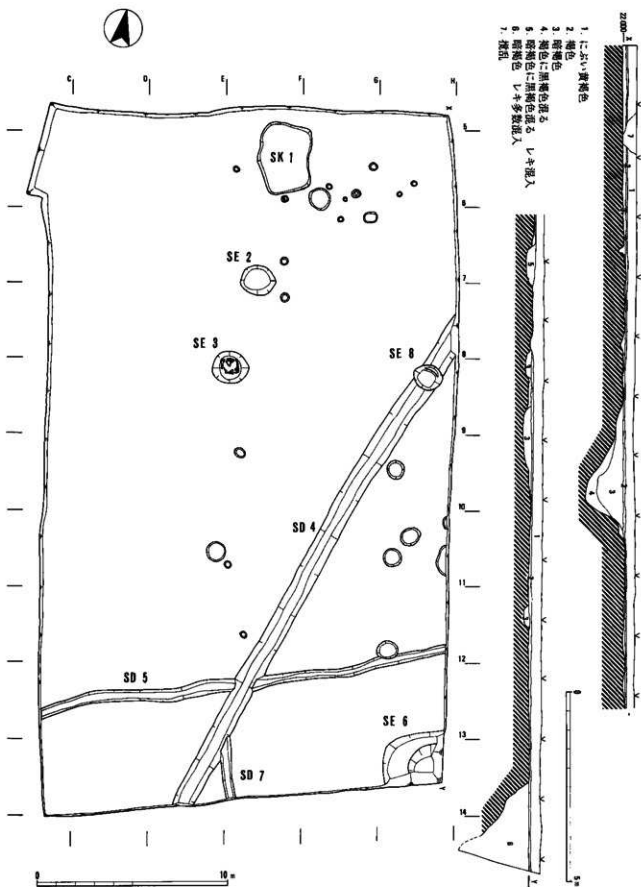
D. 時期不明の遺構

土坑

SK1 発掘区の北中央部付近で検出した。東西約2.8m、南北3.6mの略長方形を呈する浅い土坑であ



第54図 発掘区位置図(1:2,000) 黒塗部は試掘坑



第55図 遺構平面図 (1:200)、発掘区東壁土層断面図 (1:100)

る。深さは10~15cmで中央部がやや深い。底面はほぼ平坦である。土師器の細片が出土したにすぎない。溝

SD5 発掘区の南部を南西~北東に走る浅い溝である。検出面での幅は0.5~0.8m、深さ16~20cmで、断面はカマボコ形を呈する。埋土はSD4と同様で切り合い関係は確認できなかった。土師器の破片が

微量出土した。

SD7 発掘区の南端は中央部にて検出。南北方向の溝で、北はSD4に重複し、南は発掘区外へのびる。幅50~60mで深さ20mの浅い溝である。SD4と同様の埋土のため切り合い関係はつかめなかった。土師器の小片が出土しただけである。

3. 遺物

整理箱に6箱分出土した。小片だが弥生時代後期の高杯片や壺片を最古として、中世までの遺物が出土した。

A. 飛鳥~奈良時代の遺物

1. SD4出土遺物

混入品も含まれるが、ほぼ2時期におさえられる遺物が出土した。

土師器

椀A (1~4) 口径約10cmと14cm程度のもがある。底部からやや内弯気味に立ち上がり、口縁部はつよくヨコナデされ若干反する。胎土は精良で焼成は良好。椀Bに比べ薄手である。

椀B (4・5) (5)は粘土紐巻き上げによる接合痕が螺旋状に明瞭に残る。底部から体部へとゆるかに内弯し、底部と体部の境は不明瞭。底部外面には指頭圧痕が残る。また底部外面にはヘラ状工具による細く鋭い沈線(ヘラ記号?)が施される。(6)には内外面にハケメが若干残る。

杯(7~9) いずれも口径が11~12cmで粘土接合痕が明瞭に残る。

高杯(10・11) 脚部は円柱状で(11)は中間で若干膨らむ。(10)は縦位のハケメ調整により面取りというほどの明瞭さはないが、不規則な面をもつように仕上げられている。

甕(12) 推定口径34cmほどの把手付甕である。以上のほか土鍾(13~15)がある。

須恵器

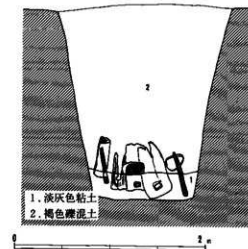
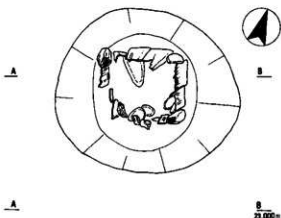
杯A (16・17) 口径10~11cmの立ち上がりの低い杯身である。

杯B (19) 口径約9cm、器高4cmで高台のつかな

い杯身である。

杯蓋(18) 口径12cm、器高2.9cmで偏平なつまみがつく。

高杯(20・21) (20)は脚部下半を欠失するが、脚部には小さな円孔の透しが2ヶ所ある。また杯部の底部外面には「×」印のヘラ記号がある。(21)は脚部のみ破片。長方形の1段透しが2ヶ所に配される。(20)は磨耗が著しい。



第56図 SE3実測図(1:40)



第57图 出土遗物实测图 (1:4)

1~28 SD 4
 29~31 SE 2
 32~36 SE 3

短頸壺 (22) 口径10.7cm、器高9.4cmで頸部がやや長い。体部最大径部のすぐ上部に浅い沈線が施され、体部下半はヘラケズリ。

広口壺 (23) ほぼは完形。口径12.6cm、器高16.3cm。体部上半はカキメ、下半はヘラケズリ。(5)の土師器碗と共伴。

甕 (24・25) (24)は口縁部が大きくラップ状に開くもの。肩部に「N」字状のヘラ記号がある。注口部には使用痕と考えられる磨減が認められる。(25)は体部がより扁平で注口部が一部突出する。底部には「N」字状および「×」のヘラ記号がある。

甕 (26・27) (27)はこの他にも体部片が多く出土している。体部外面はタタキのちカキメ、内面はタタキで青海波文が残る。

B. 平安時代～鎌倉時代の遺物

1. SE 2 出土遺物

土師器甕 (31) やロクロ製土師器 (29・30) などがあるほか、緑釉陶器の細片がある。

2. SE 3 出土遺物

土師器

皿 (32・33) いずれも底部と体部の境が不明瞭で、(33)は体部外面に指頭圧痕が残る。

甕 (34・35) 細片であるが、口縁端部は折り曲げられず面をもつ。

このほか、黒色土器碗 (36)、ロクロ製土師器、山茶碗などがある。

3. SE 8 出土遺物

土師器

小皿 (37) ユビオサエによる成形がなされる。他にも口径10cm前後の皿もある。

ロクロ製土師器

碗 (38) 底部片である。磨耗が著しいが、糸切り痕が残る。

陶器

山茶碗 (39～42) 体部が内湾ぎみに立ち上がるもの (39～41) と、大きく内湾しながら立ち上がる (42) がある。(39・40)は口縁部がつよくヨコナデされ外反し、口縁部内面に稜をもつ。(39)には輪花風のユビオサエ痕がみられる。

木製品

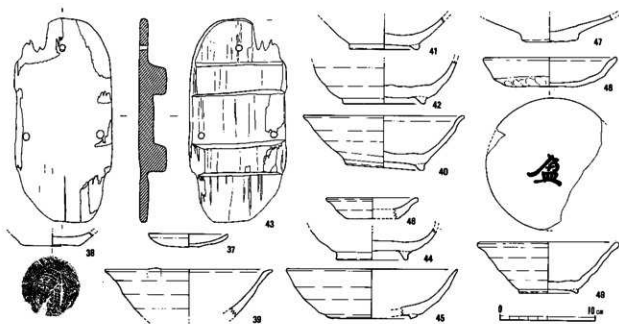
下駄 (43) 1点のみ出土した。比較的遺存の良好なもので、先端部の一部分が焼け焦げている。

4. SE 6 出土遺物

山茶碗 (44・45) (44)はやや強く内湾する体部をもつもので高台は高い。(45)は低く細い高台をもつ。このほか無高台の小皿 (46) などがある。

C. 包含層、試掘坑出土の遺物

土師器甕 (47) 平底の底部片である。弥生時代後



第58図 出土遺物実測図 (1:4) 37～43はSE 8、37～46はSE 6、他は包含層

期のものかもしれない。

土師器杯 (48) 試掘坑 No. 9 から出土したもの。口径 14cm、器高 3.1cm で底部外面に「盈」の墨書が明瞭に残る。平安時代初期に比定できる。

山茶椀 (46) 底部から直線的に外方へ立ち上がるもの。口径部は丸くおさまられ、やや肥厚する。高台はやや細く低いもので、モミガラ痕が残る。

4. 結 語

今回の調査地は上ノ垣外遺跡の東縁部にあたる一部分であったため、遺跡の内容や性格等について明らかにすることはできなかった。遺跡の中心は今回の調査地より西側の畑地帯に広がるものと考えられる。ここでは検出された若干の遺構、遺物についてまとめてみたい。

ほぼ南北方向に直線的にのびる溝 SD 4 から遺物の大半が出土した。このうち、土師器 (1~6、10・11)、須恵器 (16・17、21~25) は飛鳥時代に、また土師器 (7~9・12) や須恵器 (18・19) などは奈良時代初頭に比定できよう。これらの遺物は奈良時代のものが比較的上層から出土する傾向であったものの混在して出土した。したがって、溝 SD 4 の埋没時期は奈良時代初期と考えられる。

ところでこの SD 4 の断面形は逆台形を呈し直線

的にのびることから、企画性の強い集落の区画溝的な性格を有するものと考えられる。なお、条里の地割方向とは異なり関連はないと思われる。むしろ SD 5 や SD 7 などが条里との関連が考えられよう。

また、井戸が 4 基検出されたが、出土遺物からは SE 6 が鎌倉時代に下るとおもわれるほかは、すべて平安時代後～末期の近接した時期のものと考えられる。住居跡こそ検出されなかったが、遺跡の中心部に近いことを思わせる。試掘調査などの結果も総合すると、縄文時代および飛鳥～鎌倉時代の集落跡が今後検出される可能性が高い。近い将来に今回の調査地西方に道路建設が計画され、発掘調査も実施される予定であり、成果が期待される。

(田村 陽一)

(註)

- ① 近辺で発掘調査が行われた遺跡としては本山遺跡、飯倉遺跡、射原埴内遺跡、上寺遺跡、鐘突遺跡、溝ノ木遺跡、中尾古窯跡、河田古墳群、五佐奈遺跡、ミゾコ遺跡などがある。
- ② 下村登良男性「上寺遺跡発掘調査報告」松原市教育委員会 1981
下村登良男性「鐘突遺跡発掘調査報告」松原市教育委員会 1981
下村登良男「中尾古窯址発掘調査報告」河田古墳群発掘調査報告 IV」多気町教育委員会 1986
増田安生「ミゾコ遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1985
三重大学歴史研究会「ふびと」34 三重大学歴史研究会 1978
- ③ 谷岡武雄「第田川中・下流域の条里」河川の歴史地理 1958
伊永貞三・谷岡武雄「伊勢湾岸の古代条里制」1979
- ④ 倉田康夫「条里制と花園」1976
- ⑤ 斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』三重県斎宮跡調査事務所 1985

試掘坑 No	遺物包含層 下層の深さ cm	遺 構 上面の深さ cm	遺 構	遺 物	備 考
1	—	—	—	—	
2	—	—	—	—	
3	—	—	—	—	
4	2.0	3.0	—	土師器 (平安)	
5	2.5	4.5	—	*	
6	2.5	5.0	—	土師器 (平安・中世) 山茶椀	
7	2.0	4.5	—	土師器 (中世)	
8	—	—	—	—	
9	2.0	4.5	—	土師器 (平安) 須恵器	墨書「盈」

第 6 表 上ノ垣外遺跡試掘調査結果一覧



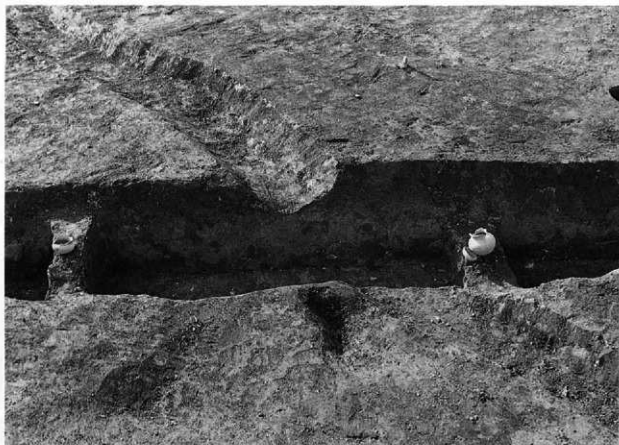
遺跡全景 (西上空から)



調査後全景 (南から)



SD4 (北から)



SD4 遺物出土状況 (東から)



SK1、SE2.3 (北から)



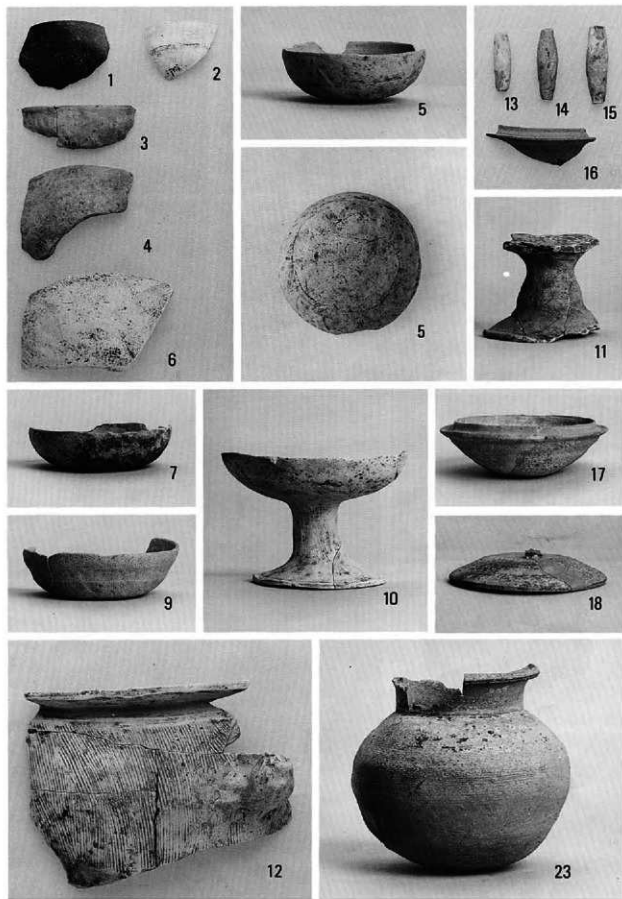
調査風景



SE 3 (東から)



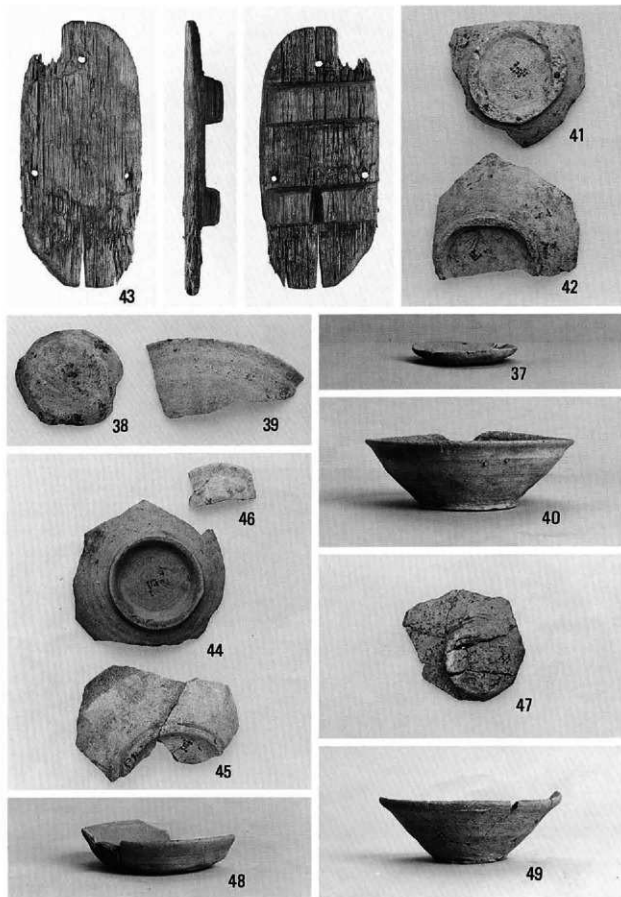
SE 6 (西から)



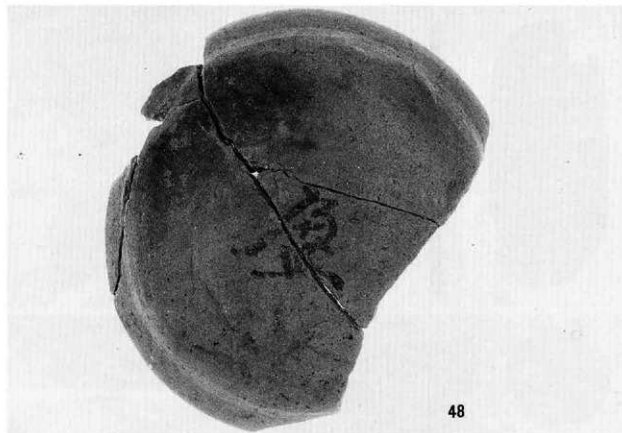
出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



48

黒書土器



24

須恵器のヘラ記号

X 度会郡度会町脇出 ^{こしょうら}御所裏遺跡

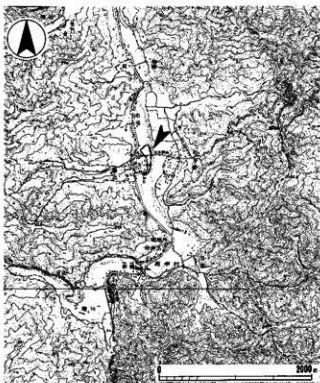
立会い調査のまとめ

はじめに

御所裏遺跡は度会町脇出字御所裏に所在し、同町西南部の山地に源を発する一之瀬川の形成した標高約66mの段丘左岸上に位置する。現在は脇出の集落を二分するように県道が走り、能見坂峠を経て南島町に至る。この道は、古くより一之瀬から現南島町の橋柄浦へ出る交通路として利用されてきたという。そしてその道を塞ぐかのような、ひときわ日立つ独立丘陵上に一之瀬城があり、御所裏遺跡は一之瀬城と一之瀬川に挟まれた段丘上に広がっている。

遺構

今回は、排水路の設置によって掘削される部分について、巾1.5m長さ58mのトレンチ状の調査区を設けて立会い調査を行った。調査期間は平成2年8月30日から同8月31日であった。ただこの調査区は、17,650㎡にも及ぶ遺跡の全体よりすればごく一部に



第59図 遺構位置図 (1:50,000)

すぎず、本遺跡が一之瀬城内である可能性の高いことを考慮して、平成2年2月7・8日に行った試掘調査の結果と併せて報告することとした。

A. トレンチ部分

地山は若干の砂礫を含む黄褐色土で、表土下40～50cmで達する。地山上には20cm程の暗褐色土の遺物包含層があるが、包含される遺物量は少なかった。

トレンチの巾が1.5mときわめて狭かった関係上にわかに遺構の性格を断定することはできないが、土坑と考えられるものを3基(SK1～3)、柱穴状のものを1基検出した。そのうち特に注目されるのがSK1とSK2で、出土土器も比較的多い。

規模は、SK1が巾9.5m、SK2が4mで、深さはいずれも検出面より40cm程度であった。

埋土は包含層とほぼ同質の暗褐色土で、SK1には人頭大ほどの石が多く入っていたが、人為的に積まれたような形跡はなかった。

出土遺物は土師器小皿が主であったが、SK1からは小刀と思われる鉄製品や、花崗岩で作られた五輪塔の空・風輪も出土している。

なお、このSK1・SK2は、当該トレンチに直交した溝である可能性もある。

B. 試掘調査部分

試掘坑No.19: 表土下約20cm、赤褐色の床土を除去した時点で石畳状にならぶ石組を検出した。石の大きさは40～50cmとほぼ均一で、縦に3段階確認した。石組の面は一之瀬川方向を向いていると考えられ、暗褐色の埋土からは多量の土師器小皿が出土した。表土から石組底部までの深さは約90cmであった。

試掘坑No.30・31: No.30は表土より約35cmで遺構検出面に達する。No.31では若干浅く、約15cmであった。地山はいずれも黄褐色土である。

No30では比較的大きな土坑状の遺構が、No31では柱穴状の遺構が検出できた。遺物は少量ながら、土師器小皿や土師器鍋、焙烙などが出土したものの遺構の性格については不明である。

遺物

A. 土師器

小皿(1~4) 試掘調査部分を含めて各遺構に共通して出土しており、量的にも他の器種に比べて格段に多い。特に試掘坑No7と19では異常なほどであり、完形品の多いことも注目される。

口径は、10cm弱のもの(1)と7cm前後のもの(2~4)がある。器高は、前者が2.5~3cm、後者が1~1.5cmであった。量的には小型のものがそのほとんどを占めている。

口縁はヨコナアを施さず、粗雑である。内面はナデられているが、外面はユビオサエが主体で、指頭圧痕を残す。

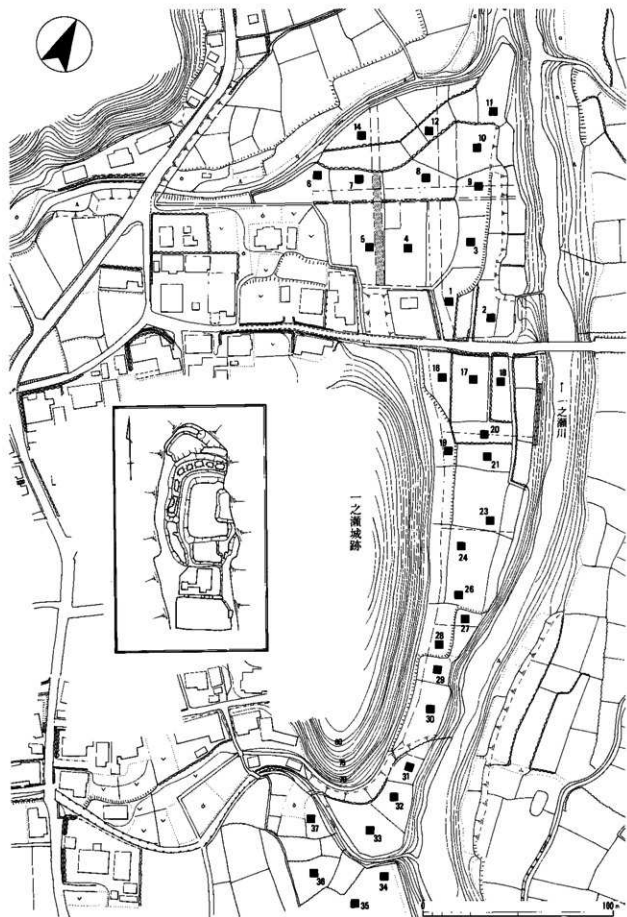
胎土は若干砂っぽいものの焼成は良好で、器壁も2

試掘坑 No.	遺構	遺物	試掘坑 No.	遺構	遺物
1	—	—	20	—	—
2	—	—	21	土坑	土師器(多)
3	—	—	23	—	—
4	—	—	24	—	—
5	—	—	26	土坑	—
6	溝	土師器	27	—	—
7	土坑?	土師器等(多)	28	小穴	—
8	—	—	29	—	—
9	—	—	30	土坑	土師器
10	—	—	31	土坑	—
11	—	—	32	—	—
12	—	—	33	—	—
14	—	—	34	—	—
16	—	—	35	—	—
17	—	—	36	—	—
18	—	—	37	—	—
19	石室?	土師器(多)			

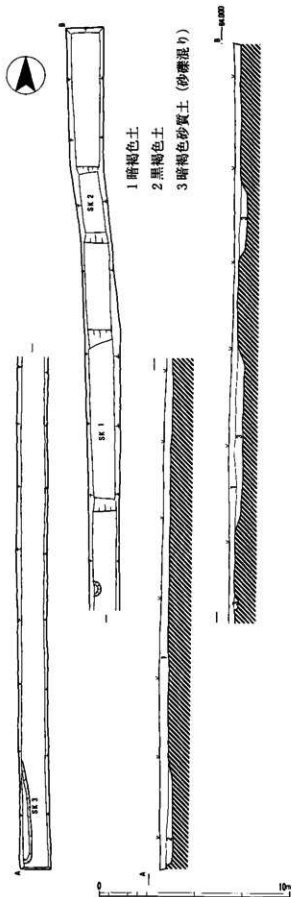
第7表 試掘調査結果一覧



第60図 遺跡地形図(1:5,000)



第61図 調査区位置図 (1 : 2,000) 黒塗部は試掘坑



第62図 遺構平面図 (1 : 200)

mm前後と薄い。色調は褐色味をおびた白色を呈する。油煙の痕跡は全く見られなかった。

皿 (5) 口径は16cm、器高は3.2cmである。試掘坑No 7より完形で出土した。またこのNo 7からは同器種が数個体出土している。中には、内外面に煤か一面に付着しているものもあった。

口縁付近にはヨコナダが施され、内側にやや彎曲する。内面はユビオサエの後ナダられているが、外面には指頸圧痕がよく残る。

焼成は良好で、胎土はやや粗い。器壁は2mmと薄く、色調は褐色味をおびた白色である。

鍋 (6~8) 6は試掘坑No 19より、7は試掘坑No 7、また8はSK 1より出土した。

6は南伊勢地域に独特の器形である。口径は約29cmで、口縁部内外にはヨコナダが施こされている。口縁端部は、内側に折り返すとともに、大きく三角形状を呈している。体部外面には粗いハケメが見られ、横方向に行った後縦方向に施こしている。胎土は比較的緻密で、焼成も良好である。外面には煤が付着していた。

7と8は小型で、形態も6とはやや異なる。

7の口径は20cmである。口縁は大きく外返し、端部は内側に折り返す。口縁端部の内面には、比較的強い面と稜線を持つ。体部外面はやや細かいハケメで調整されており、器壁も薄い。外面には一面に煤が付着している。

8の口径は約18cmである。口縁部は強く外返させている。端部は内側に折り返し、内外に面を持たせてゆるく三角形状を呈す。口縁部内外にはヨコナダを、体部内面にはナダを施すが、体部外面はヘラケズリされている。胎土・焼成とも良好で、器壁は薄い。外面には一面に煤がよく残る。

B. 陶磁器

天目茶碗 (9) SK 1より出土した。口径は11.6cmで、高台部分を欠く。口縁部はわずかに外返し、端部は丸味をおびる。体部下半から副高台にかけてヘラケズリが見られ、高台はケズリ出しと推定される。内面から外面下半には鉄軸がかけられ、茶色を呈す。胎土・焼成ともに良好である。

白磁皿 (10) 口径は11.8cm、器高は約3cmで、SK 1より出土した。口縁部は小さくかつ強く外返し、

端部はやや丸い。高台は外面に隆線を持ち、鋭くとがる。ほぼ全面に白色の釉がかけられている。

播鉢 (11) 口径30.8cm、器高12.1cmである。口縁部は薄めで垂直方向上下に延び、2.2cm程の縹帯を形成する。ロクロで成形され、底部には糸切りの痕跡を残す。内面には播目が、推定で16分割で施こされている。播目は約16本、原体巾はおおよそ3cmであった。全面に暗紫青灰色の鉄釉がかけられている。底部付近の播目上の釉がほとんど磨耗していないところから、木使用品である可能性が高く、瀬戸産と考えられる。

結 語

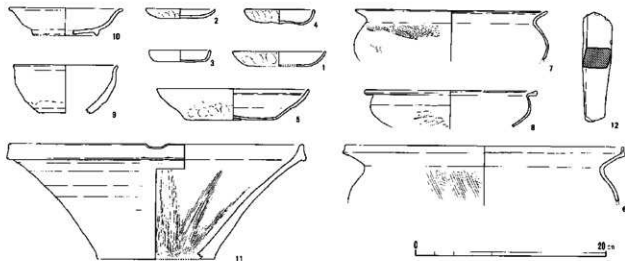
今回の調査では、御所裏遺跡が一之瀬城内であったという確証を得ることができなかった。しかし小字名が一之瀬城主を「一之瀬御所」と称したと言う伝承より来ているものと考えられること、また地形的に本遺跡が一之瀬城跡の丘陵とともに三方を深い川で囲まれていることから、その可能性は否定できない。試掘坑No.19で石畳状の遺構が確認されてことも示唆的である。また出土遺物のほとんどが15世紀末から16世紀前半としてとらえられ、一之瀬城の存続時期とはほぼ一致していると考えられることもその裏付けとなろう。

一之瀬城がいつ頃誰によって築かれたかについては、残念ながら確実な史料全くない。しかし南北朝期この地に宗良親王のいたことが『季花集』に見えており、有力土着の存在を想起させる。または同時期の史料によれば、一瀬御園の下地が源熊菊丸の

進止とされている⁽³⁾ことも注目できる。この熊菊丸の名は、史料価値に若干の問題があるものの源氏末流愛洲氏の系図の一つである『紀州武田氏系図』中にも見えており、この地が一時期愛洲氏の勢力下にあったことはほぼ間違いない。その後一之瀬城主と考えられるものは、「一之瀬兵部少輔」を最後に史料上から姿を消すのである。(小林 秀)

注

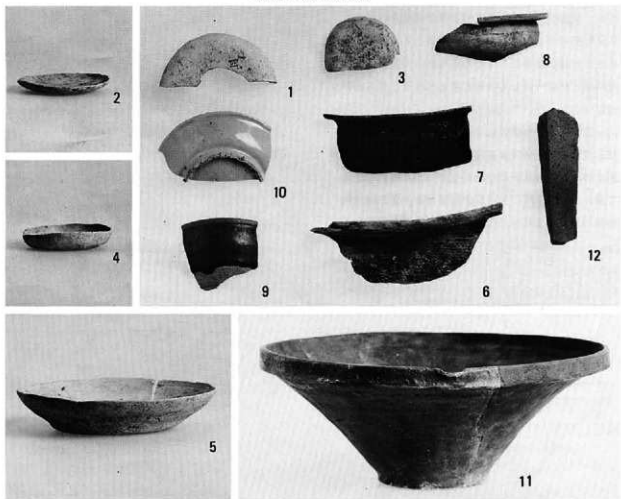
- (1) 『二重島の地名』(日本歴史地名体系24 平凡社 1983)
- (2) 『光明寺古文書』正中2年2月8日菩提山供僧庫少僧頭四親・源熊菊丸達寄和与状案(日本歴史体系 六代中世史料編2)
- (3) 中世古洋遺氏『伊勢愛洲氏の研究』1975
- (4) 『日本文典』年不詳2月6日 一瀬兵部少輔状(『伊勢愛洲氏の研究』所収)



第63図 出土遺物(1:4)



発掘区全景 (南から)



出土遺物 (1 : 3)

XI 阿山郡阿山町馬場 小倉遺跡

1. 位置と環境

阿山町は伊賀盆地の北部に位置し、北から西にかけては滋賀県の甲賀郡、南は上野市と接する。

町の中心部を河合川が南流し、円徳院地内で鈴鹿山脈に源を発する柘植川と、さらにその下流で服部川と合流して木津川となり淀川を経て大阪湾に至る。河合川が柘植川に合流する付近は、河合川を境に、

東は標高200m～270mの水口丘陵が伸び、西は標高200m～700mの信楽高原が京都府加茂町まで続いている。これら二つの高原の間に開ける低地は、河合川、瀬田川の合流点ということで古くからいわゆる河合郷と呼ばれ、今回調査した小倉遺跡(1)は河合地区の中央部、大字馬場の地内に位置する。

古墳時代になると、阿山町内やその周辺の地域に

多数の古墳が築かれた。水口丘陵先端部に築かれた東山古墳(2)は、埋葬主体部に削竹形木棺を直葬する4世紀はじめの県内でも最古の古墳と推定されとされている。また、船載三角縁神獸鏡を出土した山神寄建神社古墳(3)、円筒埴輪を出土した外山3号墳(4)は前方後円墳で前期古墳とみられている。5世紀前半には上野市佐那具に全長188mの御墓山古墳(5)が築造されている。また、外山1号墳(4)は5世紀中葉から後葉のものともみられている。5世紀末から6世紀の前半の古墳には、前方後円墳のキラ土古墳(6)、円墳の馬塚古墳(7)、そして阿山町内では陽夫多神社裏山の丘陵先端部に全長40mの宮山1号墳(8)が位置する。古墳時代後



第64図 遺跡位置図(1:50,000)(国土地理院 上野 1:25,000から)

期になると勘定塚古墳(9)、奥弁天4号墳(10)、今回調査した小倉遺跡A地区に接する御旅所古墳(11)といった横穴式石室を持つ古墳が、周辺の丘陵に多数造られた。また、古墳時代の集落遺跡としては、宮ノ森遺跡(12)や喜春遺跡(13)、畔垣内遺跡(14)、天道遺跡(15)がある。

律令制の時代に当地は「阿拝郡河合郷」と『倭名類聚』に記載されている。当時、伊賀の四郡(阿拝、山田、伊賀、名賀)には条里制がしかれており、阿拝郡においては栢植川沿いに広く見られ、河合郷は

その十二条に当たる。また、上野市板之下(16)では奈良時代のもと思われる掘立柱建物や木簡等が発見され、伊賀国府としての可能性が高まっている。しかし、都に接する伊賀の国は早くから中央貴族や南都大寺院による土地の私有化が進んでいた。平安時代には、東大寺領玉滝庄、大安寺領栢植庄、萬寿院領河合庄などが経営されている。伊賀町跡の遺跡(17)は平安後半から鎌倉の遺跡で、掘立柱建物跡がみられ、円徳院古屋敷遺跡(18)では平安中期の黒色土器が多数出土した。

遺構と遺物

1 遺構

調査地区は、大きく4つに分かれる。ここでは御旅所古墳の南を小倉A遺跡、小倉A遺跡の南を小倉B遺跡、河合川右岸に接する地区を小倉D遺跡、小倉D遺跡の西を小倉C遺跡と設定した。

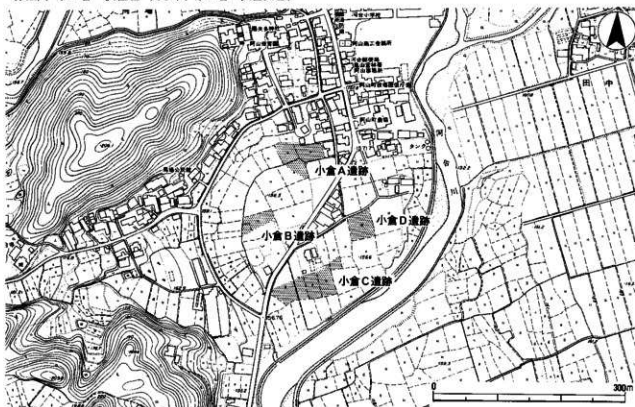
〔小倉A遺跡〕

土層の基本的な層序は、第1層・青灰白色(耕作土)、第2層・淡橙色(床土)、第3層・淡橙灰色、

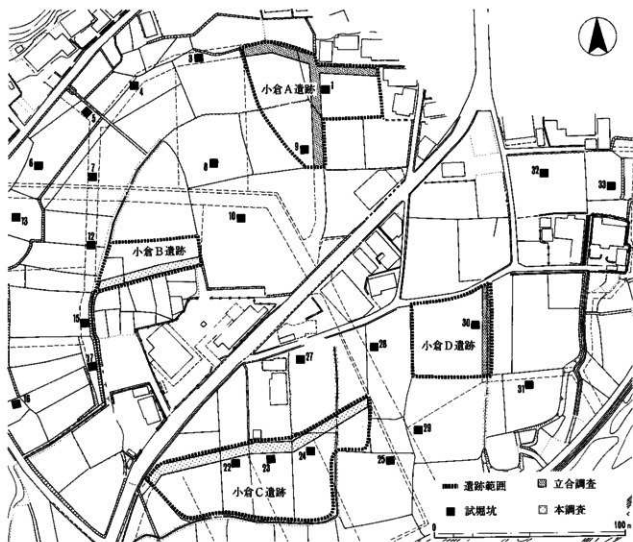
第4層・橙灰色、第5層・橙茶灰色(包含層)、第6層・青灰色(包含層・溝埋土)である。

溝(SD1)

表土から2m下の層から検出された。南北約5mの幅を持ち、溝埋土の上層には炭化した植物遺体が薄く堆積していた。50cm程掘り下げたが、底は検出できなかった。埋土中より多量の円筒埴輪片と象形埴輪と思われる破片が数点出土している。



第65図 遺跡地形図(1:6,000)



第66図 遺跡地形図 (1:2,000)

〔小倉B遺跡〕

土層の基本的な層序は、第1層・淡灰白色（耕作土）、第2層・淡黄灰色（床土）、第3層・淡茶灰色（包含層）、第4層・淡褐色（遺構検出面）である。

耕作土の厚さは20～30cm、包含層は20～30cmである。

竪穴住居（SB1）

調査区とはほぼ平行して幅20cmの溝（SD4）を調査区西端から検出した。SD4と直交して幅20cmの溝（SD3）を、それに平行してSD2を検出した。またSD4の中央部付近に支柱石を持つ直径80cmの竈が検出された。SD2、SD4からは古墳時代の須恵器が出土した。調査区が限られており、耕作による削平も受けているため、全体の規模や範囲は不明であるが、竪穴住居であることが考えられる。

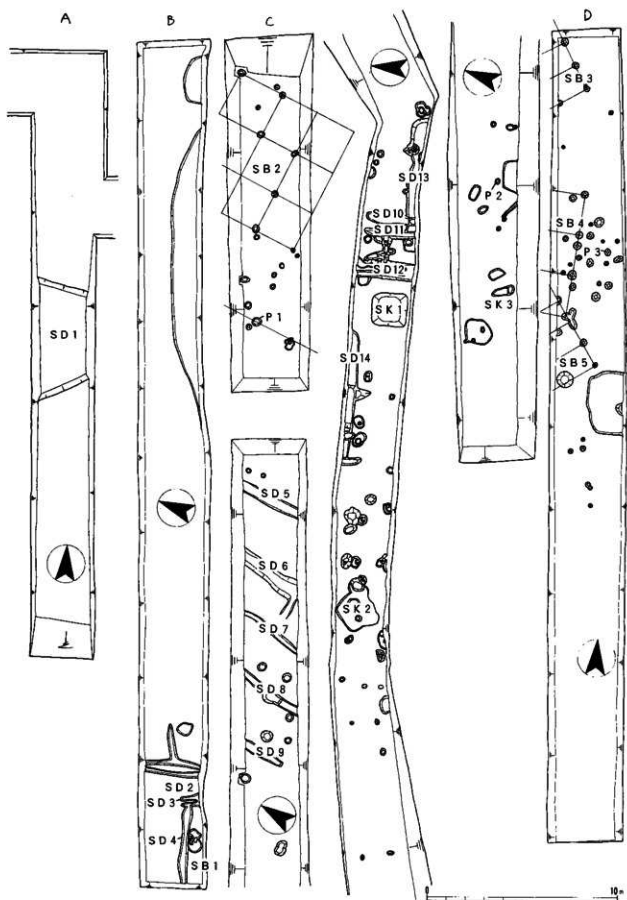
〔小倉C遺跡〕

土層の基本的な層序は、第1層・青灰白色（耕作土）、第2層・橙灰色（床土）、第3層・褐灰色（旧耕作土）、第4層・灰茶色（旧床土）、第5層・橙茶色（包含層）、第6層・淡橙茶色（地山）である。

耕作土の厚さは20～40cm、包含層は15～30cmである。

(1) 掘立柱建物（SB2）

調査区東端から検出された総柱の建物である。柱間は、南北2.1～2.4m東西2.1～2.4mで横方向はN2°W、柱穴の掘形は円形ないし楕円形で直径は15～30cm、深さ13～36cmである。また、SB2と平行して2つのピット（P1,P2）が並ぶことから、掘立柱建物の柱穴である可能性がある。なお、P1から瓦器が出土している。



第67図 遺構平面図 (1 : 200)

(II) 溝 (SD5~14)

SD5は、幅50cm、深さ26.5cmでSB2の棟方向と同じ向きに走る溝であるが、出土遺物は認められなかった。

SD6~SD12は幅30cm~60cm、深さ10~15cmであるが、すべて方向はN6°Wで一致している。

SD6~SD9は、溝の底が橙灰色砂質土であり、出土遺物はほとんど認められなかった。SD10~SD12は、土師器皿、瓦器皿、土錘、山茶碗等が出土している。SD13、SD14は、SD10~SD12に直行するもので幅50~60cmで、深さ10~15cmである。ともに土師器、瓦器輪皿、土錘が出土している。

(III) 土坑 (SK1・2)

SK1は、南北150×東西170cm、深さ45cmの方形を呈する。

埋土は4層に分かれ、上3層は遺物とともに炭化物をや焼土を含んでいるが壁面は焼けていない。底は平らに均されている。埋土中より多くの焼土や炭とともに瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、羽釜、土錘、釘、緑釉陶器が出土した。特に皿は完形の物が多い。

SK2は、直径80cmの円形をしており、深さ45cmである。この土坑から大甕が出土している。

[小倉D遺跡]

土層の基本的な層序は、第1層・灰白色(耕作土)、第2層・明黄色、第3層・灰色、第4層・明橙色(床土)、第5層・暗褐色(包含層)、第6層・明橙色(地山・遺構検出面)である。

耕作土の厚さは20cm、包含層は10cmである。

(I) 掘立柱建物 (SB3・4・5)

調査区の北端に検出された建物で、3棟とも規模は不明であるが、仮に南北棟と仮定するならばSB3は柱間、東西1.8m南北1.5m、棟方向N30°W、SB4は柱間、南北2.1m、棟方向N2°W、SB5は柱間、南北1.3m~1.4m、棟方向N30°Wである。いずれも柱穴の深さは15~20cmであるが、直径についてはSB3、SB5は30~40cmで、SB4は35~45cmである。SB3の柱穴内より瓦器・土師器が出土している。

(II) 土坑 (SK4)

調査区中央部より検出された南北3.2mの隅丸方形の堅穴状遺構である。深さは周辺部で7cm、中央部で15cmで、土師器片、青磁碗が出土している。

2 遺物

遺物は、古墳時代から平安時代にかけての須恵器、平安時代の緑釉陶器、黒色土器、平安末~鎌倉時代にかけての瓦器、時代は不明であるが、鉄器、ふいこの羽口等が出土し、整理箱約30箱程度である。特定の土坑、溝に多数の遺物が集中して出土していることが特徴的である。

[小倉A遺跡]

・円筒埴輪 (1~4)

いずれも南北方向のトレンチの溝の部分から出土している。

1は、突帯高13mm、突出先端幅11mmを測る。調整は内面ナデ、外面は突帯およびその上下1cmの幅をヨコナデしているが、ハケ調整は不明である。

2は、突帯高11mm、突帯先端幅6mmである。調整は内面ナデ、外面タテハケ(7本/cm)を施した後、ヨコハケ(7本/cm)で仕上げている。突帯およびその上はヨコナデしているが、下部の接合痕は未調整である。

3は、胎土は粗く、色調は暗褐色である。突帯高9mm、突帯先端幅11mm。調整は内面ナデ、突帯およびその付近をヨコナデしているが、ハケ調整は不明である。

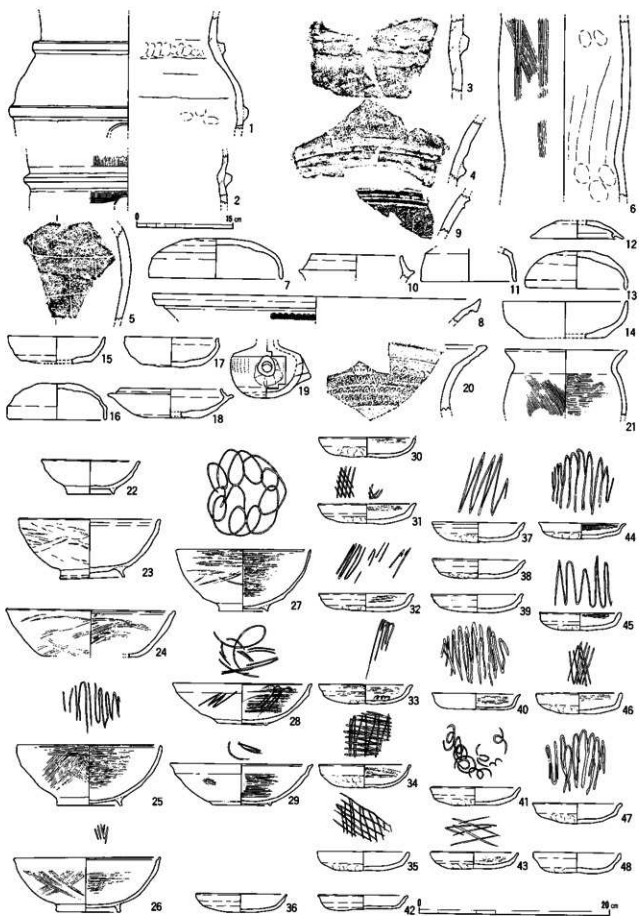
4は、朝顔型埴輪の口縁部で突帯高8mm、突帯先端幅6mmを測る。調整は内面ヨコハケ(9本/cm)、外面はタテハケ(5本/cm)を施した後、突帯およびその上下部分を強くヨコナデしている。

・形象埴輪 (5)

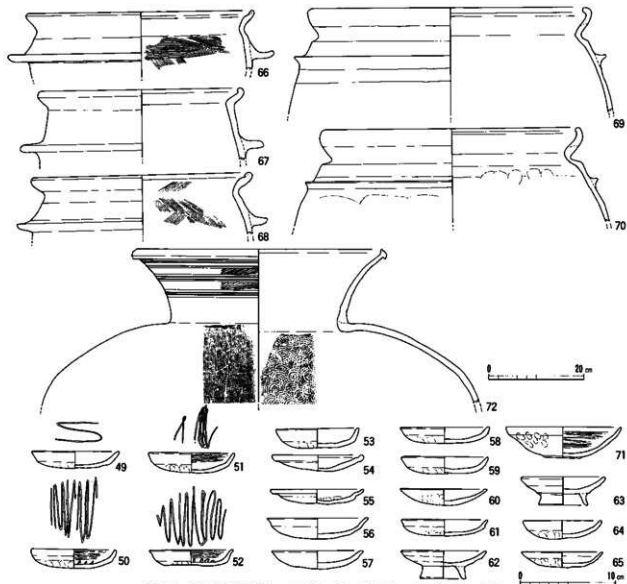
円筒埴輪と同じく溝の中から出土した。内外面にナデを施し、外面にはタテ、ヨコに沈線がある。残存僅かなため、詳細は不明である。

・その他の埴輪 (6)

同じく溝の中から出土した。焼成良、胎土は5mm程度の石英を含み、色調は灰白色である。小円筒状



第68図 遺物実測図 (1, 2は1 : 6, 72は1 : 8, 他は1 : 4)



第69図 遺物実測図 (1, 2は1:6, 72は1:8, 他は1:4)

№	実測番号	出土位置	器種	口径	器高	色調	胎土	焼成	ミガキの状態	粘土接合痕の有無	その他の特徴	№	実測番号	出土位置	器種	口径	器高	色調	胎土	焼成	ミガキの状態	粘土接合痕の有無	その他の特徴
30	7-2	SK4	瓦器皿	102	21	灰	良	良	シグザグ		ミガキ不明瞭	48	2-3	SK4	瓦器皿	90	22	灰	良	良	格子	あり	ミガキ不明瞭
31	2-4	SK4	瓦器皿	100	21	灰	良	良	格子	あり		49	2-5	SK4	瓦器皿	90	19	灰	不良	良	シグザグ	あり	
32	19-3	SD9	瓦器皿	99	19	黒灰	良	良	シグザグ	あり		50	3-1	SK4	瓦器皿	88	20	灰	良	良	シグザグ	あり	
33	2-6	SK4	瓦器皿	98	20	灰	良	良	シグザグ	あり		51	3-6	SK4	瓦器皿	88	21	灰	良	良	シグザグ	あり	
34	1-5	SK4	瓦器皿	96	24	灰	良	良	格子		口縁外灰	52	3-2	SK4	瓦器皿	86	17	灰	良	良	シグザグ	あり	
35	7-4	SK4	瓦器皿	96	20	灰	良	良	格子	あり		53	27-2	SD9	瓦器皿	86	20	灰	良	良	不明	あり	内面付着物
36	27-4	SD9	瓦器皿	96	20	灰	良	不良	シグザグ	あり	ミガキ不明瞭	54	1-3	SK4	土師器皿	96	20	黄褐色	良	良	なし	あり	ての字
37	10-5	D-16	瓦器皿	96	21	灰	良	良	シグザグ	あり		55	3-3	SK4	土師器皿	96	17	灰黄褐色	良	良	なし		ての字
38	4-1	SK4	瓦器皿	95	20	灰	良	良	あり	あり	ミガキ不明瞭	56	1-2	SK4	土師器皿	104	22	淡黄	良	良	なし		
39	10-4	D-16	瓦器皿	95	21	灰	良	良	あり	あり	不明瞭	57	10-3	D-16	土師器皿	94	20	黄	良	良	なし	あり	漆器付着丸底
40	7-1	SK4	瓦器皿	94	17	黄灰	不良	良	シグザグ	あり	口縁外灰	58	2-1	SK4	土師器皿	92	18	黄褐色	良	良	なし	あり	
41	19-2	SD9	瓦器皿	94	19	黒灰	良	良	縞線	あり		59	3-4	SK4	土師器皿	91	19	黄褐色	良	良	なし	あり	
42	11-3	C-18	瓦器皿	94	15	灰	良	良	あり		P I T 5	60	1-4	SK4	土師器皿	90	18	灰黄褐色	良	良	なし	あり	漆器付着丸底
43	27-1	SD9	瓦器皿	92	18	黒灰	良	良	格子	あり	内面付着物	61	27-3	SD9	土師器皿	90	18	淡黄	良	良	なし	あり	内面付着物
44	19-1	SD9	瓦器皿	92	17	黒灰	良	良	シグザグ		口縁外灰	62	1-1	SK4	土師器皿	88	29	淡黄	良	良	なし	あり	凸付
45	1-6	SK4	瓦器皿	91	20	灰白	良	良	シグザグ	あり		63	4-2	SK4	土師器皿	86	30	淡黄褐色	良	良	なし	あり	凸付
46	2-2	SK4	瓦器皿	91	22	灰	良	良	格子	あり		64	3-5	SK4	土師器皿	82	20	黒灰	不良	良	なし	あり	
47	14-1	D-16	瓦器皿	91	21	灰	良	良	シグザグ	あり	口縁外灰	65	7-3	SK4	土師器皿	85	17	黄褐色	良	良	なし		

第8表 瓦器皿、土師器皿観察表

で胴部が少しくびれる部分がある。外面調整はナナメハケを施した後、タテハケで仕上げであり、単位は5本/㎝。くびれより下はユビオサエで調整され、内面はユビナデによって調整されている。小円筒状で、突帯を残存部で認めない。

【小倉B遺跡】

量は多くないが、いずれも古墳時代の遺物と推定できる。

・須恵器坏蓋 (7)

包含層から出土した。口径13.8cmで天井部と口縁部の境は、浅い不明瞭な凹線によって、わずかに判明でき、口端部を丸くおさめている。

・須恵器壺 (8・9)

いずれも残存がわずかであるが、包含層から出土した。8については口径34cm (推定) であり、口縁部突帯の下に髷描き波状文が描かれている。SD2から出土した9は、口径や外反度は不明であるが、壺の頸部と思われる。髷描き波状文と突帯を組み合わせた文様が一見複雑である。

・須恵器杯 (10)

SD4からの出土で、残存はわずかであるが口径9.4cm (推定) 立ち上がり1.6cmで、受部先端を丸くおさめている。

【小倉C遺跡】

おおよその遺物出土状況は、東側から瓦器が、中央部から瓦器、緑釉陶器、須恵器が、西側から須恵器が出土している。

(I) 古墳時代～飛鳥時代の遺物

・須恵器坏蓋 (11)

包含層出土で、残存度は少ないが、口径10cm (推定) である。天井部と口縁部を分ける凹線が見られるが、口縁端部を丸くおさめている。

・須恵器坏蓋 (12・13・16)

12は包含層から出土で、残存度は少ないが、口径9.5cm (推定) で高さは不明。口縁部内面にかえりを持つが口縁端部以下には突出していない。ヘラケズリの有無は不明である。13、16は、ともに包含層から出土で、口径10.4cm器高3.9cm、天井部と口縁部付近にヘラケズリを施している。13は、天井部と口縁部とを分ける凹線、稜線は見当たらない。16は、稜線が見られる。

・須恵器杯身 (14・15・17・18)

14はSK4からの出土で、口径13cm (推定) 器高3.9cmで残存度は20%である。ヘラケズリは、施されていない。

15はP2からの出土で、口径10cm (推定) 器高2.8cmで残存度は20%である。体部と底部の境にヘラケズリを施してある。

17は包含層からの出土で、口径10cm前後、器高3.2～3.9cmである。口縁部をやや外反させている。いずれもヘラケズリは見られず、17は内面底部をクロク調整した後ナデを施している。

18は包含層からの出土で、口径10.6cm (推定) 器高3.1cmで立ち上がり内傾し非常に低い、底部付近にヘラケズリが見られる。

・須恵器 (19)

包含層からの出土で、胴回り75mm器高は不明である。注口部をはりつけてあり、最大12mm突出している。一部自然軸がかかっており、底部はヘラケズリによって調整され、丸みを帯びている。体部中央に髷状工具による刺突文を巡らせてある。

・須恵器壺 (20)

包含層からの出土で、口径、器高は不明である。口縁部は、外反しており二段にわたって髷描き波状文を巡らせてある。

・土師器壺 (21)

包含層からの出土で、口径126mm (推定) 器高は不明である。内面にヨコハケ (6本/㎝)、外面にナナメハケ (6～7/㎝) を施し、口頸部はナナメハケを施した後ヨコナデで仕上げている。

(II) 平安時代の遺物

・黒色土器A類椀 (22～24)

22は、SK11からの出土で、口径10cm、器高3.6cm、残存度70%である。口縁端部を強くヨコナデしている。外面の口縁部にも炭素が付着している。23は、包含層からの出土で、口径14.8cm、器高6.4cm、残存度60%である。胎土はやや粗い。口縁端部を強くヨコナデし、外面にヘラミガキを施しているが、粘土接合痕が残る。24は、包含層からの出土で、残存度20%、胎土はやや粗く、焼成はやや不良である。内面ミガキを施しており口縁端部より3mm下に幅2mmの沈線を持つ。

・瓦器椀 (25)

SK1からの出土で、口径15cm、器高6.4cm、残存度40%である。口縁内部の沈線はやや下がった所があり、ヘラミガキを密に施している。底部ヘラミガキはジグザグ状であり、内面底部を磨いてから内面を磨いている。

・瓦器椀 (26)

SD3から完形で出土し、口径15.4cm、器高5.9cmである。25に比べ、口縁内部の沈線がやや上に位置し口縁部外面にヨコナデを施す。ヘラミガキは磨減が著しいため不明瞭であるが、内外面ともやや粗で粘土接合痕が残る。内面底部のミガキはジグザグ状である。

・瓦器椀 (27)

SD3から完形で出土し、口径14cm、器高6.5cmである。沈線は口縁端部に施されている。口縁部外面にヨコナデを施し、やや内湾気味になる。底部内面は連続輪状文が一周し、内面を磨いてから、底部を磨いている。外面ミガキは粗く、体部には粘土接合痕が残る。26に比べると器壁が薄く口縁の折り曲げが開いている。

・瓦器皿 (30～53) 8表参照

SK1およびその周辺のSD10～14から出土した瓦器皿は、口径が8.8～10.2cmで比較的大きくて器壁の厚い器種 (30～51) と口径86mmで比較的小さくて器壁の薄い器種 (52、53) に分かれる。前者は11世紀後半～11世紀末、後者は11世紀末のものと考えられる。

・土師器皿 (54～65) 8表参照

SK1およびその周辺のSD10～14から出土した土師器は、ての字口縁を持つ器種 (54、55)、口径が8.8～10.4cmで比較的大きく器壁の厚いもの (56～61)、1.3～1.4cmの高台を持つもの (62、63)、口径が8.2～8.5cmで比較的小さく器壁の薄いもの (64、65) に分かれる。口径の小さい器種は11世紀末～12世紀初頭、その他は11世紀後半～11世紀末のものと考えられる⁵⁵⁾。

・土師器羽釜 (66～68)

SK1からの出土で、直径21.6～23.2cm、器高不明、体部の最大径を測る位置にツバが付けられている。

・緑釉陶器

椀、壺の小片ばかりで、調査区中央部に集中して出土している。いずれも、淡橙白色の軟質の胎土で釉は濃緑色で薄くかかる。遺物中、注目されるものに壺の頸部がある。2次焼成を受けており、釉の剥落が著しい。

・須恵器壺 (72)

SK 2から出土した。口径51.4cm、器高は不明である。口頸部に3段の線刻を施し、その間をヘラで斜めに施文している。口縁部は、内外に突帯をもつ。内外にタタキ目をもち、内側は同心円文である。

(Ⅲ) 鎌倉時代の遺物

・瓦器椀 (28・29)

SD5付近包含層からの出土で、それぞれ口径14.8cm、15.4cm、器高4.4cm、5.95cmである。どちらも外面に殆どヘラミガキが見られず、内面ミガキも大変粗である。高台は著しく低いが、28の方がややしっかりしている。口縁部はどちらもヨコナデを施すが、29の方が内湾している。

・土師器羽釜 (69・70)

SD5付近包含層からの出土で、直径27.4～29.8cm、器高不明で、体部の最大径を測る位置よりも上に小さいツバが付けられている。

[小倉D遺跡]

遺構にくらべ調査区内での遺物は、大変少なく、実測に耐えうるものは次の一点のみである。

・瓦器椀 (71)

P3からの出土で、口径12.8cm、器高2.7cmである。口縁部には強いヨコナデが見られる。底部には断面が三角形の著しく低い高台が付く。内面のヘラミガキは大変粗雑である。外面は磨かれていない。小倉C遺跡の28、29よりも新しい時代の遺物と考えられる⁵⁶⁾。

結 語

・小倉A遺跡について

調査区内の主な遺構は溝のみであるが、多くの埴輪片が出土している。調査区を含む宮山と河合川に挟まれた低地は、旧河道と考えられる場所である。

河合川の流れがいつ変わったのかについては今後の検討を要するが、埴輪が出土した溝の埋土上面に、炭化した植物遺体の層が見られたことや、埋土が青灰色粘質土であったこと等から、古墳時代からあまり履れない時期に溝が存在したと思われる。

今回の調査で出土した埴輪は、御旅所古墳の築造年代との間に若干の時期差が見られる。しかしながら、調査面積も狭く出土した埴輪の数が少ないためすぐさま御旅所古墳との関連を決定するのは難しい。

・小倉B遺跡について

この地区も調査区西端が旧河道に接していると考えられる。居住地区とするには、極めて不適当であったと考えられる。今後、住居址と旧河道との関連を考えていかなければならないだろう。

・小倉C遺跡について

調査区西端は、遺構が全く認められず、砂礫層より水が湧き出てきたことから、小倉A遺跡より続く旧河道に接していると考えられる。

大量の瓦器と土師器が出土したSK4は、埋土の状況や遺物の量から廃棄土坑と考えられるため、周辺に何らかの居住施設があったものと思われる。しかし、土坑の形状や埋土の最下層から遺物が出土しなかったこと等から、本来は別の目的を持った土坑であったと思われる。

一つの土坑から2種類の瓦器、4種類の土師器が出土したということは、今後伊賀の中世土器を見ていく上で重要な一括資料と言えよう。

また、瓦器の31-33、35-38、41、43、45-53、土師器の54、57-64には外面底部に同じような粘土接合痕が見られる。これは板状の粘土の端を接合せ時計回りにナゲ調整をする手法によってできたものである。当時、この技法が瓦器及び土師器の皿を作る一般的な方法であったことが考えられる。

東端から検出された掘立柱建物も、同時期の遺物

が出土していることから、小倉D遺跡に続くものと考えられる。

・小倉D遺跡について

前述のように小倉C遺跡東端から続く鎌倉時代の遺構の一部と考えられる。調査区南端では遺構が検出されず、当時の居住地区は北に伸びていたものと推測される。

今回の調査では、多数の遺物が出土したにもかかわらず調査面積が限られていたため、充分な考察に到らなかった。残された課題については、今後の資料の増加を待ちたい。(川戸達也、東山剛幸)

〔註〕

- ①『東山古墳現地説明会資料』三重県教育委員会 1986
- ②『三歳の古墳』三重県埋蔵文化財センター 1990
- ③『外山、だんな山古墳群分布調査』三重大学原始古代史部会
- ④『御旅所古墳の検討』山本雅晴 1985
- ⑤『奥平大4号墳、湖六谷1号墳』阿山町教育委員会 1989
- ⑥『故きとの多み』阿山町教育委員会 1980
- ⑦『宮の森遺跡発掘調査概要』上野市教育委員会 1979
- ⑧『青春遺跡群発掘調査報告書』上野市教育委員会 1982
- ⑨『時西外遺跡現地説明会資料』三重県埋蔵文化財センター 1990
- ⑩『天沼遺跡現地説明会資料』三重県教育委員会 1988
- ⑪『伊賀町府定発掘地説明会資料』三重県埋蔵文化財センター 1991
- ⑫『的場遺跡発掘調査報告書』伊賀町教育委員会 1978
- ⑬高橋市埋蔵文化財センター橋本久和氏の御教示による。
- ⑭三重県三重県埋蔵文化財センター 山田猛氏の御教示による。
- ⑮『伊賀の瓦器に関する若干の考察』中近世土器の基礎研究Ⅱ 1986 山田猛
- ⑯立命館大学講稿 青木信哉氏の御教示による。
- ⑰『円筒埴輪の輪』考古学雑誌 64-2 川西宏幸
- ⑱『故きとの多み』阿山町教育委員会 1980
- ⑲高橋市埋蔵文化財センター 橋本久和氏の御教示による。



小倉A遺跡 (北から)



小倉B遺跡 (西から)



小倉C遺跡 (東から)



小倉C遺跡2 (西から)



小倉C遺跡3 (東から)



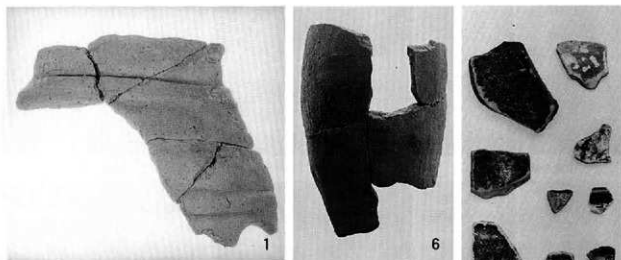
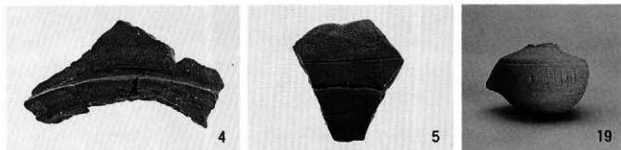
小倉C遺跡4 (西から)



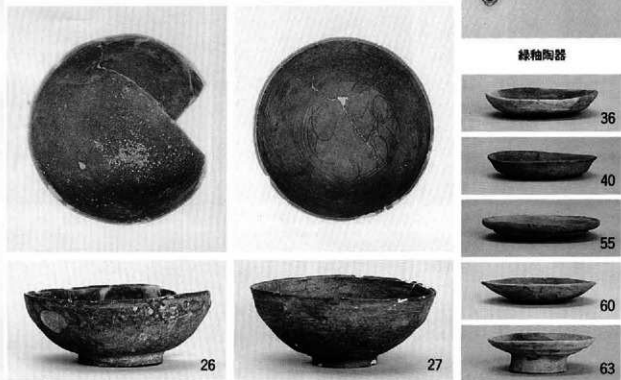
小倉D遺跡 (北から)



SK1 (東から)



古墳時代の遺物 (1:3)



緑釉陶器

SK 1 出土遺物 (1:3)

XII 上野市 服部町 ^{かんだ} 間田遺跡

1. 位置と歴史的環境

第三紀層及び第四紀層からなる四周の山地に囲まれた伊賀盆地は、第四紀中期（50万年～30万年前）に古琵琶湖から陸化してのち、源流を鈴鹿および布引山系にもとめる大小河川が西流し、盆中盆地を形成している。

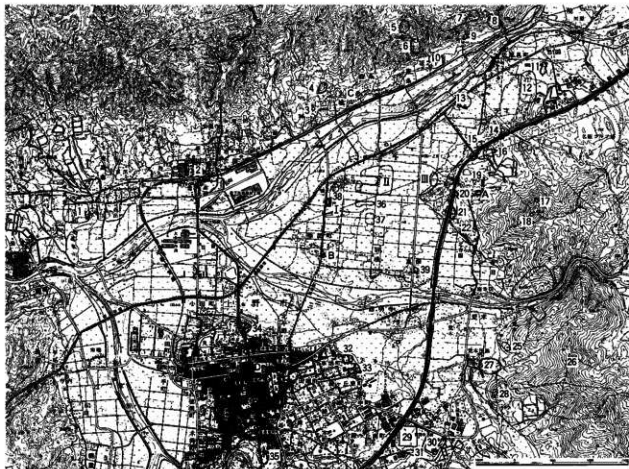
上野市北東部にあたる府中盆地は、北の柘植川、南の服部川によって形成された平地部である。本遺跡（I）はその中央部の印代・服部両集落の間、やや低くなった部分に位置する。標高約140mを測る。

現状は水田であり、行政上は上野市服部町字間田に属している。試掘調査によって、弥生時代および

鎌倉・室町時代の遺物が確認されている。

当遺跡の周辺には、縄文時代の深鉢が出土した新寺A遺跡（36）があるが、縄文時代の遺跡はまだまだ明確にされてはいない。

弥生時代の遺跡では、上述の新寺A遺跡や新寺B遺跡（37）、長良遺跡（38）、印代東方遺跡群（II）が周辺に存在するのをはじめ、柘植川左岸南宮山山麓の千歳出土の銅鐸（京都大学保管）（15）が著名である。現上野市街の台地上にも車坂遺跡（33）、柿ノ木遺跡（32）が、そして服部川、柘植川の合流点北方にも三田遺跡（2）、官舎遺跡（1）が存在する。



第70図 遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院上野島ヶ原1：25,000から）

また、当地周辺には古墳も数多く分布している。柘植川左岸の千歳の丘陵には、三重県最大の規模をもつ全長188mの前方後円墳御墓山古墳(11)がある。右岸の外山には、半壊しているものの長さ4.4m、幅3mの巨大な天井石をもち、伊賀最大の玄室幅をもつ勅定塚古墳(9)があり、外山丘陵中に御墓山古墳と系譜的築造関係を想定させる外山古墳群(7)、鷲棚古墳群(8)をはじめ、奥ヶ谷古墳群(5)、鷹杖古墳群(6)、新堂山古墳群(4)も存在している。また、三角縁唐草文帯三神二獣鏡・変形神獸鏡(十三花)出土の山神寄建神社址古墳も知られている⁴²⁾。

東の南宮山山麓にも、前述の御墓山古墳をはじめ六鈴四神鏡の出土が知られる浅間山古墳(14)、変形六神鏡・振文鏡・金環の出土した丹那山古墳(16)、変形方格規矩鏡出土の野添古墳が北方の千歳に、埴輪片の出土している北谷古墳群(19)、変形神獸鏡・四禽鏡出土の二ノ谷古墳群(21)のほか、大岩古墳(22)、城山古墳(20)が西方の一の宮に、21基の存在が確認されている前塚古墳群(23)や桐ノ木古墳群(24)が南方の寺田に、鉄器・玉類が出土した尾ノ谷古墳(18)、宮ノ谷古墳(17)が山頂付近に存在している。

服部川左岸に目を転じると、大山田村境の洪積丘陵の稜線に伊賀最古とされる全長88mの前方後円墳荒木草塚古墳(26)をはじめ、その西の荒木に寺

山古墳群(25)、広岡古墳群(27)、ダラ古墳群(28)があり、現市街の台地上に四禽鏡出土の伊子の九古墳(34)などが知られるほか、数多くの古墳が存在していたと考えられる。

このように、当地周辺に多数の古墳が存在しているにもかかわらず、柘植川・服部川および南宮山に三方を囲まれた当遺跡の位置する平地部には、古墳時代の土師器・須恵器が散布する遺跡は見出されていない。(本年度、立合調査を行った印代東方遺跡群において須恵器片等が出土しているが、遺構は検出されていない。また、同じく本年度立合調査を行った出崎遺跡(Ⅲ)においては若干の遺構がみられたが、すべて時期は中世にあたるようである。)

しかし、柘植川右岸の河岸段丘上には外山より三田・高倉にかけて遺物散布地が知られている。(坂ノ下・外山では平成元年度から調査されている伊賀国府推定地(10)において古墳時代の遺物、遺構が多数確認されている⁴³⁾)。その他、左岸の佐那具には喜春遺跡(12)、千歳には宮の森遺跡(13)が、服部川左岸の西明寺には西明寺遺跡(31)が存在する。また、現市街地の南方の木津川左岸には1977～1979年、県教育委員会が発掘し、水田跡と多量の本製品の出土した北堀池遺跡⁴⁴⁾がある。

当地域は旧阿拝郡にあたり、大彦命を祭神とする伊賀一の宮取国神社(A)と二の宮小宮神社(B)、三の宮波多伎神社(C)とが、三角形を形成するよ



第71図 遺跡地形図 (1:5,000)

うにそれぞれ一の宮・服部・西桑に鎮座している。

また、桑里の遺構が伊賀最大の「万町の沖」として残り、南の寺田村から一の宮を経て千歳村へ通じる道は奈良朝以前の古道であり、壬申の乱においても大海人軍が通ったとされる。

寺院では南方に伊賀国分寺(29)と国分尼寺に推定されている長楽山廃寺(30)が存在しており、その真北を桑里遺構をたどり服部川、柘植川を渡河した坂ノ下字国町が伊賀国府跡推定地として注目されている。

そして柘植川と服部川の合流点北側には飛鳥時代からの瓦が出土する三田廃寺(2)が存在する。そ

の西の東高倉には新家駅に推定される官舎遺跡が、そして、現市街地丘陵上の桑町には「和同開珎」の出土で知られる城の廢遺跡(35)がある。

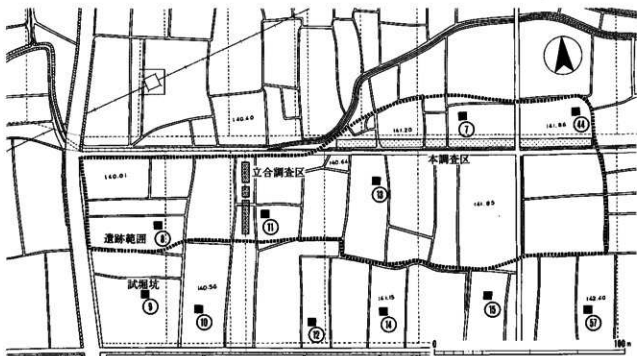
中世においては、この府中盆地にも数多くの館・城跡が知られているが、高島服部氏館跡(39)をはじめとして本遺跡周辺にも存在する。また、本遺跡西の現国道25号線は中近世の加太越奈良街道に沿うものであり、江戸時代には津藩の官道として整備されている。

以上のような歴史的環境からみて当地域が古代から重要な地域であったことが窺える。

註

- (1) 山本雅晴「弥生時代遺物の一資料(1)」『伊賀盆地研究会報10』に磨製石包丁の表装が紹介されている。
- (2) 東京国立博物館「東京国立博物館図版目録」古墳遺物編(近畿I)1988.3
三重県埋蔵文化財センター「三重の古墳」1990.2
- (3) 三重県教育委員会「三重考古圖録」1954.3三重県埋蔵文化財センター「三重の古墳」
- (4) 三重県埋蔵文化財センター「三重の古墳」1990.2
- (5) 註2文献
- (6) 上野市教育委員会「伊予の九古墳発掘調査報告」1962.3
- (7) 註6文献によると、上野市立純育中学校付近にかつて古墳群が存在していたようである。また、上野市東町の菅原神社(D)には伝伊賀国出土の象形文鏡等多数の鏡が所蔵されている。(註4文献)

- (8) 三重県教育委員会「平成元年度伊賀国府遺跡地」現地説明会資料
- (9) 上野市教育委員会・上野市遺跡調査会「喜春遺跡群発掘調査報告」遺構編1982.9
- (10) 上野市教育委員会・上野市遺跡調査会「宮ノ森遺跡発掘調査概要」1979.5
- (11) 上野市教育委員会「西明寺遺跡発掘調査報告」1963.3
- (12) 三重県教育委員会「北瀬池遺跡発掘調査報告」第1分冊1981.3
- (13) 福永正三「蘇我の国」1972.6
- (14) 三重県教育委員会「大和街道・伊勢別街道・伊賀街道」1983.3
*上野市教育委員会・上野市遺跡調査会「上野市遺跡図説」1978年版1979.3



第72図 発掘区位置図(1:2,000)

2. 調査結果

1. 本調査

当遺跡の土層の基本的層序は、上から第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；黄灰色粘質土（床土）、第Ⅲ層；淡青灰色土及び茶褐色土、第Ⅳ層；鉄分を含む黄灰色砂土（地山）である。この第Ⅲ層が包含層である。

発掘区は農道をはさみ東を東区、西を西区と設定した。東区は東西約34m、南北約4m、西区は東西約78m、南北約4mである。表土上面から地山までの深さは、東区では60cm～70cm、西区では60cm～120cmであった。

発掘区のはほぼ中央を東西に用水路（U字溝、幅60cm）が走っていたため、表土除去作業の際に撤去した。その結果、敷設されているU字溝の底面が遺構検出面と思われる部分より下にあり、すでに周辺の土層は地山の部分まで攪乱され、遺構検出面も削平されていたことが判明した。

以上の状況から発掘区内では明確な遺構は検出できなかった。

次に、包含層の下層部から出土した僅かな遺物について紹介しておく。

(1) 鉢（西区、包含層）

底部のみ残存し、推定底部径11.4cmである。体部下半の器壁は厚く、それに比して底部器壁は薄い。内面はナデ調整され、よく使用されていたようで手

触りがなめらかである。体部外面は粗い回転ナデ調整がなされている。高台は残っていないがわずかに貼りつけの痕跡が残存する。高台欠損後も使用されていたようで底部縁辺部は磨耗している。底部は不明瞭であるが糸切りのようである。色調は灰白色を呈し、胎土は良質（5mm以下の砂粒を含む）、焼成は堅緻である。

(2) 土師器樽（西区、包含層）

推定口径25.6cm。口縁部は内外とも、ヨコナデされている。内面が一部剥離している。胎土は1mm以下の砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。

2. 立会調査

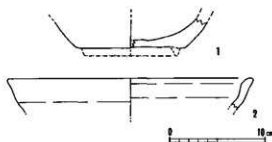
岡田遺跡は上野市服部町にあり、15,000㎡にわたって遺跡が散布している。県営排水特別対策事業に先立って行われた本調査にひきつづき、排水路部分に調査区を設定し立会調査を行った。調査面積は105㎡、調査日は平成2年10月3日である。

結果、耕作土60cm程で青灰色粘土の地山に至る。遺構は認められなかったが、遺物は明黄褐粘土（赤褐色粒混入）の遺物包含量より弥生土師器片、土師器片、須恵器片、瓦器片が出土している。これらのことから事業予定地は本遺跡の周辺部かまたは散布遺物は流入によるものと考えられる。

3. まとめ

いくらかの成果を期待した今回の調査であったが発掘区は狭く、遺構も検出できず、遺物も少なかった。しかし、分布調査・試掘調査において弥生土師器片・須恵器片・瓦器片・土師器片等の出土がみられている。また、周辺に位置と歴史的環境の項でも若干触れておいたが、多数の遺跡も存在するので、当遺跡周辺の水田下には遺構やさらに多量の遺物が埋蔵されている可能性も十分予想されることではある。特に、当地域周辺の丘陵に多数の古墳（御基山古墳をはじめとする首長墓も含む）が存在していることは、当然大規模な集落跡があり、また、それを

生み出す生産基盤が存在したことを容易に想定ささよう。（小川専哉・宮崎寛光）



第73図 西区出土遺物実測図（1：4）



間田遺跡全景



調査前全景（北から）



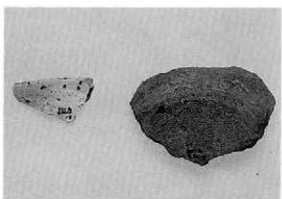
西区調査後全景（東から）



東区調査後全景（西から）



立会調査後全景（南から）



本調査西区出土遺物（1：3）

XIII 阿山郡伊賀町

あぜがいと 畔垣内遺跡 (A地点)

1. 位置と環境

畔垣内遺跡(1)は、伊賀盆地北東部に所在する阿山郡伊賀町の西部に位置し、柘植川右岸の河岸段丘上に立地している。標高は約174mである。

柘植川は、鈴鹿山脈のツツ家小平山(標高649.5m)に源を発し、南西に流れ、木津川に合流する。畔垣内遺跡の付近には縄文・弥生時代の遺跡は確実には知られておらず、当地の歴史がたどれるのは古墳時代からである。畔垣内遺跡の周辺にも4世紀前半に築かれた三重県下最古の古墳であるとされる東山古墳(2)をはじめ、新堂古墳(8)・筒御前古墳(9)・権現山古墳(4)・天長山古墳群(6)・内田古墳群(7)などの古墳が見られ、天道遺跡(3)が、昭和63年の発掘調査で6世紀前半の集落跡であることが明らかになっている。

当地には、9世紀後半に鈴鹿峠越の東海道(阿須波道)が開通するまで、加太越の旧東海道が通って

おり、畿内と東国とを結ぶ交通の要衝として栄えたものと思われる。

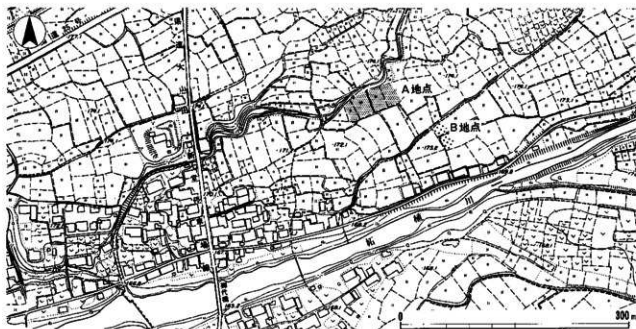
奈良時代から平安時代にかけての遺跡としては、斎宮芝遺跡(10)・的場遺跡(5)などが知られ、的場遺跡は調査が行なわれている。また、霊山経塚をはじめとする霊山山頂遺跡(11)は鎌倉時代以降の仏教関係の遺跡として著名である。

畔垣内遺跡は昭和63年度の第1次・第2次範囲確認調査の結果、A地点(3,000㎡)と約60m南西のB地点(10,000㎡)がそれぞれ6世紀前半と奈良時代以降の集落跡であることが推測されており、このうちB地点からは、奈良時代の溝1条と時期不明の掘立柱建物1棟が450㎡の調査で検出されている。

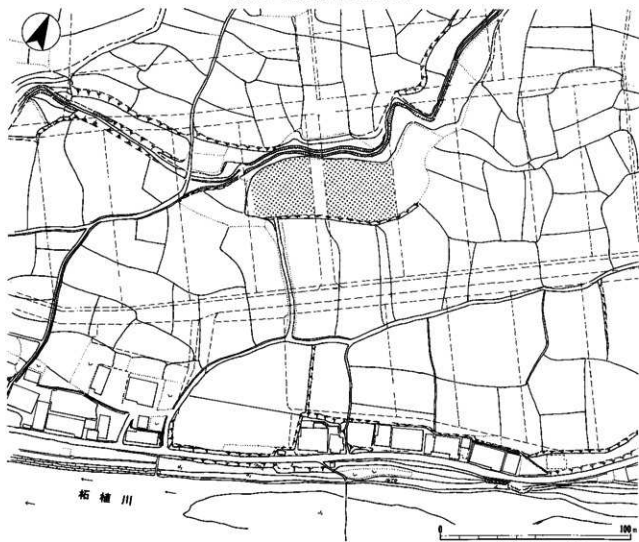
今年度の発掘調査開始時には、A地点調査区の北・東・西側は既に圍場整備が行われており、南側のみが未整備であった。調査区は北・西・南より1.0~



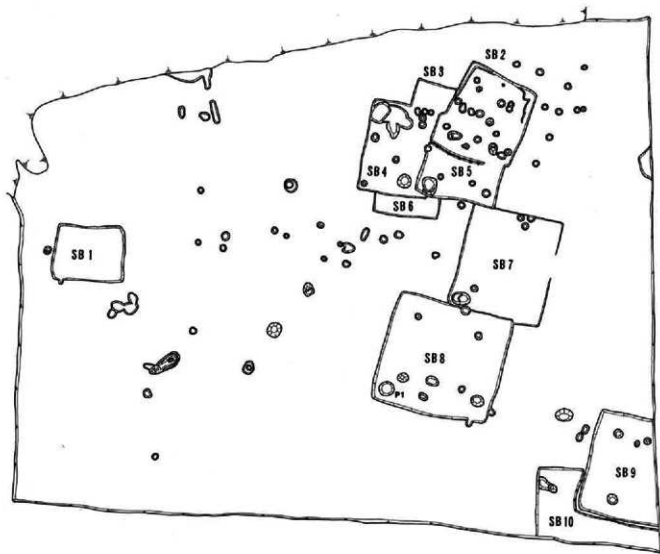
第74図 遺跡位置図(1:50,000) 国土地理院 1:25,000 地形図 上野・平松



第75图 遺跡地形图 (1 : 5,000)



第76图 発掘区平面图 (1 : 2,000)



第77図 遺跡平面図 (1 : 200)

1.5m程高い島状を呈していたが、圃場整備以前も、同様の状況であつたらしい。つまり、河岸段丘の最上位面に立地していると考えて差し支えなからう。

また、調査区の現況は雑草の繁茂する荒地であつたが、近年までは水田であつたといひ、調査区上面はほぼ水平面であると考えられた。

2. 層位と遺構

層位

大きく3層に区分できる。上から①茶褐色土（耕作土）②黄褐色粘質土（床土）③茶褐色粘質土（調査区内北半と南端）・茶褐色礫混入土（調査区内中央と南側）である。遺物包含層は認められず、遺構は③の上面で検出された。検出面までは約20～60cmと浅いものの、特に茶褐色礫混入土上での遺構検出は、かなりの困難を伴った。また、残存する遺構の深さから想定して、水田化の際の整地によって遺構は相当の削平を受けているものと考えられる。

遺構

大きく2時期に区分できる。①古墳時代後期、②鎌倉時代前半である。①には竪穴住居19棟、②には竪穴住居1棟・掘立柱建物2棟がある。

古墳時代の遺構

SB 1

西地区西端で検出された東西に長い長方形を呈する小型の竪穴住居である。検出面からの深さは約3cmほどで、住居内にも遺構は検出されなかった。

SB 2～6（第78図）

当初は4棟が重複しているものと考えたが、埋土を掘り下げた結果、5棟の重複であることが判明した。そして土層断面の観察の結果、第9表の切り合い関係が明らかになった。

SB 2は南北に長い長方形を呈する。5棟の中で最も残存状態が良く、北壁際にかまどの痕跡が確認できたほか、支柱穴も各隔から約1.5m内側で検出された。また、北西・北東隅付近には周溝がみられた。埋土は黒褐色土ブロックの混じる暗褐色砂質土で、青灰色砂質土の混じるSB 5を切る事が認められた。

SB 3はSB 2・4にはさまれて検出され、全形は明らかにできなかったが、暗褐色砂質土（黒褐色土ブロック混）を埋土とするSB 3が、黄褐色砂質土（茶褐色土ブロック混）を埋土とするSB 4を切

ることを確認した。

SB 4はSB 2とはほぼ同規模の南北に長い長方形を呈する。北西隅には長径120cm、短径80cm、深さ45cmの楕円形のピットが検出されたが、中からは遺物が全く出土していない。竪穴住居に伴う貯蔵穴であろうか。

SB 5は、外形の検出時には、SB 3北西隅を北西隅とする大型の住居であると思われたが、SB 4床面で西辺が検出されたため、SB 3とSB 5は異なる住居であることが明らかになった。また、SB 5は茶褐色砂質土（青灰色砂質土ブロック混）を埋土とするSB 7を切っている。南西隅には長径90cm、短径70cm、深さ50cmの円形のピットが検出されたが、SB 4のものと同様に、遺物はほとんど出土していない。

SB 7（第78図）

南北に長い長方形を呈する。かなりの削平を受けているものと思われ、残存している深さは深い箇所でも数cmほどで、東辺と西辺の中央部付近では検出さえ不可能であった。また、南西隅には長径50cm、短径30cm、深さ35cmほどのピットが確認された。

SB 8（第78図）

6.0×6.3mと今回の調査で検出された最大の竪穴住居である。各隔から1.5～2.0m内側に支柱穴が検出され（柱間3.3m）、深さも20cmと比較的残存状況が良好であった。支柱穴は直径15～20cm、深さ30cmでいずれも拳大の石を多量に含む茶褐色砂質土の地山を掘り込んでいた。南西隅には直径40cm、深さ30cmのピットが検出された。また、SB 8の暗褐色砂質土の埋土をSB 7が切り込んでいた。

SB 9

東半部が調査区外につづく。検出面から床面までの深さは25～30cmと当遺跡においては良好な残存状態であった。埋土は茶褐色砂質土であった。床面では北西隅から中心に向かって1.5m内側と南西隅か

ら2.0m内側のやや南寄りには、それぞれ直径40cm・深さ40cm、直径50cm・深さ35cmのピットが検出された。あるいは、主柱穴であろうか。また、床面直上からは須恵器(杯身・杯蓋・甕)・土師器(杯・壺・甕・甗)が完形に近いものも含めて出土している。なお、SB9はSB10を掘り込んで造られていた。SB11

大部分が削平を受けており、東辺付近が検出されたのみであった。しかも、竪穴住居の検出部分の深さは5cmほどで、詳細は不明である。しかし、南西隅に相当すると思われる部分からは、直径70cm・深さ40cm弱の底の平らなピット(P1)が検出され、完形の高杯(15)・甗(37)と土師器甕の破片が出土した(第81図左)。

SB12・13

東地区西端で検出され西半部が調査区外につづく。ともに、出土遺物は少ない。SB13がSB12を掘り込んでいる。

SB16・17(第80図)

2棟が方向を揃えて南北に連なっている。SB17がSB16を切る。

SB16は大部分が削られており、南東隅を中心とする一部が残存しているのみであった。南東隅では長径85cm・短径70cm・深さ50cmのピットが検出され、底部で完形の甕(34)が、肩部では土師器甕の破片が出土した。また、竪穴住居の東壁際では幅20cm・深さ12cmの周溝が確認された。

SB17は、埋土から多量の炭化物・焼土が出土しており、いわゆる焼失住居であると考えられる。北壁にはカマドの痕跡がみられ、その中央部には支柱石も残存していた。四隅から1.5m内側の対角線上には直径30~40cmの支柱穴がみられ、柱間は2.0mである。

炭化物は竪穴の北西と南東に特に集中しており、中には建築部材と思われる木材、繊維状の炭化物もあったが、建築構造等を復元するには至らなかった。

土層観察から埋土は大きく3層に分かれ、炭化物を含むのは厚さ5~10cmを測る最上層の茶褐色粘質土・茶褐色砂質土層中である。その下層の黄褐色・黄茶褐色砂質土層中には含まれていなかった。従って、最終的には、検出面から10~25cm掘り下げて地

山(青灰色粗砂)に至ったのであるが、実際の床面は黄褐色・黄茶褐色砂質土層上面であると思われる。

また、下部20cm程の残存であるが、カマドは約15cm地山を掘り込み、黄褐色砂質土によって全体を構築し、その外側に青灰色粘質土を厚さ1~2cmで塗り込んでいることが確認された。

遺物では主に東半部の中央よりやや北寄りや南西隅から出土した。特に前者はほぼ住居廃絶時の現位置を保っているものと思われ、蓋をした状態の須恵器杯(5・11)・伏せた状態の須恵器杯蓋(3)・正立した杯身(13)が1m弱の範囲から出土している(第82図)。そして、(11)と(3)の内部には、乾燥した内容物が残存しており、特に(11)のそれは住居の廃絶以来蓋によって密閉されていたと考えられる。両者は現在、脂肪酸分析を実施中である。

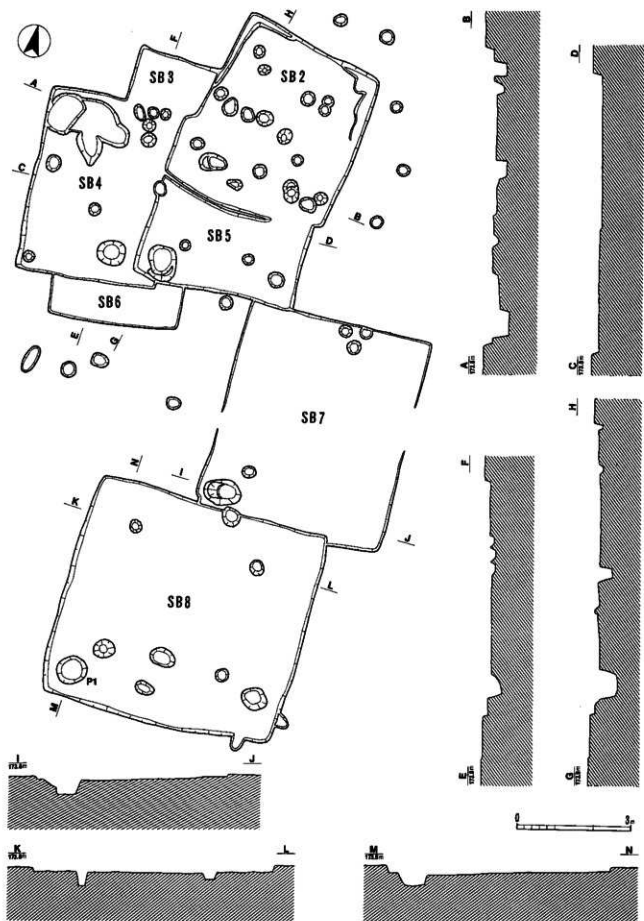
また、南西隅からは須恵器杯身・高杯・はそう、土師器杯・壺等が出土しているが、直下の直径50cm、深さ40cmのピット(P1)の中央部に向かって落ち込むような状態で検出された(第81図右)。それに隣接して20×20×10cmの直方体に近い青灰色粘土塊が出土している。なお、P1の埋土中からは土師器の小片が出土したのみであった。

SB18・19・20(第80図)

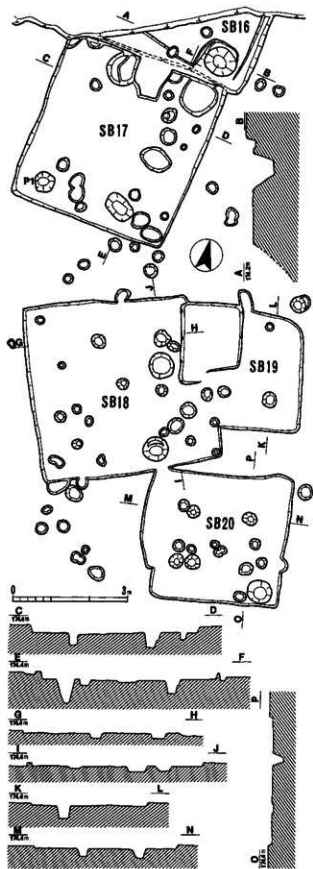
SB18は東壁の一部が擾乱を受けているものの、外形は確認できた。しかし、深さはわずか5cmを残す

SB	大きさ(m)	方向	カマド	貯蔵穴	備考
1	3.0×3.9	N10°W	-		
2	4.9×4.0	N7°E	北	南西隅(?)	SB5を切る
3	-×-	N1°E	-	南西隅(?)	SB4を切る
4	4.9×3.7	N3°W	-	北西隅	SB3に切られる
5	-×4.3	N4°E	-	南西隅	SB7を切る SB2に切られる
6	-×3.5	N7°W	-		
7	5.7×4.8	N50°	北	南西隅	SB8を切る
8	6.0×6.3	N2°E	-	南西隅	SB7に切られる
9	5.6×-	N50°	-		SB10を切る
10	-×-	N11°W	-		SB9に切られる
11	(5.7)×-	N2°W	-	南西隅	
12	-×-	N7°W	-	南東隅(?)	SB13に切られる
13	-×-	N3°W	-		SB12を切る
14	5.6×-	N10°W	-		
15	3.7×3.9	N3°W	-		
16	-×-	N8°E	-	南東隅	
17	4.6×4.4	N8°E	北	南東隅・南辺東寄り	
18	4.7×4.8	N21°W	北	南辺東寄り(?)	SB20を切る
19	(3.0)×-	N10°W	-		
20	3.5×3.8	N6°W	南	南東隅	SB18に切られる

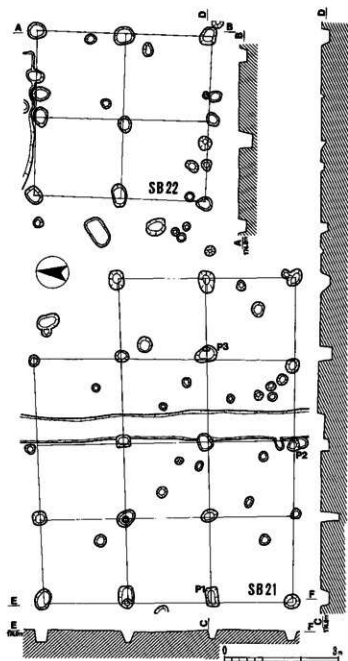
第9表 竪穴住居一覧表



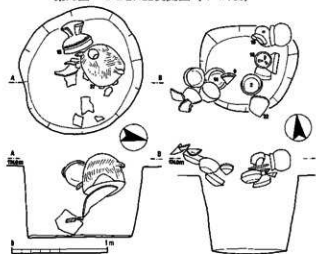
第78図 SB2~8実測図(1:100)



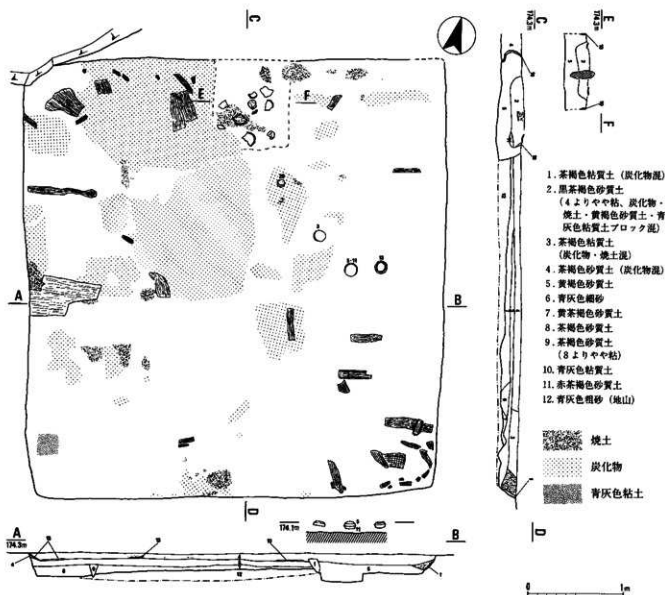
第80图 SB16~20实测图(1:100)



第79图 SB21.22实测图(1:100)



第81图 SB11-P1(左)·SB17-P1(右)
遺物出土状況实测图



第82図 S B17検出状況実測図・土層図 (1:40)

のみであり、遺物もほとんど出土していない。S B 20を切っていることはかろうじて確認できた。

S B18に比べて19・20は規模が小さく、形態もやや不整形である。

S B19は20と同様に攪乱を受けており、深さも7 cm程度と浅い。

S B20は西壁に張出部分があるが、これが別の遺構であるのかどうかは確認できなかった。S B20の深さも7 cm程度であり、遺物の出土も極めて少なかった。なお、中央部には柱間1.5mの4本の主柱穴が、南東隅からは直径60cm、深さ60cmの円形のピットが検出された。

鎌倉時代の遺構

S B21・22 (第79図)

S B21は4間×4間の総柱建物の東側に2間×1間分の張り出し (庇か) が付くもの、S B22は2間×2間の総柱建物である。やや長い南北方向を棟方向とするならば、共にN5° Wの方向で2棟が東西に並ぶことになる。S B21の柱間は1.9~2.3m、柱掘方の深さは50cm~102cm、S B22の柱間は2.0~2.3m、柱掘方の深さは58cm~84cmの共に不平等である。なお、S B21の張り出し部分とした箇所についてはS B21と22とを仕切る構列あるいは塀である可能性もあろう。S B21の柱掘方から瓦器碗・皿が出土している。

3. 遺物

古墳時代の遺物 (第83図)

須恵器

杯身 (7~14)

立上がりは内傾し、端面も内傾するとともに浅くくぼむ。受け部はやや上方へ伸びる。底部は丸みを帯び、反時計回りの回転ヘラケズリを施す。(12)は他よりやや径が大きく、底部は扁平である。(13)・(14)の底部にはそれぞれ×・○のヘラ記号が施される。

杯蓋 (1~5)

丸みを帯びた天井部に直線的な口縁部が付く。天井部と口縁部との境界は短く突出する。口縁端部はややくぼみ気味に内傾し、先端は外に影らむ。天井部外面は時計回りの回転ケズリをおこない、他はナデ調整する。

無蓋高杯 (15・16)

杯部は口縁部が上外方に伸び、中位に断面三角形の凸縁が施される。(16)はそれより上がやや強く外反する。(15)の口縁端部は内傾し浅くくぼむが、(16)は丸くおさめる。凸縁の直下には、(15)は1条7本、(16)は粗雑な1条4本の波状文を施す。底部は丸く、脚部は杯部の下外方に伸びる。脚部には台形のスカシを3方向に穿つ。

高杯蓋 (6)

口縁部の大部分を欠く。丸みを帯びた天井部の中心に、中央のくぼんだ断面逆台形のつまみがつく。天井部と口縁部との境界は突出する。天井部外面は回転ケズリ、他はナデ調整する。

短頸壺 (18)

強く張った体部から、短い口縁部がまっすぐに立上がる。体部外面は、カキ目とナデにより、内面は横ナデによって調整している。

壺 (17)

口縁部がゆるく外反し、口縁端部は強くヨコナデされるため垂下している。

甕 (19)

頸部は直線的に上外方へ伸び、1条の凸縁を境に口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は水平で

中央が浅くくぼむ。頸部には1条15本の波状文を施す。体部は、中位よりやや上に最大径部があり、最大径部直上には1条8本の波状文と円孔スカシを施す。

土師器

杯 (20~28)

口縁部の形状により3類に分類する。

a類 (20~24)

口縁部は内外面が強くヨコナデされ、外折するもの。

いずれも体部外面をナデと指押えによって、内面をナデによって調整する。

b類 (25~27)

口縁部は内外面がヨコナデされ、直立するもの。

a類と同様に体部外面をナデと指押えによって、内面をナデによって調整する。

c類 (28)

口縁部外面と端部がヨコナデされ、口縁部が内湾するもの。

体部内外面をヨコナデ調整している。

小型杯 (29)

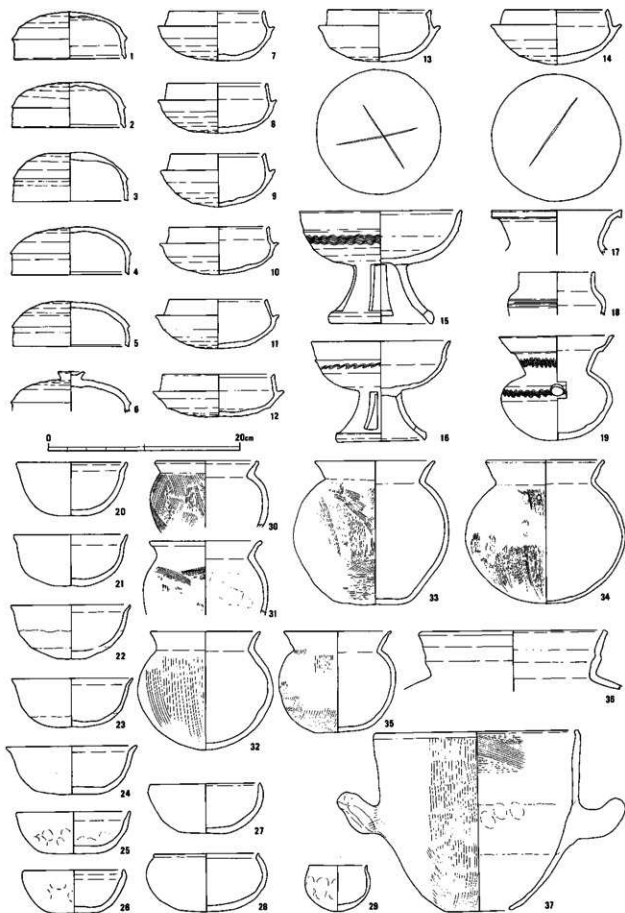
半球形の体部に外湾気味の短い口縁部が付く。体部外面は指オサエ、内面はナデによって調整する。

甕 (30~36)

(31)は体部の張りはそれほど大きくなく、最大径は口径をやや上回る程度である。体部外面は上半を横方向、下半を縦方向のハケ調整する。下半はその後部分的になでている。体部内面は板状工具による横方向のナデによって調整する。口縁部は内外面ともにナデ調整する。

(30)は体部下半を欠く。丸い体部に外折する短い口縁部が付く。体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって調整する。口縁部は内外面ともにヨコナデによって調整し、端部は軽面取りを行う。

(33)は口縁部、体部のごく一部を欠くのみでほぼ完形である。体部は球形に近いが底部は平らである。口縁部はやや外湾しながら外折し、薄くおさめられる。体部外面は底部付近は横方向の、それ以外



第83图 遗物实测图(1) (1:4)

は縦方向のハケ目によって調整を行う。内面はナデと指押え、口縁部はヨコナデである。また口縁部と体部の屈曲部付近にはススが附着している。

甗 (37)

完形である。体部外面は縦、口縁部内面は横方向のハケ目によって調整する。棒状の把手を体部中位に二方向から挿入後ハケ目調整を加える。にぶい黄褐色を呈する。

鎌倉時代の遺物 (第84図)

瓦器

椀 (38-39)

共に底部を欠く。(38)は体部内面にヘラミガキが施されるが、外面にはみられず指圧痕が残る。口縁部は内外面がヨコナデされ、やや外反する。口縁端部には沈線が施される。(39)は摩耗が激しく調整等は不明である。

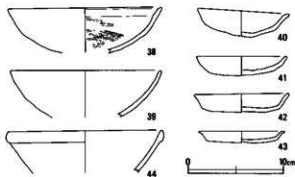
皿 (40-43)

(40)は他に比べて深く、不整形である。調整はいずれもナデによるが、(40)の内面には、ヘラミガキが施されているかもしれない。

磁器

白磁椀 (44)

灰白色の胎土に淡灰黄色の釉薬がかかる。口縁部径の1/6ほどの残存率である。口縁部は玉縁である。



第84図 遺物実測図(2) (1:4)

遺物	遺物番号
S B 2	12-21
S B 3	17
S B 8	18-25-26-31
S B 8-P 1	24
S B 9	1, 6, 7, 30-33
S B 11-P 1	15-37
S B 16-P 1	34-36
S B 17	2-5-8-11-13-14-16-19-20-22-23-27-29-32-35
S B 15	
S B 21-P 1	38
P 2	42
P 3	43

第10表 出土遺物構成対照表

出土位置	須恵器					土師器	
	杯身	杯蓋	高杯	ハソウ	甗	杯	甗
カマド付近						1	1
北東半	3	2				1	1
P 1付近	4	2	1		1	4	2
その他	1	1				3	1
合計	8	5	1	1	1	9	5

第11表 S B 17出土遺物集計表

4. 結 語

古墳時代出土須恵器の型式は、TK4^②を中心としたものと考えられ、6世紀前半に比定できよう。ただし、S B 2~6のなかで、最も残存状況が良く、切り合い関係からも比較的新しいものと考えられるS B 2からは、偏平な底部など後出の要素を持つ杯身が出土しており、遺構の状況と合致している。

20棟の壜穴住居が検出されたが、S B 2~6の重複を考慮すると併存は4~5棟程度であろうか。

さて、この調査で最も注目されるのは、焼失住居S B 17である。上部の削平のため家屋の構造等は明らかにできなかったが、杯等の比較的高さの低い形

【註】

① 中嶋千年「阿山郡伊賀町垣内遺跡」『昭和63年度農業基礎整備事業地産地消財発掘調査報告-第1分冊-』三重県教育委員会 1989

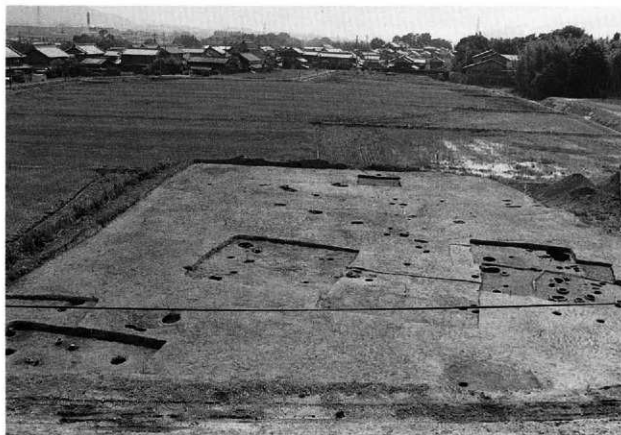
式を中心に原位置またはそれに近い状況で遺物が出土しており(第11表)、住生活の復元に役立つものと思われる。また、食生活の面からは、須恵器中の残存内容物の分析結果が待たれる。

鎌倉時代の出土瓦器椀は、底部を欠き、体部の調整も明瞭ではないが、体部外面にヘラミガキが施されていない点、口縁端部に沈線が施されている点、皿が存在している点から、Ⅱ段階第4型式からⅢ段階第1型式への過渡期にあると理解され、13世紀初頭から前半に比定できよう。(鈴木克彦)

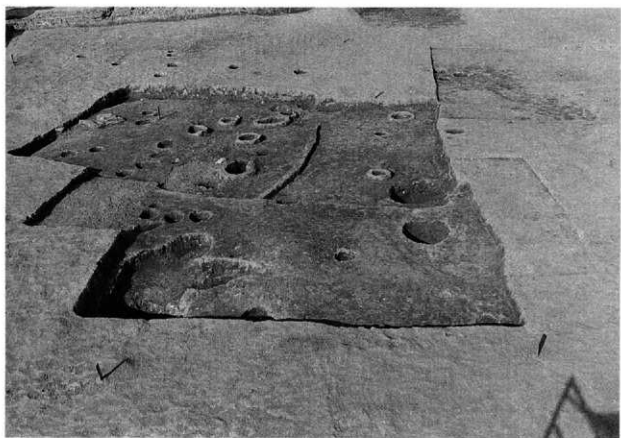
② 田辺昭三『陶器古窯址群 I 平安学考古学クラブ 1966

③ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」

『中近世土器の基礎研究』II 日本中世土器研究会 1986



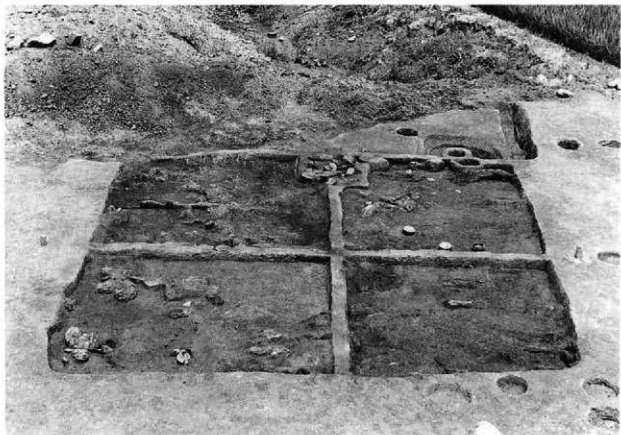
遺跡西半部（東から）



SB2~6（西から）



SB16~20 (西から)



SB17発掘状況 (南から)



SB17調査後 (東から)



SB11-P 1 遺物出土状況 (東から)



SB17-P 1 遺物出土状況 (東から)



出土土器 (約1:3)



土器3内容物 (約1:2)



土器11内容物 (約1:2)

XV 上野市印代^{いじろ}東方遺跡群、^{ではれ}出晴遺跡

立会い調査のまとめ

印代東方遺跡群

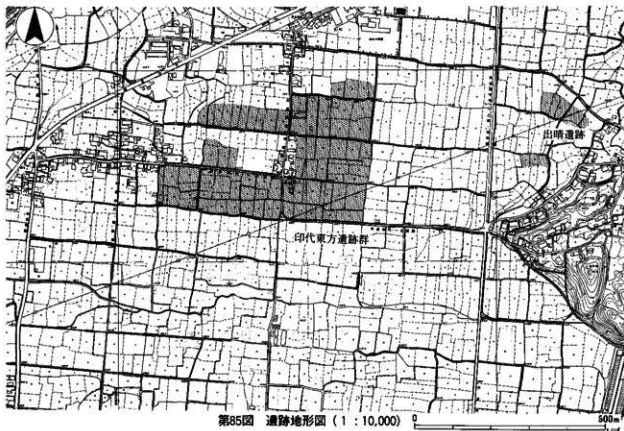
印代東方遺跡群は、上野市印代字堂木・沖・城ノ前に位置し、事業地内の遺跡範囲は128,000㎡に達する。今回県営排水特別対策事業及び県営は場整備事業に先立ち、排水路予定地内に調査区を2ヶ所設定し立会い調査を行った。調査面積は合計1,810㎡で、期間は平成2年9月10日～10月1日である。便宜上北より第1区、第2区とする。結果は以下の通りである。

〔第1区〕市道東条・羽根線より西は表土下約60cmで淡褐色粘質土の地山に、東は後世の瓦粘土採集のため地山が削られた所も見られたが表土下約60～80cmで、淡褐色粘質土または青灰色砂質土の地山に至る。地山上に淡灰色砂質土または淡灰黄砂質土の遺物包含層が認められ若干量の須恵器片、土師器片、

瓦器片が出土したが、遺構は認められなかった。

〔第2区〕表土下50～60cmで褐色砂質土から褐色す土の地山に至る。地山上より土坑2基、溝1条、数個のピットが検出された。土坑2より弥生時代の中期後半の甕の口縁片(1)、後期の甕の体部片(2)、後期の器台または高杯の脚部片(3)が出土した。また淡褐色砂質土の包含層より、縄文時代のミニチュアの鉢(4)、弥生時代の甕の底部片(5)、甕の底部片(6)、平安時代の土師器杯(7.8)、皿(9)、甕(10.11)、器種不明の土師器(12)が出土した。(12)の土師器は内面に煤、外面に煮こぼれのような痕があるため、煮沸の際に使用された可能性がある。他に須恵器片、瓦器片、陶器片が出土している。

これらのことから、本遺跡は、縄文時代～中世にかけての遺跡であり、今回の調査区は本遺跡の周辺



部にあたると思われる。

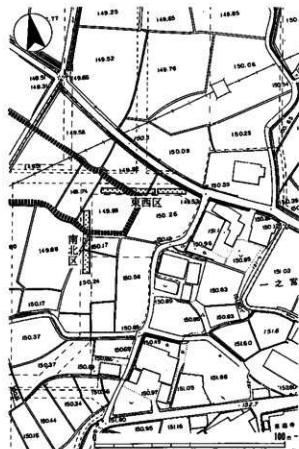
出晴遺跡

出晴遺跡は上野市一ノ宮字出晴にある。県営は場整備事業に先立ち、排水路予定地に調査区を設定し立合い調査を実施した。調査面積は152㎡、調査日は、平成2年10月5日である。2ヶ所の調査区が直角に交わるため便宜上、それぞれを東西区、南北区とする。結果は以下の通りである。

〔東西区〕耕作土下80cm～1m程で黄灰褐粘土または青灰色粘質土の地山に至る。遺構は認められず、遺物もごく微量の土師器片、瓦器片が見られたにすぎなかった。

〔南北区〕耕作土下60cm程で褐色砂土の地山に至る。中世の土坑1基。溝2条、数個のピットが検出された遺構である。遺物としてはごく少量の土師器片、瓦器片が認められたにすぎなかった。

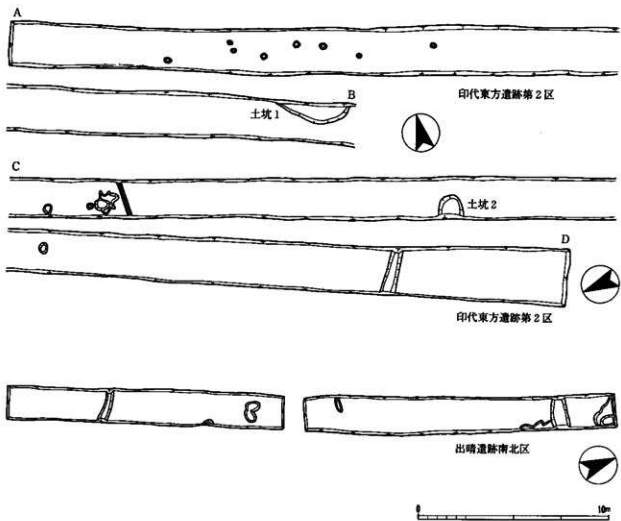
これらのことから本今回の調査区は本遺跡の周辺部であると思われる。 (湘田隆長)



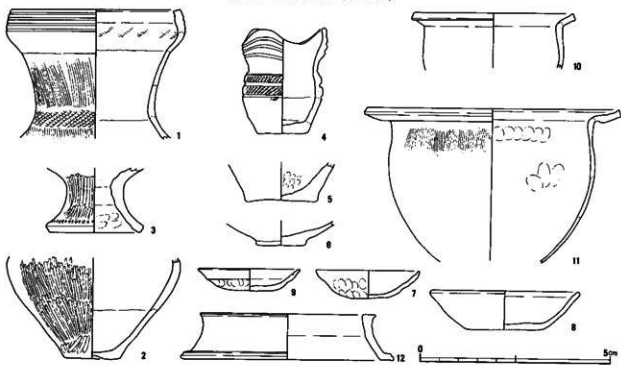
第86図 出晴遺跡調査区位置図(1:2,000)



第87図 印代東方遺跡群調査区位置図(1:2,000)、黒塗部は試掘坑



第88图 遺構平面圖 (1 : 200)



第89图 遺物実測圖 (1 : 4)



印代東方第1区調査後全景



印代東方第2区調査後全景（南から）



印代東方第2区調査後（西から）



出晴南北区調査後全景（北から）

XV 上野市上友生 宮山・堂ノ前遺跡

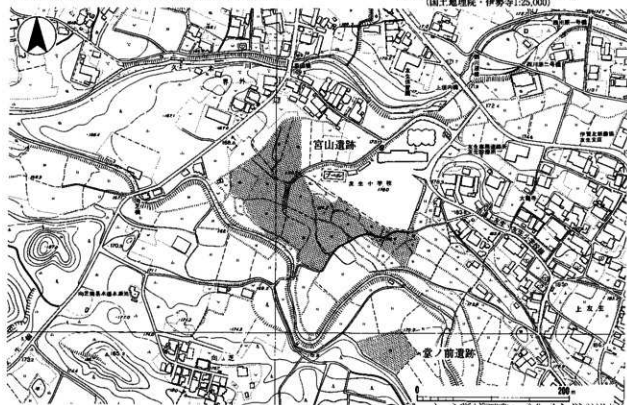
立会い調査のまとめ

宮山遺跡 宮山遺跡は、上野市上友野字宮山にある。今回県営は場整備事業に先立ち削平をうける部分に調査区を設定し立会い調査を行った。主たる調査区は友生小学校の南側斜面の水田で田面の高さに差があるため、水田ごとに地区を設け調査をおこなった。便宜的に東からA～J区とする。その結果、遺構・遺物共に認められたのはC区のみであり、他は耕作土下50～80cm程で、それぞれ黄褐色レキ混り土(B、J区)、黄褐砂質土(A・D・I区)、青灰色砂質土(E区)褐灰粘土(F・G・H区)の地山に至った。このため以下ではC区についてのみ記述する。

[C区] 耕作土下60～70cmで黄褐灰色砂質土の地山に至る。一辺1.8m程の隅丸方形を呈する土坑1基、幅50cm程の溝1条、ピット数個が確認された。土坑



第90図 遺跡位置図 (1:50,000)
(国土地理院・伊勢寺1:25,000)



第91図 遺跡地形図 (1:5,000)

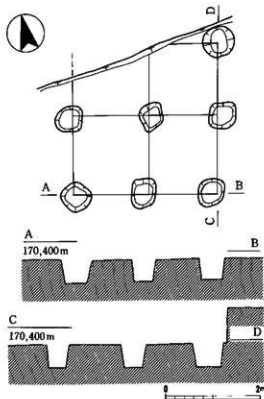
1 (SK1) より瓦器片、土師器皿片などが出土した。また、ピットより山茶碗底部片が出土している。本遺跡は平安時代末～鎌倉時代初頭に営まれた集落跡であると考えられる。

堂ノ前遺跡 堂の前遺跡は、上野市上友生字堂ノ前にある。立地としては西流する古野川が大きく蛇行してでき上がった台地の末端部に位置している。今回県営は場整備事業に先立ち、事業地内に調査区を4ヶ所設定し立会い調査を実施した。調査面積は230㎡、調査期間は平成2年10月15日～10月17日であった。結果は以下のとおりである。

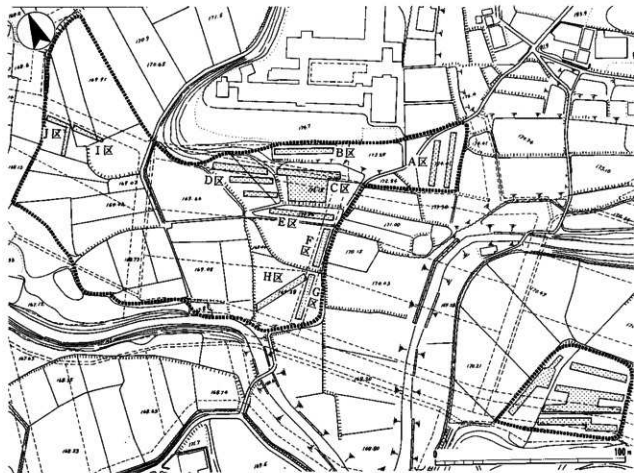
耕作土下0.8～1mで黄灰色褐色粒混入粘質土の地山に至る。2×2間の総柱掘立柱建物 (SB1)、4×2間の総柱建物 (SB2) が主な遺構である。なかでもSB1のピットは60～70cm程のややくずれた隅丸方形を呈している。遺物としては奈良時代の須恵器杯身片、土師器片や瓦器碗片などがある。

本遺跡は奈良時代～中世の集落跡であるといえる。

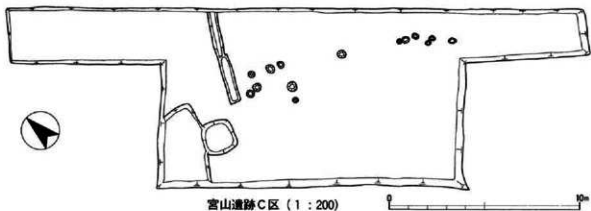
(編田隆長)



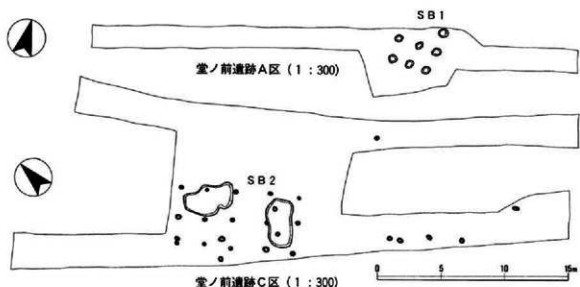
第92図 堂ノ前遺跡 SB1 実測図 (1:80)



第93図 発掘区平面図 (1:2,000)



宮山遺跡C区 (1 : 200)



堂ノ前遺跡A区 (1 : 300)

堂ノ前遺跡C区 (1 : 300)

第94図 遺構平面図 (1 : 200)



宮山遺跡調査後全景 (北東より)

平成3(1991)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告94-1

平成2年度農業基盤整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

-第1分冊-

1991年3月

編集 三重県教育委員会
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社
